

靈界物語 第七六卷 天祥地瑞 卯の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十六卷』天聲社

1981(昭和56)年04月01日 改装版發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

日本所傳の天地開闢説 にほんしよでん てんちかいびやくせつ

支那の開闢説 しな かいびやくせつ

波斯の宇宙創造説 ペルシヤ うちうさうざうせつ

希臘の天地開闢説 ギリシヤ てんちかいびやくせつ

エジプトの開闢説 かいびやくせつ

メキシコナフア族ぞくの天地創造説てんちさうざうせつ

マヤ族ぞくの萬物創造説ばんぶつさうざうせつ

北歐ほくおうに於ける宇宙創造説うちうそふぞうせつ

太平洋西北岸創造説たいへいやうせいほくがんさうざうせつ

英領北亞米利加創造説えいりやうきたアメリカさうざうせつ

阿弗利加神話アフリカしんわ

ヘブライ天地創造説てんちさうざうせつ

パレスチン創造説さうざうせつ

ミクロネシア創造説さうざうせつ

インドネシア創造説さうざうせつ

第一篇 春風駘蕩しゆんぷうたいたう

第一章 高宮參拜たかみやさんぱい（一九一八）

第二章 魔の溪流まのけいりゅう（一九一九）

第三章 行進歌かうしんか（一九二〇）

第四章 怪しの巖山あやしないはやま（一九二二）

第五章 露の宿つゆのやど（一九二二）

第二篇 晚春の神庭ばんしゆんしんてい

第六章 報告祭ほうこくさい（一九二三）

第七章 外苑の逍遙ぐわいゑんせうえう（一九二四）

第八章 善言美靈ぜんげんびれい（一九二五）

第三篇 孤軍奮闘こぐんふんとう

第九章 闇の河畔やみのかはん（一九二六）

第一〇章	二本松の蔭 (一九二七)
第十一章	榮城の山彦 (一九二八)
第十二章	山上の祈り (一九二九)
第十三章	朝駒の別れ (一九三〇)
第十四章	磐楠舟 (一九三一)
第十五章	御舟巖 (一九三二)

序文

本巻は總説において、東西兩洋各國に傳はる宇宙創造説や天地開闢説を列擧し、以て吾が説示せる『天祥地瑞』の宇宙創造、天地開闢説と比較して、其の深淺と眞偽を判別すべくものしたり。

また本文においては、高地秀の宮居に仕へませる八柱の御樋代比女神等が、は

るばると紫微の宮居なる天津高宮に打ち揃ひて参向し、強雄なる二柱の男神を主の神に請ひて派遣を得、再び筑紫の宮居に歸りまし、報告祭を行ひ給ひけるが、其の中の一柱の御樋代比女神たる朝香比女の神は、顯津男の神の長く歸りまさぬをもどかしく思召し、諸神の止むるをも聞かず、單騎荒野ヶ原を打渡り、到る處曲津見の災を打ち被ひつつ、榮城の山に立ち寄り、眞賀の湖水を難なく渡り曲津見を征服し、狭野の里の國津神等に火食の道を教へ給ひつつ、西方の國土を指して國津神狭野比古を従へ、立ち出で給ふまでの物語なり。

昭和八年十二月八日、舊十月二十一日

於水明閣 口述者識

言靈學上の見地より、皇典古事記の包含せる眞意義を解釋し、以て皇道の大本を普く江湖に知らしめむとして本書を著述する事とせり。天地開闢や宇宙創造の説に就ては、東洋は更なり、歐洲亞細亞等の宗教又は史詩に散見すれども、太古未開の人の想像力より生れたるもの多く、何れもその眞相を把握するに苦しまざる可からず。皇國言靈學の上より見たる天地開闢宇宙創造の説に比ぶれば天地霄壤の相違ある事を比較して、本書の前古未曾有なる神書なる事を示さむと欲し、茲に各國の神話傳説を列記して諸士の參考に供せむと欲するものなり。先づ皇國日本より例證を擧げむとす。

日本所傳の天地開闢説

古へ天地未だ剖かれず、陰陽分れず、萬物未だ成らざりし時の状は、譬へば、



浮かぶ 脂の 大海原の 面に 漂うて、 かかる 所もない 如く、 渾沌として 鷄子の 黄白の  
散り 亂れて 混ざれる やうに、 形状も なければ、 また 區別も つかず、 溟滓にして 牙  
を含むの 状態であつた。

然る 後に、 軽く 清める 氣は 漸く 昇りて 清陽なる に 及び、 薄く 靡きて 天と 成り、  
重く 濁れる ものは 自ら 沈んで 濃く 滯りて 地となつた。

其は じめに 成りたる 天を 高天原といひ、 後に 定まれる 地を 國といふ。 天地の間  
に 大虚ありて 空しく 懸る。

天地開闢のはじめ、 國なほ 稚く 砂土 浮き 漂うて、 海月の 海水に 泳げる 如くに 浮  
脂の 水の上 に 漂へる が 如く、 未だ 固まらざりし 時に、 葦牙の 如き 物、 自ら 中  
に 成り出でて、 その 物は 萌騰りて 大虚の 中に 發りたる によりて、 高天原に 生り出  
で 給へる 最初の 神を 天讓日天 狹霧國讓月國 狹霧尊と 申し奉る。 天祖と 稱し奉るは  
即ち 此の 神である。

然る 後に 高天原に 自ら 化り出で 玉へる 神たちの 中に、 獨り づづ 化り出で 玉へる  
を 獨化天神と 申し、 二柱 俱に 化り出で 玉へる を 俱生天神と 申し、 男神と 女神と 共

に化り出で玉へるを耦生天神と申し奉る。また別に化り出で玉へる神たちを別天神と申し奉る。

神代七代

天地が開け初めた時に、高天原に化り出でし神は、

第一に 天之御中主神

第二に 高皇産靈神

第三に 神皇産靈神

以上三柱神であつた。此の神々は皆配偶の無い獨神であつて、其後御身を見えぬ

やうに隠し玉ふた。

國土未だ定かに成り整はずして恰も脂の浮ける如く、海月の海水に浮けるが如き状態であつた時、蘆の芽の如うに萌え出でて成らせ給うた神は、

第四に 宇麻志阿斯訶備比古遲神

第五に 天之常立神  
である。此二柱神も亦同じく獨神で、其後も依然として御身を見えぬやう隠し玉  
うた。

以上五柱の神を別天神と申し上げる。

その次に成らせ給うた神は、

第一に 國之常立神

第二に 豊雲野神

此の二柱の神も亦獨神で御身を隠された。其の次に生れ坐せし神は、

配偶の神々で、

第三に 宇比地邇神 女神は須比智邇神

第四に 角杙神 女神は活杙神

第五に 意富斗能地神 女神は意富斗能辨神

第六に 淤母陀琉神 女神は阿夜訶志古泥神

第七に 伊邪那岐神 女神は伊邪那美神

以上國之常立神より伊邪那美神までを神世七代と申すなり云々。(以下省略)

## 支那の開闢説

太初には何物も存在して居なかつた。只一種の氣が濛々として廣がり満ちて居ただけであつた。さうして居るうちに其中に物の生ずる萌芽が始まつて、臚て天と地が現はれた。天と地とは陰陽に感じて盤古といふ巨人を生んだ。盤古が死ぬ時に其體が色々のものに化して、天地の間に萬物が具はるやうに成つた。則ち息は風雲となり、聲は雷となり、左の眼は太陽となり、右の眼は月となり、手足と體とは山々となり、流るる血潮は河となり、肉は土となり、髪の毛や髭は數々の星となり、皮膚に生えてゐた毛は草や樹となり、齒や骨は金屬や石となり、汗は雨となつた。又他の神話によると、盤古が死ぬと、その頭は四嶽となり、二つの眼は太陽太陰となり、脂膏は流れて河や海となり、髪の毛は化して草や木と成つたと傳へてゐる。

また更に他の神話によると、盤古の頭が東嶽に化し、腹が中嶽に變じ、左の臂が南嶽となり、右の臂が北嶽となり、足が西嶽となりしとも傳へてゐる。

## 天地の分離

太初には天と地とが相混つて、まるで鶏卵の如うにフワフワとしてゐた。その中に盤古といふものが生れて來ると、初めて天と地との差別が出來て、清いものは天空となり、濁つてゐるものは大地となつた。

その後は、天空も大地も、それからこの二つの間に生れた盤古も、段々と生長して行つた。

天は一日に一丈づづ高さを増して行き、地も同じく一日に一丈づづ厚さを加へて行つた。そして、其間に挟まつてゐる盤古も劣らじと、一日に九度姿を變へながら、同じく一丈づづ背が延びて行つた。さうして居る内に、一萬八千年といふ永い年月が經つた。その間に盤古の身の丈が延びに延びて九萬里となつた。九萬

里といふ恐ろしいノツポーが天と地との間に挟まる事になつたので、元々相接してゐた此の二つが、九萬里ほど隔たつて了つた。

天空と大地との間が今日のやうに遠く離れてゐるのは、全く是が爲であるといふのである。

ニユー・ジーランドの神話に、タネマフタといふ木の神が、相接してゐる天と地とを押し分けたといふことを説いてゐる。盤古神話はこれと頗る趣を同じうしてゐる。それから、世界樹の觀念も支那に存して居たらしい。スカンディナヴィアの神話に、イグドラジルといふ大樹があつて、上は天界に至り、下は死界に根を張つてゐると云はれてゐる。かやうな樹を世界樹と呼ぶのであるが、支那にも之に頗る類似した説話が存してゐる。

『太平御覽』の言ふ所によると、支那に一本の大きな扶桑の樹があつた。枝が無くてスクスクとどこ迄も大空に伸び上つて居た。そして上は天盤に至り、下は屈りくねつて三泉に通じてゐたと言ふのであるから、之を目して支那のイグドラジルとなしても決して不當ではない。従つてまた之を一種の世界樹と呼んでも、

敢て比倫を失してゐる譯でもないだらう。

## 波斯の宇宙創造説

世界の初めにアフラ・マズダと言ふ尊い神とアングラ・マイニウと言ふ邪惡な精靈とがあつた。アフラ・マズダは限りなき光明の世界に住んで居り、アングラ・マイニウは涯もない暗黒の深淵に住んでゐた。そして其の光明の世界と暗黒の深淵との間は、何一つも存在しない空の空であつた。

アフラ・マズダは種々の生物を造り出した。併し始めは目に見える形を持つてゐなかつた。この尊い神は、自分が造り出した總ての生物を、三千年の間考へること無ければ、動くことも無い無形の靈の姿にして置かうと思つたのであつた。邪惡なアングラ・マイニウはアフラ・マズダが色々な生物を造り出したと言ふことを聞き込むと、

『何を小癩な、おれがアフラ・マズダの世界に行つて何もかも叩きつぶしてやる』

と言つて暗黒の深淵から脱け出して光明の世界にやつて来た。併しいよいよアラ・マズダの所に来て見ると、威儀堂々として力が強く徳が高かつたので、  
「これは驚いた、とてもおれなんか敵ひさうにない」  
と始めの凄じい勢ひはどこへやら、這々の體でもとの暗黒世界に逃げ歸つた。そして、

「アラ・マズダがあんなに偉くては、おれ一人の力では何うする事も出来ぬ。よし、おれを助けてくれるものを造ることにしよう」  
と言つて數々の悪魔をこしらへた。

アラ・マズダは早くも光明世界からそれを見てとつて、  
「今のうちに何とか片を付けて置かねばならぬ」  
と思つた。そこでわざわざ暗黒世界に降つて行つてアラ・マイニウに會つて、  
「お前や、お前がこしらへた生物は壽命に定まりがあるだろう」  
と言つた。

アラ・マイニウは口惜しさうな顔をして、



「さうだよ、それがどうしたと言ふのかね」と言つた。

「どうぞや、わしが造り出した總ての生物を助け讃へて呉れないか、さうしたら、お前にも、お前のこしらへた生物にも、不滅の命を與へることにしてやるが……」とアフラ・マズダが温順しく相談を持ちかけると、アングラ・マイニウは凄まじい聲で唸り出して、

「それは御免を蒙むらうかい。わしはお前のこしらへた生物を助けたり讃へたりすることは出来ぬ。わしは彼等を滅ぼして了ふか、それともお前の許を離れて、わしの心に靡くやうにするつもりだ」

とどこまでも挑みかかった。併しアフラ・マズダは落ちついた様子で、

「それでは、わしたちはめいめい自分の好きなやうにするより外は無、わしたちはお互に争ひ合ふまでぢや。併しいつまで争つてゐても仕方がない。どうぞや、争ひの期限をきめようではないか」

と言つた。よからうとアングラ・マイニウが應じた。

『では其期限を九千年としようではないか』

とアフラ・マズダが言った。よかろうと又アングラ・マイニウが答へた。

アングラ・マイニウは九千年を過ぎても自分の勢力がまだ続くものと思つて、ウカと斯んな約束をしてしまつたのだが、尊い神にはチャンと未來の見透しが付いてゐるのであつた。始めの三千年の間はアフラ・マズダの思ふことが何でも叶ふのであつて、邪惡の靈はこれを妨ぐる事が出来ぬ。次の三千年の間は二人の思ふことが互にかち合つて、どちらもうまく行かぬ。そして最後の三千年の間に、邪靈アングラ・マイニウは全然アフラ・マズダに征服されてしまふのを看破つてゐるのは尊い神だけであつた。

始めの三千年が間はアフラ・マズダが拵へた生物は、何の害も受けないで、無形の靈潛める力として生き續けた。その時期がをはるとアフラ・マズダは形のあらゆる種々の物を造り始めた。彼は先づ天空を造り、次に星を造つた。星の数は六百四十八萬に及んだ。アフラ・マズダは、それらの星を夫れ夫れ大空の四方に配つて、四人の首領に司配させることにした。東の方の首領はチシュトリアと呼ばれ、

西の方の首領はサタヴェースと呼ばれ、南の方の首領はヴァナンドと呼ばれ、北の方の首領はハブトク・リングと呼ばれる。星くづが出来上ると、アフラ・マズダは次に月を拵へて、それから太陽を拵へた。

その間邪靈アングラ・マイニウは昏昏として眠り續けて居た。ジャヒと呼ばれた女性の悪魔がそれを見て、

「どうも仕方が無いナア。アフラ・マズダはどしどし色々な物を造り出してゐるのに、うちの首領は暢氣に眠りこけてゐる」

と頻りに氣を揉んでゐたが、たうとうたまり兼てアングラ・マイニウの側に驅けつけて、

「お首領お起き下さい、わたしたちは、この世界に騒動を起さうではありませんか」

と叫んだ。

併しアングラ・マイニウは内心アフラ・マズダが恐いので、女魔の呼ぶ聲に目を覺ましても依然眠つたふりをして居た。ジャヒは氣を苛つて、

『お首領、早く起きて下さい。アフラ・マズダが勝手なことをして居ますよ。早く邪魔をしてやりませう』

と叫んだ。そして女魔が三度叫ぶと、三度目にアングラ・マイニウがむつくと起き上った。そしてジャヒの頭に接吻をしながら、

『そなたは、わしに、何か望むことがあるのかね』  
と尋ねた。

『エエさうですよ、若い男の姿が見たいのですよ』

と女魔が答へた。と、其の言葉が終るか終らないうちに、魔王アングラ・マイニウの姿は十五歳の男に變じた。女魔は大に喜んで、

『サア、直ぐに天界に行つてアフラ・マズダの仕事の邪魔をしてやりませう』  
と言つた。

『よし、承知ぢや』

アングラ・マイニウは斯う叫んで、數多の悪魔どもを引き連れて、まつしぐらに天界目ざして驅け出した。彼は天空を見ると、

「ほう、おれの知らぬ間に變なものが出来たな」  
と言つて蛇のやうにそこに躍り込んで行つた。空は狼に襲はれた羊のやうに、顫ひ戦いた。勢ひに乗つたアングラ・マイニウは、アフラ・マズダが造り出した總てのものに飛びついて行つて、片端からそれを傷つけ汚した。見る間に世界が暗黒になつた。

「ウマイウマイ、今度は斯うしてくれるぞ」

とアングラ・マイニウは數多の惑星を拵へてアフラ・マズダの任命した星座の首領たちに対抗させた。惑星は凄まじい勢ひで、神が造つた星くづにぶつつかつて行つたので、満天の星どもは駭き畏れて、右往左往に逃げ惑うた。アフラ・マズダに率ゐられた天使の群アメシヤ、スペンタヤザタたちは天下の一大事と、必死となつて邪靈に率ゐられた惡魔の群と戦つた。そして大小の惡魔どもを引つ摑んで、天界から暗黒の深淵へと投げ落とし續けた。

全世界を揺り動かすほどの激しい戦ひが晝を九日、夜を九夜行はれた。さうしてあるうちに大空に堅固な壘壁が築き上げられたので、さすがの惡魔軍も最早手

の出し様がなくなつて、スゴスゴ暗黒世界に引返して了つた。

戦ひが止むとアフラ・マズダは復創造の仕事を續けた。尊い神は、今度は數多の水の流れを拵へた。是等の流れは一所に集まつてヴールカシャ（廣大なる深淵）と言ふ海となる。ヴールカシャ海はアルブルズ山の南の果に當つて大地の三分の一を占めてゐる。それは一千の湖の水を含んでゐると信じられた。

世界の所在水はアルドヴィ、スーラー、アナーヒタ（潤ひて強く且つ汚れ無きものの義）といふ泉から流れ出る、その流れ出た水は數多の河となつて大地をうるほすのであつた。

邪靈アングラ・マイニウは是を見ると、復むらむらと惡氣を起して、旱魃の惡魔アバオシヤを呼び出して、

「お前、天界に上つて、水の流れの邪魔をしてやれ」

と言ひつけた。アバオシヤは直ぐに天界に上つて行つた。そして夏の閒大地に水を惠むことを司どつてゐるチシュトリアの所に來て、流れを堰き止めようとして、二人の間に烈しい争ひが起つたが、たうとうアバオシヤの力が盡きて天界から投

り出された。

アフラ・マズダは更に創造の仕事を續けて、今度は新たに大地を造ることにした。尊い神は先づチシュトリアに言ひ付けて、古い大地の上に大雨を降らせた。忽ち大地は一面の水となつて、邪惡な生物の毒をすつかり洗ひ淨めた。水が減くにつれて三十三種の陸地が造られた。尊い神はこれを七つの部分に分けることにした。それを見た邪靈アングラ・マイニウは、

「アフラ・マズダ奴、色々の物を造り出すな、癩にさはる奴だ、一つ邪魔をしてやらう」

と言つて、大地の腹の奥に潛り込んだかと思ふと、内側から激しく之を揺り動かしたので、今まで平坦であつた大地の所々に大きな山が出来た。眞先に出来上つたのが、アルブルズ山であつた。この山が現はれると、大地の所々がそれにつれてムクムクと動き出して、さながら大きな樹のやうに雲を貫くほど聳え立つた。次にアフラ・マズダは種々の草木を拵へることにした。天使の群アメシヤ、ス Pent の一人である、アメレタートが尊い神の仰せを受けて、ありとある植物を

細かに搗き碎いて、それを水に溶かすと、狼星がその水を普く大地に撒き散らしたので、やがて人間の頭に髪の毛が生えるやうに到る所に草木が芽を出した。その中の一萬の草木は、邪靈アングラ・マイニウが生物を苦しめるために造り出した一萬の病氣も逐ひ退けるに足る力を持つてゐた。

大海ヴールカシヤのただ中には特に「あらゆる種を含む樹」が生え出した。大地に現はれた總ての草木が、いつまでも絶え果てないやうにと言ふアフラ・マズダの有難い考へからである。それから又「あらゆる種を含む樹」の側に尊い神はガオケレナ（牛角の義）と言ふ植物を生ひ出でしめた。この植物はあらゆる草木の首領で、これを口にするものは悉く不滅の命を得るのであつた。尊い神は宇宙をいつまでも生々とさせて置かうと思つて、此の靈樹を造り出したのであつた。

之を見て邪靈アングラ・マイニウは甚く機嫌を悪くして、  
「アフラ・マズダの奴、ほんたうに癩にさはる事ばかりしでかすな。よし、おれがああ樹を枯らしてやるぞ」  
と言つてヴールカシヤ海の水底深く一匹の魔の蜥蜴を造り出した。



蜥蜴はガオケレナの根を咬んで、いつかはそれを枯らさうとしてみたのを、尊い神は早くもそれを悟つて、カルと言ふ魚を十尾拵へて魔の蜥蜴に當らせることにした。十尾のカル魚は、交る交る蜥蜴の側を泳ぎ廻つて、ガオケレナの根の咬まうとする、と直ぐに飛びかかつて行くのであつた。

次にアフラ・マズダは火を拵へて世界を喜ばした。良いものの現はれるのが大嫌ひの邪靈アングラ・マイニウは復ひどく腹を立てて、

「アフラ・マズダの奴、また變なものを造つたな。よし、今度だつて邪魔をしないで置かないぞ」  
と言つて火が燃える時には、いつも厭な煙が出るやうにした。

次にアフラ・マズダは種々の動物を造ることにした。尊い神は素晴らしく強く、美しい一頭の牛を拵へた。この牛には總ての動物の種が含まれてあつた。邪靈アングラ・マイニウは、それを見ると目の色を變へて、

「また厭なものを造りをつたな、こりや依然としては居られないぞ」  
と直にこの牛の側にノコノコやつて來た。アフラ・マズダは彼の姿を見ると、

「あの男、またわしの仕事の邪魔をしに來たな」

と思つて、大急ぎでビーナークと言ふ靈妙な果實を摺り潰して牛に食べさせた。

果實の不可思議な力によつてアングラ・マイニウの邪惡な災を防がうとしたので

ある。併しアングラ・マイニウが牛の側にやつて來て、凄目で見据ゑて

居ると、牛はやがて病に罹つて次第に瘦せ衰へて、遂に最後の息を引き取つて終

つた。と思ふと、牛の靈魂ゲーウシユ・ウルヴァンが、その體からスルスルと脱

け出して、アフラ・マズダの許にやつて來た。そして一千の人間が一度に叫び出

したやうな大きな聲で、

「邪惡なアングラ・マイニウが勝手なことをしてゐるのに、あなたは どうしてぢ

つとして居られるのです。いつぞやあなたは、偉い男を拵へて、すべてのものを

保護させてやると仰せられたが、その男はどこに居るのです。今のやうにアング

ラ・マイニウが悪いことをしてゐては、わたしは種々の動物を養ひ育てて行くこ

とは出來ませぬ」

と言つた。

これを聞くときとアフラ・マズダは眉をひそめて、

「わしは確に偉い男を拵へてやると言つたが、まだ時が来ないのぢや」

と答へた。併し牛の靈魂は、この答に満足することが出来なかつたので、星の世に歩いて行つて、先のやうに大きな聲で叫び續けた。

餘りにその聲が大きいので、月や太陽のある所までガンガン鳴り響いた。さうして居る間にたうとう時機が来たので、アフラ・マズダは牛の靈魂に對つて、

「モウ安心するがよい、ゾロアステルと言ふ偉い豫言者を、この世に送り出すことにしたから」

と言ふと、ゲーウシユ・ウルヴァンはやつと安心して、ありとある動物を養ひ育てて行くやうになつた。

暫くすると、死んだ牛の體から五十五種の穀物と十二種の藥草が生え出した。

アフラ・マズダがそれを月の許に送ると、月はおのが光でその種を淨めた。その種子から一匹の牡牛と一匹の牝牛とが生れ、それから二百八十二種の動物が生れた。アフラ・マズダは獸を大地に棲ませ、鳥を空中に棲ませ、魚を水中に棲ませ

ることにした。此の如くにして、尊い神アフラ・マズダは邪靈アングラ・マイニウに度々仕事の邪魔をされながら、たうとう宇宙創造の大事業を完成した。

## 希臘の天地開闢説

ギリシヤの天地開闢説は古來種々の傳承があつて、人々によつて區々である。併し大體から言へばユダヤの神話にある如き世界創造説ではなく、支那の神話に見ゆる如き天地開闢説である。即ち此の世界は造られたものでなく、幾萬年の時代の變化を経て、次第に現在の状態になつたものである。従つて神々も世界よりさきに存在したのではなくて、神々自身も亦此の世界と言ふ一家族のうちに生れて來たものである。

天地開闢の神話は、それを語り傳へた詩人によつて區々である。ホメロスによれば、口で尾をくはへた蛇のやうに海と陸とを取りまいてゐる廣大無邊の大河オケアノスが萬物の本源で、また總ての神々の父であつた。また他の傳説によると、

「夜」と「闇」が世界の根源で、そのうちから光が生れたといつてゐる。更に詩人オルフエウスが傳へたと言はれてゐる説によると、世界の始めには無始無終の「時」があつて、これから「カオス」と言ふ底なしの淵が生れ、其の深淵の中で「夜」と「霧」と「精氣」が育くまれた。その中に「時」は「霧」を動かして中心なる「精氣」のまはりを、獨樂のやうに廻轉させたので、世界は大きな卵のやうな塊團になり、それがまた廻轉の速力でまづ二つに割れて、一つは昇つて天となり、一つは降つて地と成つた。そして其卵の中からは「愛」をはじめ、いろいろなる不思議なものが生れたと言ふのである。

併し世界と神々の起源を述べたものの中で、一番纏まつてゐるのはヘシオドスの「テオゴニヤ」（神統記）であつた。「テオゴニヤ」によると、萬物の始めには「カオス」があつた。次に廣い胸を持つた「ガイヤ」（地）と地の底なる暗黒の「タルタロス」と不死の神々の中で一番美しいエロス（愛）が出来た。「カオス」は（口をあいた場所）といふ意味で、其内部は眞黒な霧で満されてゐた。「カオス」の次には地が出来て、雪をいただくオリムポスの絶頂に住むべき神々

の安全な座位となつた。けれどもまだ空も海も山々もなければ、晝や夜もなかつた。堅い地の外には何物もなかつた。その次に現はれたのが「エロス」であつた。エロスは男性と女性とを結びつけて新らしい世代を生み出ださせる愛の力であつた。

次に「カオス」からは、地下の闇なる「エレボス」と遠い日没の國に住んでゐる地上の闇なる「夜」が生れた。「エロス」は「夜」と「エレボス」とを結び付けて其間に二人の子を生ませた。天の光なる「精氣」と地の光なる「晝」である。次に「ガイヤ」即ち母なる地は「エロス」と接觸して「ウラノス」（星の多い天）と廣大な山々と「ボントス」（荒い海）を生む。「ウラノス」と「ガイヤ」（天と地）はこの世界の最初の主宰者として、次の世代の神々の父母となつた。

ヘシオドスの記事は斯くの如き幼稚なものであるが、併しギリシヤの開闢神話の中では、これらが代表的なものである。勿論この開闢説の中に、どれほど深い哲學的思想の芽が包まれてゐるかは、問題ではないのである。

## 神々の世代

ギリシヤの神話は、この世界を支配する神々の世代をほぼ三つに分つてゐる。天地萬物が生じて、第一に此の世界の主宰者となつた神は「ウラノス」と「ガイヤ」であつたが、それに就て「クロノス」と「レア」の治世が永い間續いた後、最後に「ゼウス」と「ヘラ」が此の天地の主宰者となつた。「ウラノス」と「ガイヤ」の系統には「チタン」と「キクローベ」と「ケンチマネ」と言ふ三つの神族があつた。このうち「チタン」族は後の神族の敵となつて、この世界に大動亂を起したもので、ギリシヤの神代史の中で、いつも争闘の渦中に飛び込んで、増悪と争闘とを煽るものはこの一族であつた。神話學者の間には、火山の爆發とか、地震とか言ふ地球上の大變動を人格化したものと解釋されてゐる。「ホメロス」の詩に現はれる「チタン」族は「イアベトス」と「クロノス」の二つだけであるが、ヘシオドスは十三の「チタン」族の名を擧げてゐる。即ち「オケアノス」と「テチス」「ヒペリオス」と「テイヤ」「コイオス」と「フォイベ」「クレイオ

ス」と「エウリビヤ」と「イヤベトス」「テミス」と「ムネモシネ」「クロノス」と「レア」である。

次に「キクローベ」族は雙眼の大怪物で、その名を「プロンテス」「ステロペス」「アルゲス」と言ひ、雷鳴と電光と落雷の人格化であつた。

最後に「ケンチマネ」族は、百本の手を持つた怪物で、「プリアレオス」「ギエス」「コツトス」と言ひ、大地を震はす海の激動や怒號や、山のやうな波濤の恐怖を人格化したものである。

「ウラノス」は此の三神族のうち、後の二族を怖ろしいものに思つて、生れると直ぐ母なる大地の底の「タルタロス」へ投げ込んで、そこへ封じ込めて了つた。母の「ガイヤ」は、この無情な行動を深く憤つて、「ウラノス」に對して復讐を企て、「チタン」族の助けを求めたが、「クロノス」の外は、たれも母に味方をするものはなかつた。「ガイヤ」はそこで、「クロノス」に一つの鋭利な鎌を與へて、「ウラノス」を待ち伏せに襲つて深傷を負はせた。そのとき「ウラノス」の體から流れた血は化生して、蛇の髪をもつた復讐の三女神「エリニエス」や新



しい大怪物巨人族となり、また海に落ちたものは、美の女神「アフロヂテ」となつた。「ウラノス」に就ては、これ以上に何事も傳はつてゐない。ギリシヤ人は「ウラノス」を神に祓らなかつた、従つてギリシヤ神話に於ける「ウラノス」の地位は、只自然界の基本的な力を代表する神々の父と言ふだけに過ぎなかつた。かうして「ウラノス」の時代は過ぎて新しい「クロノス」の世となつたが、「クロノス」は父に取つて代つたといふ事情があるので、父の崇りだけでも永續しないやうな運命を帯びてゐた。

一方ではまた「ウラノス」の系統を引いた神々から、自然と「クロノス」とは異系の多くの神々が生れた。「オケアノス」と「テチス」の間には無数の河神や泉と森の少女「ニムフェ」が生れ、續いて海の「ニムフェ」だの海や陸の色々な怪物が出来た。「ヒベリオン」と「テイヤ」とは「日」と「月」と「曉」の兩親となり、曉の女神は色々な「風」と「曉の明星」の母となつた。また「イヤベトス」の子には廣大無邊の天を支へてゐる「アトラス」と人間の創造に力を盡した「プロメテウス」「エピメテウス」の兄弟があつた。「クロノス」は妹の「レア」

と共に天地を支配して、その間に「ヘスチヤ」「デメテル」「ヘラ」の三女神と「ハデス」「ポサイドン」「ゼウス」の三男神を生んだ。

「クロノス」の治世は此の天地が未だ罪と汚れを知らなかつた、いはゆる黄金時代で、疾病も知らず、老いると言ふ事もなく、野山には種々の果實が、一面に實つてゐるから、働いて食ふと言ふ心配もなく、天地間の萬物が無限の幸福と快樂とを味はつて居た時代だと傳へられる。この黄金時代は久しい間續いたが、その間に「クロノス」は自分が生んだ子が、いつか自分に代つてこの天地の主宰者になると言ふことを知つてゐたので、子供が生れるや否や、みんな呑んで了つたが、併し最後に「ゼウス」の生れる時は、母の「レア」は「クレテ」の島へ行つて生れた赤子を一つの洞窟の中へ隠し、大きな石を産衣の中へ包んで「クロノス」へ渡したので、「クロノス」は氣がつかずに一口にそれを呑み込んで了つた。

かうして危い命を助けられた「ゼウス」は、クレテ島に「ニムフェ」らに保護されて、「アマルテイヤ」と言ふ山羊の乳でそだてられたが、「ニムフェ」らは赤兒が泣く度に鐘や太鼓を鳴らし、軍のまねごとをして泣き聲を「クロノス」の

耳みみに入いれないやうにしたと傳つたへられる。そのうちに「ゼウス」は生長せいちやうすると、先まづ祖母そぼの「ガイア」の助たすけをかりて「クロノス」の口くちから呑のみ込んだ同胞はらかららを吐はき出ださせた。その時とき第一だいいちに出でたのは「ゼウス」の身み代がりになつた大石おほいしで、これは後に神託しんたくで有名いうめいになつた「デルフォイ」の神殿しんでんに保ほ存ぞんされた。それから、順々じゆんじゆんにほかの五人ごにんの同胞はらかららが吐はき出だされて、母ははの「レア」の手てへ戻もどされた。そこで天上てんじやう界かいに第二だいにの革命かくめいが起おこつた。

「ゼウス」はその同胞はらからの神々かみがみと俱ともに「オリムポス」の山上さんじやうへ立籠たてこもると、多おほくの「チタン」族ぞくは「クロノス」を助たすけて「オトリス」の山やまに據よつて十年じふねんの間あひだ戦争せんさうを續つづけた。この戦争せんさうは自然力しぜんりよくの全部ぜんぶを闘争とうさうの渦中くわちゆうに捲まき込こんで、この世界せかいの存在そんざいをも脅おびやかしたほどに猛烈まうれつなものであつた。同時どうじに他たの一方いっぽうでは、神かみと惡魔あくま、正義せいぎと暴力ばうりよくとの戦たたかひであつた。此間このあひだに「チタン」族ぞくのうちでも「テミス」と「ムネモシネ」(公正こうせいと記憶きおく)とは、暴力ばうりよくの味方みかたになることを避さけて、智力ちりよくと秩序ちつじよの代表だいへうたる「ゼウス」の味方みかたにつき、また「プロメテウス」(先見せんけん)も終局しつぎよくの勝利しょうりが「ゼウス」にあることを豫知よちして「オリムポス」に走はしつた。

戦争は殆んど果しが付かなかった。「ゼウス」は終に「チタン」族の暴力を征服するには、他の暴力を借るほかはないと悟った。そこで「ゼウス」は再び祖母「ガイヤ」の力を借りて、「ウラノス」が地底の「タルタロス」へ封じ込めて置いた「キクローベ」や「ケンチマネ」の一族を解放して味方につけ、「キクローベ」の手から雷電を譲り受けて、先頭に立つて敵に向ふと、三箇の「ケンチマネ」は三百本の手で岩をつかんで敵に向つて雨霰と投げつけた。その時「オリムポス」の山上から投げかける雷電のために、周囲の地は焼けただれ、河海の水は沸騰して、火の如き霧は「オトリス」の山を包み、「チタン」族は絶えず閃めく電光のために悉くその視力を失つた。

同時に「ケンチマネ」は地と海を震はして突進したので、さすがに勇猛な「チタン」族も、電光に焼かれ岩の下に埋められて、たうとう「ゼウス」の軍に降服して了つた。そこで「ゼウス」は「ケンチマネ」に命じて、「クロノス」を始め自分に刃向つた「チタン」族を、「タルタロス」の底へ幽閉し、「ケンチマネ」をして監視させた。

神々と「チタン」族との戦闘の神話は、世界の起原に關するギリシヤの神話の中でも、恐らく最古の傳説に關するものである。この戦闘の舞臺となつた「テツサリヤ」の地勢を見れば何人にも想像されることではあるが、そこには自然の激變の跡が著しく残つてゐる。「テツサリヤ」の平原そのものが、あの山壁を裂いて「テンペ」の大谿谷を作り出した大地震の産物であつた。そして「オリムポス」と「オトリス」山とは丁度この大谿谷を挟んで相對峙する大城壁のやうな形勢をして、その間の谿谷には處々に巨大な漂石が「ゼウス」族と「チタン」族の間に投げかはされた巖石のやうに捲き散らされて居るのである。

「クロノス」の黄金時代は、かうして永久に過ぎ去つた。「クロノス」の神話については、互に矛盾した二つの性質が賦與されてゐる。一方では、この時代を地上には永久の春が續いて人間が無限の幸福を享樂した黄金時代だと説くとともに、他の一方では、その治世が既に父の「ウラノス」に對する反逆に始まつたやうに、この治世を通じて權謀術數によつて支配された時代のやうにも説いてゐる。この第二の傳説によると、「クロノス」は結局正義の代表者たる「ゼウス」に對

して、邪曲の代表者と見られるのである。併しさう言ふ道徳的の矛盾を除外して見れば、この時代は、後の天地萬物の秩序が次第に整つて來た時代であつた。

「ゼウス」は終にその強敵「チタン」族を征服したけれども、「ゼウス」の主權はまだ本當に安定する所までは行かなかつた。「ガイヤ」は一旦は孫の「ゼウス」を助けて「クロノス」と「チタン」族を征服させたけれども、いよいよ「ゼウス」が勝つて見ると、さすがに自分の生んだ「チタン」族の没落を憐むやうな心持も出て、「ゼウス」に對してまたまた陰謀を企てるやうになつた。

「ガイヤ」には、「チタン」族のほか「チフォイオス」といふ子があつた。

「チフォイオス」は同胞の「チタン」族よりは一層恐ろしい怪物で、どうしても全能の「ゼウス」に反抗すべき運命を持つて居た。この「チフォイオス」は一百の蛇の頭と火の如く輝く目と眞黒な舌を持ち、其一百の口からは同時に蛇、牡牛や獅子や犬や其他あらゆるものの聲を立てて咆吼するのであつた。この怪物が母の「ガイヤ」の命を受けて「ゼウス」に向つて戦ひを挑んで來たが、「ゼウス」は直ぐにその雷電をあびせかけて打ち倒し、「チタン」らと一緒に「タルタロス」

の底へ投げ込んで了つた。

併しこの戦争で天も地もその爲震撼して「タルタロス」の底までも響き渡つた。そして「ゼウス」の雷光に包まれながらも、その怪物の吐き出す息がかつた地は、まるで白蟻かなにかのやうに、どろどろに鎔けたと傳へられてゐる。この怪物は今もなほ「タルタロス」の底で、折々恐ろしい唸り聲や泣き聲を立てる、その度に噴火山の口から怖ろしい火の舌を吐き、或は恐ろしい熱風を起して、地上の草木を焼き拂ふのである。「チフォイオス」は猛烈な旋風の人格化であつた。

「チフォイオス」の反亂に續いて巨人族の反亂があつた。巨人族と言ふのは、「ウラノス」の血から生れた巨大な怪物である。傳説によると、キラキラした鎧を着て手に長槍を持った魁偉な巨人であつた。巨人族の中でも、特に雄強なものには「アルキオネス」「パラス」「エンケラドス」及び火の王「ボルフィリオン」であつた。この巨人族との戦ひでは、「オリムポス」諸神の中でも、「ヘラ」と「アテーネ」の二女神が首功を立て、また「ゼウス」の血を受けた英雄「ヘラクレス」がその強弓をひいて敵をなやましたと言ふことになつてゐる。

この巨人族は自然界の勢力の人格化であつた。「チタン」族とは違つて、俗間の信仰に根據を持つた妖魔であつた。従つて巨人族は「チタン」族や「キクローベ」や「チフォイオス」よりは一層人間に近く、古い彫刻では獸の皮を着て岩や根棒を武器とする蠻族の姿であらばされてゐるが、後には胴から下は人間の形體を失つて、脚のかはりに頭をもつた二匹の蛇をつけるやうになつた。巨人族は恐らくある地方に特有な俗間信仰から出て一般の神話の領域に侵入して行つたものらしく、その性質には、有史前の獰猛な蠻族を暗示するところがある。人間と同様に土から生れたといふ形容詞をつけられてゐるのも、その一つの證據である。とにかくこの巨人族も、他の二族と同様に「ゼウス」の爲に全く征服されて「タルタロス」の底へ全く葬られて了つた。

そこで天地の秩序が始めて定まり、「ゼウス」は「クロノス」に代つて天地の主宰者となつた。

この時「ゼウス」は神々の會議を開いて、それぞれにその支配を定めた。「ポサイドン」「オケアノス」に代つて海を支配し、「ハデス」は暗黒な地下の世界



と「タルタロス」の王となり、「ヘラ」は「ゼウス」の妃として「オリムポス」の女王となつた。

## エジプトの開闢説

世界の初には地も海も空も無く、ただどろどろした水のやうなものが果もなく廣がつてゐた。その名を「ヌウ」といつて其中に一つの神があつた。この神は「ヌウ」と共に始まり「ヌウ」の中に宿つてはゐるが、まだ形も無ければ働きもなく、後にはこの美はしい天と地を生み出すやうな何のしるしも見せなかつた。そのうちに時が来て、神のうちに自分の名を名乗りたいと言ふ心が起つて来た。わが名は夜明けには「ケベラ」、日中には「ラア」、夕刻は「ツーム」である。かう言ふと、先づキラキラした卵の姿となつて水の上へ浮んで来た。そして種々の神々や男や女や動物や植物が次ぎ次ぎにこの神によつて創造された。

「ケベラ」は始めにその氣高い姿を以て「ヌウ」の全面をおほうてゐたが、自

分の住むべき場所がきまらなかつたので、その浮んである水を分けて天と地を造らうと思つた。そこで神は先づ風の神「シユウ」と雨の女神「テフ又ウト」を造り、次に地の神「セブ」と大空の女神「又ウト」を造つた。

「シユウ」は神の命によつて「又ウト」を高く天上にさし上げた。そこで「又ウト」は地の神「セブ」が長くなつて寝てゐる上に弓形にのりかかつて、手足の指先を西と東の地平線にすれすれにして自分の身を支へることになつた。かうしてこの女神の胴や手足の上についてゐる無数の星が、暗い中からキラキラと光を放つやうになつた。けれどもこの天地には、まだ晝と夜との區別が無かつた。そのうちに「シユウ」と「テフ又ウト」の後にかくれてゐた「又ウト」の目が、次第に水の面から登つて大空に達したので、天地は始めてその光に照らされるやうになつた。

その時から「又ウト」の目は毎日に空を横ぎつて地上の總てのものを見下し、そこに光と熱とを與へるやうになつた。次に神は夜を照らすために、モウ一つの目を天上に送り、また涙を地上に落して多くの男と女を造つた。その後地上の人間

を守らせるために多くの神々を造つた。「オシリス」「イシス」「セツト」「ネ  
ブチス」「ホルス」などはその重なるもので「シユウ」「テフヌウト」「セブ」  
「ヌウト」の諸神と共に、後に「ヘリオボリス」の重なる神々として祀らるるも  
のである。神はまた地上の人間のために禽獸草木を造つて、この世界を種々の生  
物で充した。

エジプトの神話には猶いくつかの天地創造説が傳へられてゐるが、以上述べた  
のが一番まとまつた代表的な説である。此の神話によつても窺はれるやうに、エ  
ジプト神話の中心は、いはゆる太陽神話で、エジプト人が最上の神として崇める  
のは太陽神「ラー」であつた。

エジプト人の信仰によると「ラー」は毎朝東の空に現はれ、日の船にのつて天  
上を横ぎるものと考へられてゐた。この旅行の間に「ラー」は絶えず地上の人間  
を見下して、その行爲の善惡を見分け、また彼等に光と熱とを與へるのである。  
夕方には西方の山の後へはいつて、そこから暗黒な下界へ沈んで行く。そして夜  
の間は地の底を流れる大河の荒浪を分け、その道をさへぎる種々の敵と戦つて正

しい人間の靈魂を船の中へ救ひ上げながら、曉方には再び東の空に現はれる。

「ラー」は元來北方の神で、その崇拜の中心は「ニイル」河の下流地方にある「ヘリオポリス」であつたが、南北統一後、そこから次第にエジプトの全國に擴がつて行つた。そして後に上エジプトの「テーベ」が勢力を得るやうになつてからは、其地方の主神たる「アメン」と結合して「アメン・ラー」として崇拜された。

「ラー」は普通に人間の姿であらはされてゐるが、時によると鷹の頭をつけた人間の姿にあらはされる事もある。つまりエジプトでは古くから鷹を以て太陽を表はす習慣があつたからで、その他の諸國でも鷲や鷹なぞの鳥類を太陽の象徴とすることは一般に行はれた風である。

「アメン」はまた「アモン」とも言ひ、本來「カルナツク」の地方神で、その名稱の起源は明瞭ではないが、一説には「隠れたるもの」と言ふ意味だとも言はれてゐる。

この神の像は或は王座によつた人間の姿、或は人身蛙首、或は人身蛇首、或は

猿、或は獅子、或は人身羊首の姿であらはされてゐるが、中でも頭上に赤と青の  
だんだらに染め分けた一對の長い羽飾をいただき、頤髯を垂らした人間の姿をし  
てゐる像が最も多い。後に太陽神「ラー」と融合してからは、後者の屬性をとつ  
て人身鷹首の姿にあらはされるやうになつた。

「アメン」の崇拜の中心は「ニイル」河谷の「テーベ」で、第十二王朝の時ま  
では單にこの地方の神たるに過ぎなかつたが、この王朝が「テーベ」から起つて  
エジプトを統一するに及んで、その崇拜は速かにエジプトの全土に擴がり、多く  
の地方神の屬性をその一身に集め、遂には「アメン・ラー」の名をもつて「神々  
の王」と讃へられるやうになつた。「アメン」はまた「地上の王の王」として歴  
代の王はこの神の化身と考へられ、またその皇后はこの神の司祭として神の胤を  
宿すものと信ぜられてゐた。「アメン」の配偶を「ムウト」と言ひ「神々の女王」  
として地上の萬物を生む「一切の母」と考へられてゐた。

この女神は通例南北兩エジプトの王冠を戴き、手に笏をとつた姿で表はされて  
ゐるが、時には母性の表象たる兀鷹、若しくは獅子の姿であらはされることもあ

つた。

「アメン」と「ムウト」の間に生れた神を「コンスウ」と言ひ、月の神で、農作物または家畜の守護者とされ、また若い男女の心に愛を吹き込む神として崇拜された。

エジプトの神々のうちで一番廣く崇拜されたのは「オシリス」であつた。「オシリス」は本來北方の神であるが、南北統一後、その信仰は一般に盛んになつた。この神は地上の人類に種々な生活の道を傳へ同胞のやうに相愛して、平和に此の世を送らせるために人間の形で天から下された神であつた。併しその同胞の神に「セツト」亦の名を「チフォン」と言ふ悪神があつて、祕密な計略を設けて人知れず「オシリス」を殺してしまつた。そこで「オシリス」の妻の「イシス」はその夫の遺骸をたづねて諸國をさまよつた末、やうやう見付け出して一旦は蘇生させたが、「セツト」に見付けられて再びその生命を奪はれて了つた。「オシリス」の遺子「ホルス」は母の「イシス」の手で養育され、成長の後「チフォン」討伐の軍を起し、激戦の後その敵を破つて父の王位を回復した。この物語は後世エジ

プト人の間に廣く傳誦された傳説の一つである。

「オシリス」はその生前に受けた苦難のために、死後は下界に下つて死者の裁判官となつた。彼は地下の世界に住んで、毎夜「ラー」の船と共に暗黒の谷に下つて行く無数の靈魂に、それぞれの審判を與へるのである。

「オシリス」について崇められる神に「トート」がある。「トート」は智慧の神で下界の法廷では「オシリス」の傍に立つて人間の心の目方を計る秤をながめながら、手に紙と筆を以て控へてゐる。この理由から「トート」は神の書記と呼ばれてゐる。この神の像は鶴の首を持った人間の姿に描かれてゐる。そしてその頭の周圍に新月の形をした後光がついてゐるのは、時を定める神とされてゐたことを示すものである。

此他の神々には「イシス」の妹の「ネブチス」「オシリス」と「イシス」の子の「アヌビス」それから前に述べた「オシリス」の弟の「セツト」なぞがある。「ネブチス」は死の神で、「アヌビス」は墓場の守神で、「セツト」は總ての害悪の源で人類の敵と考へられてゐた。

エジプト人は、神々は地上に下つて常に人間の行爲を監視するものだと思つてゐた。そしてさう言ふ場合には神々はいろいろな動物の姿になつてゐると信じてゐたので、自然に色々な動物を神の化身として崇拜するやうになつた。例之エジプト産の大甲蟲を「ケベル」「ラー」の化身と信じ、山犬を「アヌビス」の化身とし、鶴を「トート」の化身として崇拜した。そしてかう言ふ神の動物を殺したものは、たとへ過失にしても、死を以てその罪を償はなければならぬものとされてゐた。

中にもエジプト人の最も崇拜した動物は下界の神「オシリス」の化身として尊敬された牡牛であつた。後に「オシリス」の神殿に仕へる神官は一定の特徴を持つた牡牛を選んで神兽とし、これを「アビス・ブル」と言つて崇拜した。「アビス」は全身が漆のやうに黒く額に三角形の白い斑点があつて、背中の毛は鷲の羽をひろげたやうな形になつてゐる。その上右の側腹には三日月形の白い斑点と、咽の下に大甲蟲のやうなしるしがあつた。かう言ふ特徴のある牛が見付かると、エジプト全國は煮え返るばかりの騒ぎをして、その吉兆を祝ふのであつた。そし



てこの神獸が母の乳から離れるのを待つて、祭司等はこれを「ニイル」河の岸に運び、美しく飾りたてた船にのせて「メンフィス」へ迎へ、そこに立派な神殿を建てて安置した。「アビス」は一生の間この神殿の中で人々の奉仕を受け、毎年の誕生日には盛んな祭典が行はれた。

「アビス」がその神殿で命を終ると、エチプト全国は哀悼の意を表して、第二の「アビス」が発見されるまで喪を続けるのであつた。「アビス」の遺骸はミイラとして葬らるのであるが、その葬つた場所は深く秘して何人にも知らせないやうにした。近年この墓地が発掘されて始めて其の秘密が発かれたが、これらの墓は地下の岩を掘つて造つた廣大な岩屋のうちにあつて、通路の兩側には無数の部屋が設けられ、各の部屋に巨大な石の柩が安置されてゐた。

鳥の中では鷹と鶴が最も神聖なものであつた。雪のやうな羽と眞黒な尾を持つた鶴は「トート」の神禽とされ、鷹は「ホルス」の表象として崇拜されたのである。

## メキシコナファ族の天地創造説

太初世の中には何もなかつた。あるものは只どこまでもどこまでも廣がつてゐる森々たる水だけであつた。その水の中からいつとはなしに大地があらはれた。大地が出来上ると或日のこと「豹蛇」と呼ばれる雄々しい鹿の男神と、「虎蛇」と呼ばれる麗しい鹿の女神とが、どこからとなく現はれた。二人はどちらも人間にんげんの姿すがたをしてゐた。二人の神は漫々たる水の中に高くして大なる岩を拵へて、その上に美々しい館やかたを造つた。それから岩の頂いただきに銅で拵へた一本の斧をのを突き立てて、大地の上に圓まるくなつてゐる天空てんくうを支へることにした。

美々しい館は「アボアラ」の近くで上部「ミシユテカ」の地ちにあつた。鹿の男神をかと鹿しかの女神めがみとは、この館やかたの中に幾世いくせい紀いきとなく住み續けてゐた。さうしてゐるうちに二人の男の子こが生れた。一人は「九蛇の風」と呼ばれ一人は「九洞の風」と呼ばれた。「九蛇の風」と「九洞の風」とはすすくすすくと生おひ立つて立派りっぱな凜々りりしい若者わかものとなつた。兩親りやうしんが非常ひじやうに氣きをつけて育て上げたので、若者わかものたちは様々さまざまの技わざ

に通じ、あらゆる動物に姿を變へることも出来れば、まるで姿を見えなくすることも出来た。またどんな堅いものでも、するりとつきぬける事が出来た。

或る時、「九蛇の風」が「九洞の風」に對つて、

「自分たちがこんなに立派になつて色々な技に通ずるやうになつたのは、全く神々のお蔭だ。だからそのお禮に神々にささげものをしようではないか」と言つた。「九洞の風」はしきりに頷首て、

「全くさうだ。それではすぐにその支度にとりかかることにしよう」と答へた。

二人は粘土を掘りつつ香爐を拵へた。そして其中に煙草を満して、それに火をつけた。やがて香爐から煙が靜に立ち昇つて空にたなびき始めた。これが神々に對する最初のささげものであつた。

それから二人は花園をこしらへて、そこに灌木や花や實を結ぶ樹や香りの高い藥草などを植ゑ付けた。そして其のすぐ側の地をならして、そこを自分たちの住居ときめた。二人は満足しきつて煙草をふかしては、神々にお祈りをするのであ

つたが、暫くすると二人はどちらからとなく、

「お祈りの力を強めるためには、こんなに安閑として居ては駄目だ、どこまでも身を苦しめて懸命になつてお祈りをしてこそ、その力が現はれるのだ」  
と言ひ出した。そして其後は燧石でこしらへた小刀で、自分たちの雙の耳と舌とに孔を穿け、柳の小枝で造つたブラツシで木や草に紅の血を灌ぎかけてお祈をすることにした。

併し「九蛇の風」と「九洞の風」は光明と暗黒、晝と夜とを示すものであるらしいと思はれる。

## マヤ族の萬物創造説

太初この世には何も無くて常闇が八方に廣がつてゐた。そして只神々だけが存在してゐた。神々の名は「フラカン」といひ、「グクマツツ」（若くはクエツアルコアトル）と言ひ、「エツクスビヤコツク」と言ひ、「エツクスムカネ」と言

つた。

これ等の神々は先づ大地を造らなくては何事も出来ぬと言つて、一人の神が大きな聲で、

「大地よ、現はれよ」

と叫んだ。忽ちその聲に應じて大地が現はれた。（言靈の妙用を漏らしたる物語也）

神々はお互に相談をして種々の動物を拵へて大地の上に住ませる事にした。それから一番終りの木を刻んで澤山の小さい人間を造つたが、これ等の人間どもは、どうも性質が悪くて神々を蔑視するので、神々はひどく腹を立てて、

「こんなやくざな生物は、一思ひに滅ぼして了つた方が良い」

と考へたので、「フラカン」神は大地の水と言ふ水の量を増し、同時に幾日も幾日も大雨を降り續かせたので、見る見る恐ろしい洪水が人間を襲うて来た。人間は驚き騒いで、あちらこちらに逃げまどうた。それを追ひまはすやうにして、

「エツクセコトコブアツク」と言ふ鳥は其の目をつつき出し、「カムラツツ」と

いふ鳥はその頭を咬みきり、「コツバラム」といふ鳥はその肉を噉ひつくし、「テクムバラム」といふ鳥はその骨を砕くのであつた。いな、人間に飼はれてゐた家畜や人間に使はれてゐた道具さへも、逃げまどひ泣きさけぶ人間を眺めて氣持よささうに嘲り笑ふのであつた。

「お前さんたちは是までわたしたちをひどい目にあはせて居たんだ。今度はわたしたちの番だ。思ひきり咬みついてやるよ」と犬や鶏が言つた。

「お前さんたちは毎日夜となく晝となく、わたしたちを苦しめた。わたしたちはいつも泣き叫んで居た。さあ今度はこつちの番だ。わたしたちの力の程を見せてやるよ。お前さんたちの肉を碾き碎いて肉團子を拵へてやるよ」と石臼どもが言つた。

「お前さんたちは、わたしたちの頭や脇腹をいぶしたし、火の上にかけて火傷をさせたり、随分と痛い目にあはせたね。さあ今度はこちらの番だ。思ひきり火傷をさせてやるよ」

と茶碗や皿が言つた。

人間どもは、みんなに追ひかけられて、苦しまぎれに家の屋根によぢ登つた。

屋根は、

「この悪者め、かうしてくれろぞ」

と言つて、わざと地面に突き伏してしまつた。人間は周章狼狽して樹の上に登つ

た。さうすると樹は、

「このやくざもの奴、かうしてくれろぞ」

と言つて、烈しく枝を動かして人間どもを大地にふりおとした。人間どもはモウ

困つてしまつて洞穴の中へ潜り込まうとした。すると洞穴は、

「この性悪ものめ、かうしてくれろ」

と言つて、いきなり口を閉ぢてしまつた。

かうして大地の上を右往左往に逃げまはつてゐるうちに、小さい人間どもは、

水に責められ、生物に苦しめられ、種々の品物に痛め付けられて、たうとう皆滅

びて了つた。

「フラカン」神を始め天界にある神々は、新しく人間を造らうと考へた。そこで種々と相談した末に、黄色い玉蜀黍の粉と白い玉蜀黍の粉とを捏つて、一種の糊をこしらへて、その糊で四人の男の人間を造つた。一人は「バラムキツチエ」（美しい歯を持つ虎の義）と呼ばれ、一人は「バラムアガブ」（夜の虎の義）と呼ばれ、一人は「マハクター」（著しき名の義）と呼ばれ、残りの一人は「イキバラム」（月の虎の義）と呼ばれた。

これ等の人間は姿も心の働きも殆ど神とかはらなかつた。「フラカン」神はそれが氣に入らなかつた。

「わしたちの手から造り出されたものが、わしたちのやうに偉いものであるのは、どうも面白くない。何とか爲なくてはならぬ」

「フラカン」神はかう考へて、モウ一度他の神々と相談をした。そして、人間と言ふものは、もつと不完全でなくてはならぬ。もつと知識が少い方がよい。人間は決して神となつてはならぬ」

と言ふことに話がきまつた。そこで「フラカン」神は四人の男の目をねらつて、



フツと息を吹きかけると、眼がくもつて大地の一部しか見えなくなつた。神々は大地の隅から隅まで見ることが出来るのであつた。

かうして四人の男を自分たちより劣つたものにする、神々は男たちを深い眠りに陥れて、それから四人の女を拵へて男たちに妻として與へることにした。四人の女はそれぞれ「カハ・バルマ」（落ちる水の義）と呼ばれ、「チヨイマ」（美しい水の義）と呼ばれ、「ツヌニハ」（水の家の義）と呼ばれ、「カキクサ」（暉く水の義）と呼ばれた。これ等の八人の男女が人類の祖先である。

次に火の起源について面白い話がある。それによると人間どもは初め火を持つて居なかつた。だから夜は眞暗な所に居なくてはならぬし、寒い時には只がたがたと顫へて居なくてはならなかつた。そして折角鳥や獸を手に入れても生のままで食べるより外なかつた。「トヒル」（ぶらつく者の意）といふ神がそれを見て、「どうも可哀さうだ。人間どもに火を與へてやる事にしよう」と言つて、兩方の脚を烈しく摩り合せると忽ち火が燃えだした。人間どもはその火をもらつて皆で分けることにした。そしてそれを消やさないやうに大切に

ゐたが、ある時大雨が降りつづいて國中の火をすつかり消してしまつた。人間どもは非常に嘆きかなしんだ。すると「トヒル」神がそれを見て、  
「よし、わしがモ一度火を拵へてやらう」  
と言つて、自分の脚と脚とを摩り合せると、忽ち火が燃え出した。  
かうして人間どもは火をなくする度に「トヒル」神のお蔭で、それを手に入れることが出来るのであつた。

神から造られた四人の男と四人の女とは、暗の世界に住んでゐなくてはならなかつた。その頃はまだ太陽がなかつたので、八人の男女は天を仰いで神々に、  
「どうか、わたくし達に光明を與へて下さい。安らかな生活を恵んで下さい」  
と祈つた。が、いつまで経つても太陽は現はれなかつた。彼等は悲しみ惱んで「ツラン・ジヴァ」(七つの洞窟の義)といふ地に移つて行つた。併しそこでも太陽を見る事が出来なかつた。さうしてゐるうちに、どうしたのか、言葉の混乱が起つて八人の男女は、お互にお互の言ふ事が解らぬやうになつた。彼等はモウすつかり困つてしまつて「トヒル」神に、

「どうかわたくし等を率ゐて、どこかもつと幸福な土地に移して下さい」と祈つた。たうとう彼等は「トヒル」神の教によつて長い旅路についた。

高い山をいくつとなく越えて行くうちに、大きな海に出た。船を持たぬ彼等は、どうして漫々たる海原を渡らうかと思ひ煩つて居ると、不思議にも水がさつと二つに分れて、一筋の路が出来た。彼等はその道を辿つて「ハカヴィツ」といふ山の麓に來た。

「わたしたちは、ここに留らなくてはならぬ。「トヒル」神さまのお告げによると、わたしたちは此所で太陽を見ることが出来るのだから」  
と四人の男が言つた。

「ええさうしませう。日の光を見ることが出来たら、どんなに嬉しいでせう」と四人の女が言つた。

かうして彼等がひたすら日の光を待ちこがれてみると、やがて太陽が赤々と東の空から現はれて、明るく温かな日の光が野山に充ち満ちた。もつとも初めのうちは日の光が、さほど強くなかつた。あとでは祭壇の上の犠牲の血をすぐに吸ひ

とつてしまふほど烈しい熱を發するやうになつた。太陽も始めて八人の男女の目にうつつた時には、鏡の中の影のやうに見えたのであつた。それでも始めて太陽を見たので、男も女も獸類も嬉しさの餘り殆ど踊り狂はむばかりであつた。彼等は聲をそろへて「カムク」といふ歌をうたひ出した。「カムク」とは「吾等は見つ」といふ意味で、つまり始めて太陽を見た時の胸の中の歡喜がおのづから迸り出たのであつた。

かうして八人の男女は「ハカヴィツ」山の麓に「キシエ」族の最初の町をこしらへて、そこに永く住むことになつた。時がたつにつれて、人間の數がだんだんに殖ゑて來た。そしてその祖である八人の男女も、だんだんと年老りになつた。ある日、神々が幻のやうに八人の男女たちの前に現はれて、  
「お前たちの子孫が末長く榮えることを願ふなら、わたしたちに人間の犠牲をささげなくてはならぬ」と言つた。

八人の男女は神々の教に従ふために、近くの地に住んでゐる他の部落を襲うた。

他の部落のもの共は、八人の男女に率ゐられた「キシエ」族に對して烈しく争つた。血腥い戦が長く續いて、どちらが勝つとも見えなかつた。すると、どこからとなく地蜂や熊蜂の群が現はれて來て、「キシエ」族を助けて敵の兵どもの顔に飛びついては烈しくその眼を刺した。敵の兵は目がつぶれて武器を振りまはすことが出来なくなつて悉く降参してしまつた。八人の男女は敵勢のうちから幾人かを選び出して犠牲として神々にささげた。

かうして「キシエ」族は次第に近くの部落をきり従へて行つたが、その中に彼等の祖である四人の男はいよいよ年がいつた。彼等は臨終が近づいたといふ事を悟つて、別れの言葉を言つて聞かすために、子や孫や親族たちを自分のまはりに呼びよせた。そして別れの言葉がすむと四人の男の姿が忽ち見えなくなつた。そして其あとに大きな巻束が現はれた。「キシエ」族はその巻束を「包まれたる嚴の寶」と名づけて、決して之を開かなかつた。

要するに、この物語は「キシエ」族が寒い地方から暖い南方に移住した史的事實を反映してゐるやうに考へられるのである。

## 北歐に於ける宇宙創造説

太初は空の空であつた。そこには眼にふれるものが何も無かつた。無限に廣がつてゐる虚無には、ただ「ギンヌンガ・ギャップ」と言ふ深淵があるだけであつた。「ギンヌンガ・ギャップ」とは「顎を開いた決裂」といふ意味である。この深淵は永久の常闇の中にひたすら廣がり、廣がりに廣がつて居たので、その大きさも深さも到底測り知られる限りではなかつた。

茫茫たる「ギンヌンガ・ギャップ」の深淵の北の果と南の果とに、二つの世界ならぬ世界があつた。北の果にある世界を「ニフルハイム」と呼び、南の果にある世界を「ムスベルハイム」と呼ぶ。

「ニフルハイム」は極寒の世界である、暗黒の世界である。そこには物凄い霧と暗とが永久に總てを閉ぢこめて居る。この世界のただ中に、いつまでも盡きる事のない泉が湧いてゐる。泉は「フフェルゲルミル」と呼ばれた。泉からは氷のやうに冷たい水が滾々と迸り出で、十二の河となつて流れ出てゐる。流れ流れて

行くうちに「ギンヌンガ・ギャップ」から吹いて来る劍のやうな疾風に觸れて、山なす氷の塊となり、氷の塊は悠々と轉がりつづけて、はては「ギンヌンガ・ギャップ」の底知れぬ深淵に雷のやうな響を立てて落ち込むのであつた。

「ムスベルハイム」は極熱の世界である。火と光熱との世界である。この世界のただ中に「スルトル」と呼ばれる絶大の巨人が坐り込んで極熱界の四邊を守つて居る。「スルトル」の手には火焰の劍がしかと握られてゐる。巨人は絶えず凄まじい勢で劍を振りまはす。ふりまはす度に劍の刃から切尖から閃々たる火花が雨のやうに降りこぼれて、深淵の底に横はつてゐる氷の塊の上に落ちる途端に、耳を聳する様な音がして濛々たる蒸氣が數知れぬ雲となつて高く高く舞ひ上るのであつた。勢ひ盛んに立ち上つた蒸氣の雲が、氷寒世界の「ニフルハイム」から吹きすさんで来る冷たい風に凍つて、宇宙に堅くかたまつた時、それで測り知られぬ大きな魔物として生きて動くやうになつた巨魔の名を、「イミル」若くは「オルケルミル」といふ。「沸きかへる塊」といふ意義である。凝固まつた氷の魔であるから時として「リムツルス」（氷霜の巨人の意）と呼ばれることもある。

古「エツダ」の詩篇は、この氷の巨魔を歌つて、

古き昔

イミルが住みし頃には

砂なく海なく

涼しき波もなかりき

大地も見出されず

はた天空もあらず

すべては一つの混沌にして

いづこにも草を生ぜざりき

と言つてゐる。茫茫たる虚無の中に生れ出た氷の魔「イミル」は、食物を探しもとめて闇の中をうごめき廻つて居た。そのうちに「アウヅムブラ」といふ絶大な牡牛を見出した。「アウヅムブラ」とは（飼育するもの）といふ意義である。こ



の牛も濛々たる蒸氣の雲が冷えて凍つて生れ出たものであつた。「イミル」は喜んで牝牛の側に駆けよつて行つて見ると、大きな乳母から雪のやうに白い乳母が四つの川となつて滾々と流れ出てゐる。「イミル」は日毎その乳汁を飲んで命をつなぐことにした。

絶大なる牝牛「アウヅムブラ」も生きて居る以上、何かを食べてその命をささへなくてはならぬ。「アウヅムブラ」は大きなそして粗くて堅い舌を出しては氷の塊に凍りついてゐる鹽を嘗めて居た。

晝となく夜となく嘗めつづけてゐるうちに、氷の塊の中から男の頭髪が現れて、それから全身が現れ出た。氷の塊の中から飛び出して來たのは「ブリ」といふ神であつた。體が大きくて力が強くて、容貌の麗しい神であつた。そして間もなく「ボル」といふ男の子を生んだ。

かうして神々が生れ出るやうになると、巨魔「イミル」も巨人どもを産み出すやうになつた。ある日、「イミル」は乳汁に飽いて、うたた寝をしてゐるうちに、體中に汗をかいた……と思ふと、左の腋の下から一人の男と一人の女とが生れ、

足から六つの頭を持った男が生れた。六頭の怪魔は「ベルゲルミル」と呼ばれた。神々の永久の敵となつた「霜の巨人」どもは、みなその子孫である。神々と巨人共が現れると、その間に激しい戦が始まつた。神々は善きもの義しきものの力として、巨人どもは悪しきもの邪なもの力として、どうしても仲よく暮して行くことが出来なかつたのである。しかしいつまでもいつまでも闘つてゐるうちに、雙方もやや争に飽いて、「ボル」神が「ボルトルン」（悪の荊）の娘「ベストラ」を娶る事になつて、「オーデイン」「ファイリ」「フェ」といふ三人の神をまうけた。其の中の「オーデイン」こそ、ゆくゆく神々の王者となつて、あらゆる世界を支配すべき運命を持った最も高く最も偉い神である。三人の神々が生れると、すぐに父の「ボル」神を援けて、また巨人どもと烈しい戦を開いた。巨人族の頭領である「イミル」は血みどろになつて荒れまはつたが、たうとう三人の神に斬りさいなまれて、凄じい叫び聲とともに、丘を覆すやうにとつと倒れた。と見ると、傷口から紅の血が潮のやうに噴き出して、大きな河となり、はてはあたりに恐ろしい血の洪水を惹き起した。首領の敢ない最後に

氣ぬけがしてゐた巨人どもは、驚き騒いで、あちらこちらに逃げまどつてゐたが、たうとう一人も残らず滔々たる血の流れに押し流されて、苦しみもがきながら溺れ死んでしまつた。ただ「ベルゲルミル」といふ六頭の巨人だけは、おのが妻と一しよに一艘の船に乗り込んで、血の海の上を漕いで漕いで世界の果ての果てまで逃げて行つてしまつた。

「ベルゲルミル」夫婦が落ちて行つた世界は「ヨツツンハイム」と呼ばれる。二人はこの世界に住み留つて、新しい「霜の巨人」どもを生んだ。

「わたしたちが、こんな寒いわびしい世界に住むやうになつたのも、全く神々のせみだ。思へば憎い奴等ではある」

「ベルゲルミル」夫婦は、いつも口癖のやうに、かう話しあふのであつた。だから「霜の巨人」どもも、両親の恨をうけついで、神々を目の敵のやうに思ひなし、折さへあると自分の世界から脱け出して神々のあるところに襲ひかかるやうになつた。

## 天地萬物の創成

神々は、その強敵である巨人どもにうち勝つことが出来たので、茫茫たる虚無の空際を普く見渡して、確かな、そして住みよい世界を造らうと決心した。

「オーデイン」は「フィリ」と「フェ」とに對つて、

「わしたちは、先づしつかりした、形のある世界を造らなくてはならぬ。それには巨魔「イミル」の體を使ふのが一番いいと思ふ」

と言つた。「フィリ」と「フェ」とはすぐにそれに同意した。

そこで三人の神は「イミル」の大きな體を「ギンヌンガ・ギャップ」のただなかに引き摺つて来て、體の肉で大地をつくり、流れほとばしる血で海をつくり、大きな骨で山や丘をつくり、顎や齒や碎けた骨で大石小石をつくり、髪の毛で樹や草をつくつた。

神々は大地を宇宙の眞中に据ゑた。そしてそのまはりに、隈なく「イミル」の睫毛を植ゑて堅固の砦とし、またそのまはりに海をひきはへて、二重の砦とした。

「大地はゆくゆく人間といふものの住居となすはずぢや。だから出来るだけ守備を固くして、巨人どもの災から免れるやうにしてやらなくてはならぬ」

「オーデイン」はかう言つて「ファイリ」と「フェ」を顧みて、快げに微笑んだ。それから「イミル」の大きな頭蓋骨を大地の遙か上に投げあげて、圓い天空をこしらへ、頭腦をそこに撒きちらして、羊の毛の様な雲をこしらへた。

投げ上げただけでは、天空が墜ちて来る心配がある。そこで神々は、力の強い四人の侏儒を世界の四隅に送つて、その肩で天空を支へさせることにした。東の隅を支へる侏儒は「アウストリ」と呼ばれ、西の隅を支へる侏儒は「ウエストリ」と呼ばれ、南の隅を支へる侏儒は「スードリ」と呼ばれ、北の隅を支へる侏儒は「ノルドリ」と呼ばれた。英語で東西南北をそれぞれ East, West, South, North, Northといふのは、これが爲めである。

たしかに、形ある世界が、かうして出来上つた。しかしまだ光がない。光がなくとも、恐ろしい常暗に閉ざされてゐなくてはならぬ。そこで神々は、極熱世界「ムスベルハイム」から迸り出る數知れぬ火花を採りあつめて、廣々

とした空に撒きちらした。火花は大空に燦きわたつて、世界を明るくするやうになつた。人の子が星と呼んでゐるのがこれである。それから神々は「ムスベルハイム」から閃き出した最も大きな二つの火花を天空に投げ上げた。人間が太陽と呼び、月と呼んでゐるのが、それである。

神々は太陽と月とのために、美しい黄金の車をつくつた。そして太陽をのせた車に「アルファクル」（朝はやく目を覺ますものといふ意味）といふ馬と、「アルスフィン」（迅く行くものの義）といふ馬をつなぎ、月をのせた車に「アルスフィデル」（全く速かなるものの義）といふ馬をつないだ。月の光は蒼白くて冷たいが、太陽の光はあらゆるものを焼きつくすやうに熱い。だから神々は、太陽の車をひく馬のために、二つの革袋に冷たい空氣をつめて、その肩に結びつけ、また「スファリン」（冷すものの義）といふ楯をつくつて、車の前部にかけることにした。楯が太陽の光線をさへぎつてくれなければ、馬は見る見る焼け爛れて、はては燃滓となつて、大地に墜ちてゆくにちがひない。

かうして太陽と月とは、もう動き出すばかりになつたが、馬を導いてくれるも

のがないと、日毎正しい道を往來することが出来ぬ。

「誰に馬を驅らせる事にしよう。うつかりしたものにこの役を任せると、大變なことになつてしまふのだから」

神々はかういつて、普く世界を見わたすと、「ムンデイルフアリ」といふ巨人の子たちに目がついた。「ムンデイルフアリ」は、それが誇らしくてたまらなくて、男の子に「マニ」といふ名をつけ、女の子に「リル」といふ名をつけた。

「マニ」は「月」のことであり「リル」は「太陽」のことである。

神々は、この二人に太陽と月との馬を導かせ様と決心した。そこで巨人「ムンデイルフアリ」に相談して二人を貰ひ受けて、これを天空に送つた。

「そなたたちは空にのぼつて、太陽と月に正しい道を往來さしてもらひたい。少しでも道をあやまると大變なことになるのだから、よく氣をつけるやうに」

神々からかういひつかつた二人は、天空に昇つて行つて、「リル」が太陽の道しるべをつとめ、「マニ」が月の道しるべをつとめることになつた。

次に神々は、巨人の世界「ヨツツンハイム」から「ノルフィ」といふ巨人の娘

「ノット」(夜といふ義)を呼びよせて、「夜の車」を掌らせることにした。

「夜の車」は闇の色をしてゐる。そしてそれを牽く馬も墨のやうな黒毛である。

黒面の「ノット」が静かに鞭を振ると、黒毛の馬は長い長い鬣を揺がせて、除るに「夜の車」をきしらせ始める。揺れ動く鬣からは、霜と霜とがふりこぼれて、音もなく大地に墜ちる。かうして人間界に夜が来るのであつた。

夜の乙女「ノット」は「デリング」(曙を意味す)といふ神と結婚して、「ダ

グ」(晝を意味す)といふ光り輝く美しい男の子を産んだ。神々は「ダグ」の輝

かしい姿を見ると、これ呼び出して「晝の車」を掌らせることにした。「晝の

車」は華やかに燦き渡つてゐる。そしてそれを牽く馬もまぶしい様に光る白毛で

ある。白面の「ダグ」が静かに鞭をふるると、白毛の馬はきらめく鬣を揺がせて、

徐ろに「晝の車」をきしらせ始める。揺れ動く鬣からは、光がさつと閃き出して、

あらゆる世界に明るさと喜びとを漲らす。かうして人間界に晝が来るのであつた。

しかし善きもの義しきものには、いつも悪しきもの邪なものがつきまとふ。人

間界に光を與へる太陽と月にも、恐ろしい敵があつた。それは猛々しい二匹の



狼おほかみであつた。狼おほかみの一つは「スコル」と呼よばれ、他たの一つは「ハーチ」と呼よばれた。  
「スコル」は「反抗はんかう」といふ意いであり、「ハーチ」は「憎悪ぞうを」といふ意いである。  
「追おつかける追おつかける。どこまでも追おつかけて、太陽たいやうと月つきとを吞のんでしまはな  
くてはならぬ。あらゆる世界せかいが再ふたび永久えいきうの闇やみにつつまれてしまふやうに」  
二匹にひきの狼おほかみはかう叫さけんで、凄すさましい勢いきほひで絶たえず太陽たいやうと月つきとを追おつかける。太陽たいやうや  
「月つきの車くるま」をひく馬うまは、それに脅おびえて懸命けんめいに驅かけ出すのであるが、ときどき狼おほかみに  
追おひつかれて、大おほきな口くちの中に嚙のみこまれかける。人ひとの子こが日蝕にっしよくといひ月蝕げつしよくとい  
ふ現象げんしやうはかうして起おこるのである。人ひとの子こは世界せかいが急きふに暗くらくなりかけるのに驚おどろき怖おそ  
れて、一齊いちせいにあらん限かぎりの音おとを立てたり叫さけんだりする。と、流石さすがの狼おほかみもびつくり  
して、嚙のみかけてみた太陽たいやうや月つきを吐はき出だしてしまふ。

「月つきの車くるま」を司つかさどる「マニ」は、神々かみがみの言いひつけによつて大空おほぞらに昇のぼつて行いつたと  
きに、二人ふたりの子供こどもを大地だいちに残のこしておいた。子供こどもの名なは「ヒウキ」といひ「ビル」  
といつた。「ヒウキ」は「次第しだいに大おほきくなるもの」といふ意い味みであり、「ビル」  
は「次第しだいに細ほそくなるもの」といふ意い味みである。「マニ」は子供こどものことが氣きになる

ので、ある時天界から遙か下なる大地を眺めおろして見た。と、二人の子供は、意地の悪い男に使ひ廻されて、夜もすがら水を運んでゐるのであつた。「マニ」はすつかり怒り出して、

「あんなひどい男のそばに、大事な子供を置いておくわけにいかぬ。ここに呼びよせることにしよう」

といつて、二人を大空に呼びよせた。かうして月は夜ごとに大きくなつたり、細くなつたりするやうになつた。

神々は、太陽と月と「晝」と「夜」に言ひつけて、一年の月日の進みかたの印をつけさせることにしたばかりでなく、さらにまた「夕方」「眞夜中」「朝」「午前」「正午」「午後」にも、彼等と力を合せて、同じやうな務を盡すように命じた。

昔の北歐では、一年は夏と冬との二つに分れてゐるだけであつた。「夏」は優しくおとなしい男で、あらゆるものから愛せられてゐたが、「冬」は氣が荒くて、意地が悪くて、すべてのものから憎まれた。北歐の冬はひどく寒い。そして身を

切るやうな風が、絶えず吹きすさぶのであつた。「フリースフェルグル」（屍を  
のむものの義）といふ巨人がゐて、鷲の羽衣を纏うて、天界の北の果ての果てに  
坐りこんである。この巨人が羽衣の翼をひろげて、はたはたと煽ると、劍のやう  
な寒風がさつと吹き出して、容赦なく大地の面を荒れまはつては、あらゆるもの  
を枯れ凋ませるのであつた。

## 太平洋西北岸創造説

### 銀狐の世界創造

世界の始には、水の外なんにもありませんでした。その頃、尾の長い狼と、銀  
狐とが、天に住んでゐました。

銀狐は、いろんなものを造らうと氣をあせつてゐましたが、尾の長い狼が、い  
つも、

「止せ止せ。そんな事をしても、なんにもならんぢやないか」  
と言つて、押止めてみました。それで銀狐は、たうとう狼が自分の側にゐるのが  
いやになつて、或日、

「お前、これから出掛けて行つて、焚木を取つて来ておくれ」  
と言ひました。そして、狼が出掛けて行くと、銀狐は一本の矢を取り出して、天  
上世界に穴をあけて、遙か下の方にある海を見下してみました。やがて、狼が歸  
つて來ましたが、銀狐は、天上世界に穴をあけたことを隠してみました。

翌日になると、銀狐は、又狼を焚木取りにやりました。そして、その留守に、  
弓の矢を穴に突つこんで、下へ落しますと、弓の矢は、遙か下の方の海に落ちて  
水の底に沈んでしまひました。銀狐は、穴から抜け出して、下へ下へと降りて行  
きました。そして、水の面に近づくと小さい圓い島を一つ拵へて、そこに止まる  
ことにしました。

暫くして、狼が歸つて來ますと、銀狐の姿が見えませので、あちらこちらを  
探しはじめました。そのうちに、天上世界に開いてゐる穴を見つけ出して、そこ

から下を覗きますと、遙か下の方の小島に、銀狐が坐りこんでゐるのを見つけた。

『おおい、おれは一人で悲しくてたまらんよ。どうしてそこへ降りてゆくのかね』  
と狼が聲をかけました。銀狐は、なんとも返事をしませんでした。

『そんなに意地の悪いことをするもんぢやないよ。どうにかして、おれも下に降りられるやうにしておくれ』

と狼が又聲をかけました。そこで、銀狐が、弓の矢を天の方に差出しましたので、狼はそれを傳つて下へ降りて來ました。

銀狐が拵へた島は大層小さかつたので、二人がそこに住むことになる、殆ど足を伸ばして寝ることも出来ない位でした。そこで、銀狐が足に力を入れて踏張りますと、島は、だんだんと大きくなりました。銀狐は、最初に島を東に踏み伸ばして、それから北に踏み伸ばして、それから西に踏み伸ばして、一番おしまひに南に踏み伸ばしました。そんなことを、五晩ほど続けてみますと、その島が、今日のやうな大きな世界になりました。

銀狐は、島を踏み伸ばすたびに、狼に向つて、

「島のまはりを一走りして、どれ位大きくなつたか見とどけて来ておくれ」

と言ひました。そこで、狼は、一走りすることにしましたが、始めのうちは、島が小さかつたので、すぐに廻つてしまつてゐましたが、おしまひには、餘り大きくなりましたので、元のところに歸つて来ないうちに、ひどく年をとつて、體中が灰色になつてしまひました。

世界が出来上ると、銀狐は、人間や動物や木や泉等を拵へました。狼はそれを見るとき、

「こんなに澤山に生ものを造つたんだから、何か食物を拵へてやらなくてはなるまい」

「一年のうちで十月を冬にしようぢやないか」と言ひました。

「そんなに冬を長くしたら、食物が足りないよ」と銀狐が言ひました。

「食物が澤山ない方がいいんだよ。人間は塵埃からお汁を拵へることが出来るんだらうから」

と狼が言ひましたが、銀狐はやはり何とも返事をしませんでした。しかし、暫くすると、

「冬を十月にするのは、よくないよ。二月で澤山だ。そしたら、人間は、日向葵の種や木の根や果實を食べることが出来るんだから」  
と言ひました。

「いや、いけないよ。やつぱり冬は十月にしくちやだめだ」  
と狼が何處までも言ひ張りました。そこで、銀狐が、たうとう怒り出して、

「お前は、あんまりしやべり過ぎるよ。わしは一年を四月にするつもりだ。冬が二月で春と秋とが一月づつだ。それで結構だ。もうこの事に就ては、とやかしくはないでおくれ」  
と言ひました。

かうして人間世界が出来し、一年が春夏秋冬の三つに分れるやうになつたので

す。

註アメリカ印度人は、日本などと違つて、一年を三期にわけてゐます。この神話は、即ちさうした觀念を反映してゐるのです。

英領北亞米利加創造説

## 世界創造

昔、ワイアンドット族が、高い高い空の上の世界に住んでゐました。

或る日、一人の黄教僧が人々に向つて、

「お頭の家の方に生えてゐる林檎の木を掘るがよい」

と言ひました。そこで、人々は一緒になつて、林檎の木の根を掘り始めました。酋長の娘がその時、林檎の木の側に寝轉んでゐましたが、起き上りもしないで、



皆みなのする事ことをぼんやり眺ながめてゐました。だんだん掘ほつてゐると、出し抜ぬけに大おほきな音おとがしました。天上てんじやうせかい世界の床ゆかを掘ほり抜ぬいたのでした。人々ひとびとは、びつくりして飛とびすぎりましたが、酋長しゆうぢやうの娘むすめだけは、やはり寝轉ねころんでゐましたので、林檎りんごの木きと一緒に下したへ下したへと落おちて行ゆきました。

下界げかいには、まだ陸りくといふものがなくて、一面いちめんに水みづが廣ひろがつてゐました。水みづの上うへには、白鳥はくてうの群むれが泳およぎ廻まはつてゐましたが、出し抜ぬけに大おほきな音おとがしましたので、びつくりして上うへを見みると、一本いっほんの木きと、一人ひとりの若わかい女をんなが空そらから降くだつて來てゐました。

「見みろ、女をんなが降くだつて來てゐる。水みづの中なかに落おちると可哀かあいさうだ。みんな一緒に集あつまつておくれ。あの女をんなが、わたし達たちの背せなの上うへに落おちるやうに」

と一羽いちはの白鳥はくてうが言いひました。そこで、みんなが一緒に集あつまりましたので、酋長しゆうぢやうの娘むすめは、無事むじにその背せなの上うへに落おちました。暫しばらくすると一羽いちはの白鳥はくてうが、

「この女をんなをどうしたらいいんだらう。こんな重荷おもを背負せおつては、お互たがひにとても長ながく泳およいでゐるわけに行いかないよ」

と言ひました。すると、他の白鳥が、

「それぢや、あの大きな龜公のそこに行つて、相談して見よう。龜公なら、きつ

とよい智慧を貸してくれるに違ひないから」

と言ひました。そこで、白鳥共は龜のところに行つて、

「女の子を一人背負ひ込んだが、どうも重くてたまらない。どうしたらいいんだらう」

と尋ねました。すると、龜は、

すぐに使を走らせて、あらゆる動物を呼び集めて、

相談會を開きました。

いろいろ話し合つてゐるうちに、一匹の動物が立ち上つて、

「白鳥さんたちの話によると、一本の木が、女の子と一緒に落ちて来て、水の底

に沈んださうな。で、誰か水の底に潜りこんで、木の根から少し土をとつて来た

らしいだらう」

といひました。それを聞くと、龜が、

「さうだ、少しでも土が手に入つたら、それで島をこしらへて、この女の住家に

することが出来るだらう。一體その木が沈んだところは何處なんだ  
と言ひました。そこで白鳥どもは、みんなを連れて、林檎の木  
の沈んだところに行きました。

「さあ、誰かうまく潜れるものはないか  
と龜が言ひました。」

眞先に川獺が沈んで行きました。そして、暫くたつて、水  
の面に浮び出ました。が、ほつと大きな息をついたかと思ふと、  
その儘死んでしまひました。こんな風にして、みんなが死  
んでしまひますので、あとでは、誰も水の中に潜らうといふ  
ものがなくなつてしまひました。

すると、一番おしまひに、年をとつた蟾蜍が、

「わたしが、やつて見ませう」

と言ひました。蟾蜍は、大變小さくて、大變醜かつたので、  
それを聞くと、みんな笑ひ出しました。しかし、龜だけは、ま  
じめな顔をして、

「ぢや、どうかやつて見ておくれ」

と言ひました。

蟾蜍は、のろのろと水の中に沈んで行きましたが、なかなか浮んで来ませんでした。みんなは、待つて待つて、たうとう待ちきれなくなつて、

「あいつは、もう歸つて来ないだらう」

と、話し合つてみました。すると、やがて、水の上にぶくぶくと小さな泡が立ち始めました。と思ふと、蟾蜍の姿が、ぬつと水の上に現れました。そして、ぱくりと口を開いて、龜の甲の上に少しばかりの土を吐き出しました。それを見ると、小さい龜が、土を掴んで、大きな龜の甲にすりつけ始めました。と土は、見る見る大きくなつて、一つの島になりました。そこで、白鳥どもは、背から女の子を下して、島の上に載せました。島はだんだんと大きくなつて、今日のやうな大地になりました。

龜と蟾蜍との働きで、大地が出来上りましたが、まだ日の光がありませんので、世界中が、眞暗でした。そこで、龜は、あらゆる動物を集めて、相談を開くことにしました。いろいろ話し合つてゐるうちに、小さい龜が立ち上つて、

「若し、わたしが空に昇ることが出来たら、いくらか日の光を集めて、それを球にして持つて歸るんだがな」

と言ひました。それを聞くと、大きな龜が、

「さうだ、さうだ、一つ空に昇つて見るがよい。お前には、大した力が備はつてゐるんだから」

と言ひました。

小さい龜は、すぐに呪文を唱へました。すると、急に烈しい嵐が吹き起つて、雷光を含んだ雲が大きな音を立てて、みんなの集まつてゐるところの方に轉がつて來ました。それを見ると小さい龜は、素早く雲の中に飛び込んで、雲と一緒に上へ上へと昇つてゆきました。

暫くすると天上世界に着きましたので、雷光を集めて、二つの球をこしらへて、空からぶら下げました。世界中が急に明るくなりました。二つの球といふのは、太陽と月でした。

又、光りの起原について、左の様な説もあります。

昔、世界には、光といふものがなくて、何處もかしこも眞暗でした。人々は、毎日々々闇の中にあるのが嫌で嫌でたまらなくなりしました。

その頃、一本の大きな枯木が野原に突つ立つてゐました。虎斑鼠は、その木を見るとき、

「これに火をつけたら、世界中が明るくなるに違ひない」

と思ひました。そこで、枯木の根に火をつけて、灰がたまると、棒の先でそれを掻きのけかきのけしてゐました。そのうちに、枯木は、たうとう大地に倒れて、世界中が明るくなりました。人々は、それを見て、大變に喜びました。

ところが、熊やその友達は、年中暗闇の中にあるのが好きでしたので、木が倒れるのを見ると一生懸命に、その上に土を振りかけて、

「暗だ暗だ暗だ」

と唱へました。すると、虎斑鼠は大變に怒つて、土を拂ひのけて、火を掻き起して、

「光だ光だ光だ」

と叫びました。かうして、熊と虎斑鼠とは、お互に土をかけたなり、火を掻き起したり、

「暗だ暗だ暗だ」

と叫んだり、

「光だ光だ光だ」

と叫んだりしてゐましたが、おしまひには、二人ともすつかり疲れてしまひましたので、両方から譲り合つて、一日の半分は明るくて、残りの半分は暗いやうにすることにきめました。しかし、熊は、やはり明るいのが厭でたまりませんので、

「こんなことになつたのも、お前のせみだ」

といつて、虎斑鼠を追つ駆けました。虎斑鼠は、びつくりして、穴の中に逃げ込みましたが、逃げ込む時に、熊のために背中を掻きむしられました。だから、今日でも虎斑鼠の背には、斑がはいつてゐます。

## 怠惰カメレオン

世界の初めに、ウンクルンクルといふ神様が、一匹のカメレオンを呼び出して、御苦勞だが、大地に降つて行つて、人間どもに、「お前たちはいつまでも死ななくてよい」と、さういつておくれ」と言ひました。

カメレオンはすぐに天界から大地をさして出かけてゆきました。しかしちつとも道を急がないで、木の實を摘んで食べたり、樹の枝に登つて蟲を探したりしてゐました。その中にお腹が一ぱいになつて、睡氣がさして來たので、日なたぼつこをしながら、こくりこくりと眠り出しました。

そのうちにウンクルンクルの氣が變つて來ました。ウンクルンクルは一匹の蜥蜴を呼び出して、

「御苦勞だが、大地に降りて行つて、人間どもに「お前たちは何時かは死ななくてはならぬ」と、さういつておくれ」



と言ひました。

蜥蜴はすぐに天界から出かけました。そして、ひたすら路を急ぎましたので、途中でカメレオンを追ひ越して、眞先に大地に着きました。そして人間たちに對つて、

「お前たちは、何時かは死ななくてはならぬ、とウンクルンクルさまがさうおつしやつたよ」

といつて、すぐさま天界をさして引き返しました。

それから暫くたつて、カメレオンがやつと大地に着きました。そして人間たちに對つて、

「お前たちは、何時までも死ななくてよいと、ウンクルンクルさまが、さうおつしやつたよ」

と傳へました。人間たちはそれを聞くと、氣色ばんで、

「わたし達は、たつた今蜥蜴の言葉を聞いたところだよ。わたし達はいつか死ななくてはならぬと、蜥蜴がさういつたよ。お前のいふことなんか當にならぬ」

と叫びました。

かうして人間は死ななくてはならぬやうになりました。（ズル族）

註同一の神話が、ベチユアナ族、バロンガ族、バスト族等の間に語られてゐます。今日でもバロンガ族は、カメレオンの怠惰が死を齎したとして、之を憎んでゐます。子供などは、カメレオンを見つけると、その口に煙草をつめ込んで、苦しさに青くなり黒くなりするのを眺めて喜んでゐます。

### 兔の粗忽

あるとき天界にゐる月が、一匹の兔を呼び出して、  
「お前、これから大地に降つて行って、人間たちに「お月様が死んでまた生き返るやうに人間も死んでまた生き返るやうにしてやる」と傳へておくれ」  
といひつけました。

兔はすぐに天界から大地へ降つて行きました。そして人間たちに対つて、  
「お月さまが死んで再び生き返ることがないやうに、お前たちも一旦死んだら、  
生きかへることは出来ないよ」  
といひました。兔は月がいつた言葉を忘れて、まるで反対のことを人間に傳へた  
のでした。

しかし兔は、大切な役目を無事に済ましたと思つて、得々として天界に歸つて  
來ました。月は兔の姿を見ると、すぐに、

「どうだね、わしのいつた通りに人間に傳へて來たかね」  
と尋ねました。

「ええ、全くお言葉の通りに傳へてまゐりました」  
と兔が答へました。

「では、お前のいつた通りを、ここで繰り返して見るがいい」  
と月がいつました。

「はい、お月さまが死んで再び生き返ることがないやうに、お前たちも一旦死ん

だら生き返ることは出来ない、かう申し傳へました」  
と兔が答へました。これを聞くと月は大變怒つて、いきなり棒を取り上げて、兔を目がけて投げつけました。棒は兔の唇に當つて、そこを傷つけました。兔はあまりの痛さに、夢中になつて月に飛びかかるなり、その顔をさんざんひつ掻きました。

かうして兔の言傳の間違から、人間は死ななくてはならぬやうになり、かうして兔の唇は今日まで裂けて居り、又かうして月の顔は今でも傷だらけであります。(ホツテントツト族)

註これに類似した神話が、東部亞フリカのマサイ族の間にも存してゐます。ナイテル・コプといふ神がレ・エヨといふ男に「子供が死んだら空に投げ上げて、月のやうに死んでまた生き返れ」といへと教へましたが、死んだのが自分の子でなかつたので、神に教へられた言葉に反對を唱へました。かうして人間は死ぬやうになつたといふのであります。

## 月は何故虧けるか

ある時太陽が月に對して大變腹を立てました。太陽は、

『憎い奴、ひどい目に遭せてやるぞ』

といつて、小刀をもつて月のところに行きました。そして月を捕へて、體から少しばかり肉を切り落しました。

太陽は毎日、月のところにやつて來ては、小刀で少しづつ肉をそぎとります。

月の體はだんだんと小さくなつて行きました。月は、

『これはどうもこまつたことになつた。毎日肉を切りとられては、今に死んでしまふだらう。自分が死んだら、子供を養つてやるものがなくなる。どうにかして

生きてゐたいものだ』

と考へ悩みました。で、ある日太陽に對つて、

『どうか、今しばらく肉を切り落すことを止しておくれ』

と頼みました。

「なぜかね」

と太陽が尋ねました。

「だつて、わしの體はもうこんなに小さくなつたらう。この上肉を切りとられると、死んでしまふよ」

と月が悲しさに言ひました。

「死んだつて、おれはかまはないよ」

と太陽がいひました。

「わしが死ぬと、子供を養うてくれるものがなくなる。それでは餘り可哀さうだから、肉がついて體が肥るまで待つておくれ」

と月が熱心に頼みました。

「なるほど、それは可哀さうだ。それなら、お前が肥るまで待つてやらう。だが、肉が澤山ついたら、また切り落すんだよ」

太陽はかういつて歸つてゆきました。

かうして太陽は月の體が大きくなるのを待つてはその肉を削ぎとるのでした。

だから月はあんなに大きくなつたり細くなつたりするのです。

## 太陽の出現

昔あるところに一人の男が住んでゐました。その男が腕を挙げると、脇の下から光がさしてあたりが眩しい程明るくなるのでした。人々はそれを大變不思議に思つてゐました。

と、ある日一人の年をとつた女が、他の人たちに對つて、  
「本當にあの男は不思議な男だね。體から光が出るなんて、今まで聞いたこともないよ。あの男を空に投げようではないか。さうしたらどこもかしこも明るくなつて、米の出来ばえもきつとよくなるに違ひないから」  
といひました。

人々は、すぐに年をとつた女の話に同意しました。で、男が眠つてゐるときを見すまして、足音をしのばせてその側に歩みよりました。そしていきなり男を抱

き上げて、みんな力を合せて、大空目がけて投げ出しました。

男は、「あつ」と叫んで目を覺ました。もう遅い。自分の體は空をきつて、どんどん上へ飛んでゆくのでした。そしてたうとう天上界に着いてしまひました。仕方がないので、男はそのまま天上界に住むやうになりました。と、だんだん時がたつにつれ、男の體の形が變つて來て、おしまひには眞圓くなりしました。それが太陽であります。

かうして人間の住む世界は、太陽のお蔭でいつも明るいやうになりました。

## 死の起原

あるとき、月が人間たちに対つて、

「わしを見るがいい。わしはときどき體が段々と瘦せ衰へて行つて死にさうになるが、やがてまた肥つて來るだらう。その通りにお前たち人間も、何時までも生きてゐるのぢや。死んだやうに見えるのは眠つてゐるのぢや。決して本當に命が



なくなつたのではない。人間には死ぬといふことは無いものぢや」

といった。人間たちは之を聞くと、月の言葉を信じて、心から喜んだ。が、そこに居合せた一匹の兔がはたから口を出して、

「お月さま、あなたの仰有ることは間違つてゐます」  
といった。月は驚いて、

「どうしてわしの言ふことが間違つてゐるのかね」  
と尋ねた。

「だつて、わたしのお母さんは本當に死んでしまつたんですものと兔が答へた。月は頭をふつて、

「そんなことはない。死んでゐるのではない。ただ眠つてゐるのぢや。今に目が覺めるよ」

といひました。

「いいえ、本當に死んでしまつたんですよ。眠つてゐるのではありませんよ」と、兔はどこまでもいひ張つた。月はたうとう怒り出して、

『わしがこれほど本當のことをいつて聞かせてゐるのに、お前はそれを信じないんだな。よし、そんなに死にたけりや、今後はみんな死ぬやうにしてやらう』  
といつて、兔の口をひどく擲りつけました。それで兔は今日まで唇が缺けてゐます。また人間やその他の生物もみんな死なねばならぬやうになりました。

## ヘブライ天地創造説

神様には始めもなければ終りもないと言ふ事は、今日多くの人が信じてゐる事  
でせう。この神様が、まだ天地をお造りにならなかつた以前には、土地はきまつた形もなく、空漠とした、暗黒なものであつて、萬物には何の差別もなかつたのである。

ずっと大昔、神様が一言言葉をおかけになると、忽ち天と地とが出来上つた。  
それから、神様は、

『光あれ』

と仰せられたので、これから光といふものがあるやうになつた。今日のやうに明るい時と暗い時との區別が出来たのは、この時からである。神様は暗い時を夜と名づけ、明るい時を晝と名づけられた。これが一日の中に夜の晝とあるやうになつた第一日である。

そこで、神様は蒼空を造り、その蒼空の下の水と、上の水とお分ちになり、蒼空をば天とお名づけになつた。これが第二日目の事で、これからは朝と夕方とがあるやうになつたのである。神様は更に言葉をかけて、天の下なる水は一所に集まつて、乾いた土が現れるやうにされた。そして乾いた土を地と名づけ、水の集まつたのを海とお名づけになつた。そして、出来上つたこれらを見て、非常に喜びになつて更に、

「土は草と木と花と實とを地に出せよ」

と仰せられたので、土には草が青々と生えて美しい花が咲き、木には美味しい果がなつた。これが三日目の事である。今度は二つの大きな光をお造りになつて、大きな光に晝を司らしめ小さな光に夜を司らしめになり、又星をもお造りになつ

た。その大きな光が太陽であり、小さな光が月である。太陽の輝く時が即ち晝であり、月と星とが照らす時が即ち夜である。これが第四日目の出来事であつた。世界の形はかうして大體出来上がったので、今度は、神様は又地上のあらゆる生物、鳥や、魚や、昆虫や、家畜や、獸物を其類に従つてお造りになつた。これが第五日目のことである。

かくて世界には森や畑があり、そこには色々な動物が生れ、畑は緑に萌え、花は咲き、鳥は梢から梢へと渡り囀り、あらゆる生物は森の邊をさまよひ歩き、天地は實に美しいものとなつた。けれども神様の命令に従つて、これ等のものを治める者がまだあなかつたので、神様は自分の像に似せて人をお造りになり、  
「生めよ繁殖よ地に満盈よ。そして萬物を従はせよ。又海の魚と天空の鳥と地に動くところの凡ての生物を治めよ」  
と仰せられ、又全地の表面にある果實のなる草や、核のある果のなる樹を人間の食物とする事を許し、獸や鳥や其他すべての命ある物には、その食物として、すべての青い草をとつて食ふ事をお許しになつた。これが即ち第六日目の事である。

七日目となつた。神様はすべての物を、すつかりお造りになつたから、これを祝つてお聖めになり、この日をお安息となされた。神様が始めて光をお呼び出しになつてから、人間を造られる迄には、六日を費されたのである。

萬物は漸く整つたので、そこで神様は、人間に命の息を吹き込んで、これに生命をお與へになつた。そしてエデンの東の方に園を設けて、そこに人を住まはせ、見て美しく、食べて美味しい、色々な樹を生ぜしめ、その園の中には生命の樹と善悪を知る樹とお植ゑになり、また園を潤ほす爲にこの園を源として四つの河をお造りになつた。これが即ちエデンの園で、吾々のよく言ふ「パラダイス」である。

さて、神様はその花園を人間に與へ、これを管理する事をお命じになり、その人間の名をアダムと名づけられた。

この時神様はアダムに向つて、  
「園の樹の果はどれをとつて食べてもよろしい。併し善悪を知る樹の果は決して食べてはならぬ。若しお前がそれを食べたなら、お前の命はないものと思ふがい

い  
□

と仰せられた。神様はアダムがすべての鳥や獣にどんな名前をつけるか見たいものだとお考へになつて、その事をお言ひつけになると、アダムはその命に従つて、鳥や獣に、いちいちなまへ

けれども、他の鳥や獣はそれぞれ多くの仲間があつたが、人間はアダムがたつた一人であつた。そこで神様は、彼を助けて共に生活する人を今一人造らうとお考へになつて、アダムを深く睡らせて、その間にその肋骨を一本抜きとり、其處を肉でふさいで置いて、その肋骨から一人の女をお造りになつた。そしてアダムの所に連れておいでになると、彼は、  
□それこそ吾が骨の骨、吾が肉の肉である□  
といつてその人を女と呼び、その女にエバといふ名をつけた。これから二人は互に愛し合つて神様の與へて下さつたこの美しい花園の中で、幸福な日を送るやうになつた。二人は裸體ではあつたが、まだ恥づかしいといふことを知らぬ程聖らかな心を持つてゐたのである。

## パレスチン創造説

昔神が世界のさまざまの地方から、さまざまの土を採つて、最初の人であるアダムを造つた。神はアダムを造り上げると、大地の上に横へた。アダムは人形のやうに動かないで四十日が間地面に倒れたままにしてゐた。神は天使たちを呼びよせて、

「わしがこの男を生きて動くやうにするから、動き出したら、みんな大事に崇め尊ばなくてはならぬ」

と言つた。そしてアダムの鼻の孔から息を吹き込むと、忽ち生命が體中に入つて生きて動くやうになつた。それを見ると、天使たちはみんなこれを崇め尊んだが、ただイブリスといふものだけは、傲然と構へてゐた。神はそれを見て、

「イブリス、そなたはなぜアダムを崇め尊ばないのぢや」と責めた。

「たかが土から出来たものに、頭を下げるのは嫌ひです」

とイブリスが答へた。これを聞くと、神は非常に怒つて、

「わしの言ひつけに背くものは、ここに住ませて置くわけには行かぬ」と言つて、イブリスを樂園から追ひ出してしまつた。

イブリスは、ひどくアダムを恨んで、

「おれが樂園から追ひ出されたのは、全くアダムのせみだ。このままにしては置かぬぞ」

と言つて、魔王サタンとなつて、アダムの子孫である人間に執念深く仇をするやうになつた。

神はアダムを男女兩性にこしらへたのであつた。で、體の半分は男で、他の半分は女であつた。暫くの間の間さうしてあるうちに、やがて二つに分れて、立派な男と立派な女になつた。男はやはりアダムと呼ばれ、女はリリスまたエル・カリネーと呼ばれた。リリスは猶太人が呼ぶ名であり、エル・カリネーは亞拉比亞人の呼ぶ名であつた。

二人は神の言ひつけに従つて夫婦となつた。しかし仲がよくなかつた。アダム



が、

「お前は女だから、わしの言ふことに従はなくてはならぬ」

と言ふと、エル・カリネーはつんとして、

「いやですよ。そんなことは出来ませんよ」

と言つた。

「なぜだね」

「だつて、あなたもわたしも同じ土から出来たのでせう。だから、あなたはわたしに命令する権利なんかありませんわ」

エル・カリネーはかう言つて、どうしてもアダムの言ひつけに従はないので、

神が怒つて、樂園から追ひ出した。

エル・カリネーは、自分より先に樂園から追ひ出されたイブリスの許に訪ねて

行つて、その妻となつた。そして二人の間に澤山の悪魔が生れて、永久に人間の

敵となつた。

エル・カリネーを追ひのけた神は、アダムのために新たに一人の女をこしらへ

ることにした。しかしアダムと同じやうに土で造つては、また夫婦の仲が睦まじく行かぬと考へたので、今度はアダムを眠らせて、そのひまにアダムの肋骨を引きぬいて、それで女をこしらへた。この女が即ちエバである。

二人は夫婦となつた。エバはよくアダムの言ふことを聞いたので、二人は樂園の中で楽しい月日を送ることが出来た。それを見たイブリスは、

『よし、おれが邪魔をしてやるぞ』

と言つて、そつと樂園に忍び込んだ。

『うかうかしてゐて神に見つかりと大事だ。どこかに身を隠すところはないか知ら』

イブリスはかう思つて、あたりを見廻すと、一匹の蛇が目についた。

『うん、いい隠家が見つかった』

イブリスはかう言つて、忽ち姿を小さくして、蛇の牙にあいてゐる空洞に入り込んだ。そして蛇の口を借りて、うまくエバに取り入つて、

『エバさん、樂園にある小麥を食べてごらん』

と勧めた。エバは驚いて、  
「とんでもない。小麦は禁制の食物です。神様から食べてはならぬと堅く申しつけられてゐるのです」と言つた。

「そんなことを言はないで、まあ食べてごらん。素敵においしいんですよ」と、蛇がしつこく勧めた。エバもつひにその氣になつて食べて見ると、非常にいい味がするのでたうとう夫のアダムを説き伏せて之を食はせた。

神はすぐにそれを知つた。そしてアダムとエバとイブリスと蛇とを樂園から追ひ出した。しかしアダムは樂園を出るときに、神の目を盗んで、一つの鐵床と二本の火箸と二つの槌と一本の針とを持ち出した。

アダムは「後悔の門」から追ひ出され、エバは「哀憐の門」から追ひ出され、イブリスは「呪ひの門」から追ひ出され、蛇は「災ひの門」から追ひ出された。そしてアダムはセレンディブ（今日の錫蘭）に降り、エバはジダーに降り、イブリスはアカバーに降り、蛇は波斯のイスファハンに降つた。

かうして、アダムとエバとは、永い間はなればなれになつて暮してゐたが、二百年たつてからメツカの近くに聳えてゐる「認めみとの山やま」アラファツト山さんで、はしなくも再會さいくわいすることになつた。アダムは樂園らくゑんで犯をかした罪つみを心こころから悔くいてゐたので、天使てんしガブリエルが可哀かあいさうだと思おもつて、彼かれをアラファツト山さんに導みちびいて、エバを見み出ださしめたのであつた。

### ミクロネシヤ創造説さうぞうせつ

太初はじめには、天てんも地ちもありませんでした。有あるものは、果はてしなく廣ひろがつた海うみと、アレオブ・エナブといふ年とし老おいた蜘蛛くもとだけでした。蜘蛛くもは漫まん々まんたる大海原おほうなばらにふわふわと漂ただようてゐました。

ある日ひ蜘蛛くもは、非常ひじやうに大おほきな貝かひを見みつけました。蜘蛛くもはそれを取とり上あげて、  
「どこにか口くちがありさうなものだな。あつたら中なかに這はひ込こんでやるが」  
と、四方八方しほうはつぱうから眺ながめて見みましたが、どこにも口くちが開あいてゐませんでした。彼かれは

貝を叩いて見ました。すると空洞のやうな響を立てましたので、  
「とにかく、中には何もはいつてゐないな」  
と獨言をいひました。

蜘蛛は、どうにかして口を開けさせたいと思つて、頻りに呪文を唱へてゐますと、やつと少し蓋が開きました。蜘蛛はすかさず貝の中に潜り込みましたが、蓋が少ししか開いてゐないので、立ち上ることも出来ませんでした。

蜘蛛は貝の中を根氣よく這ひまはつてゐるうちに、一匹の蝸牛を見つけ出し、ました。彼は蝸牛に元氣をつけてやるために、それを腋の下に入れて三日が間眠りつづけました。それからまた、あちらこちらと探し廻つてゐると、更に大きな蝸牛を見つけました。蜘蛛は又それを腋の下に入れて、三日が間眠つてゐました。目が覺めると、小さい方の蝸牛に對つて、

「どうも貝の天井が低くて困る。せめて坐れるくらゐ天井をおし上げてもらひたいが、お前にそれが出来るかね」  
と尋ねました。小さい蝸牛は、

「出來ますとも」

と答へて、少し天井を押し上げました。蜘蛛はお禮を言つて、その蝸牛を貝の西の方に据ゑつけて、それを月に變へました。

月が現れたので、貝の中が少し明るくなりました。蜘蛛は月の光で一匹の大きな齧蟻を見つけました。彼は齧蟻に對つて、

「お前は、今よりも一層高く天井を押し上げることが出来るかね」と尋ねますと、蟲は、

「出來ますとも」

と答へて、天井を押し上げ始めました。天井は次第に高くなりましたが、あまり骨がをれるので、齧蟻の體から汗がどんどん流れ出しました。蜘蛛はその汗を集めて海をこしらへました。それと同時に押し上げられた貝の上蓋が天空となり、下の蓋が大地となりました。蜘蛛は大きな方の蝸牛を貝の東の方に据ゑつけて、太陽に變へました。

天地、日月、海などはかうして出來たのでした。（ナウリ島）

また一説に、世界の始めには、海だけでした。海の南に暗礁があり、海の北に沼がありました。ロアといふ神が、海に對つて、

『汝の暗礁を見よ』

と言ひました。すると忽ち暗礁が海の面に浮び出て陸となりました。ロアが更に、

『汝の砂を見よ』

と言ひますと、陸はすぐに砂に覆はれました。

『汝の樹を見よ』

ロアがかう言ひますと、忽ち陸地にいろんな樹が生えました。ロアは更に、

『汝の鳥を見よ』

と叫びますと、忽ち多くの鳥が現れました。そしてその中の海鷗が舞ひ上つて、

大地の上に大空を擴げました。(マーシャル群島)

また一説に、太初一本の大きな樹が、逆しまに生えてみました。その樹の根は

大空の中に廣がつてゐるし、その枝は海原に廣がつてゐました。

この世界樹の枝のうちに、一人の女が生れ出ました。と、エラファズといふ天

空神が一握の砂を女に與へて、

「これを撒きちらすがいい」

と言ひました。女が海の面に砂を撒きちらしますと、それが忽ち變じて大地となりました。

註他の神話によると、天がまだ大地に接し、大地がまだ海と分れなかつた頃、夕ブリエリツクといふ神が鳥に變じて、この混沌たる世界の上を翔り、それからリギといふ蝶が大地と海の上を飛んで、この二つを分ち、更に他の神々が天を大地と分つて、上に押しあげたといふのであります。

### 日月神話

大昔ナ・レアウが、一人の男と一人の女とを造つたあとで、彼等に對つて、  
「わしは、お前たちをこの大地に留めておくから、よく大地の番をするがいい。」



が、お前たちは、決して子供を生んではいけないよ。わしは人間が殖えるのを好まないのぢや。もしわしの命令に背いたら、ひどい罰を與へるから、さう思ふがいい」

と言つて、天界に去りました。

二人の人間 それはデ・バボウといふ男と、デ・アイといふ女でした。しかし神さまの命令に背いて、三人の子を産みました。するとナ・レアウの召使である一匹の鰻が、早くもそれを見つけて、ナ・レアウに、  
「神さま、人間どもは、あなたさまの御命令に背いて、三人までも子を産んだのでございます」

と告げ知らせました。これを聞くと、ナ・レアウは大變怒つて、大きな棒を手にして、二人の男女を留めて置いた島に降つて來ました。二人は神さまの嚴かな姿を見ると、その言葉に背いた恐ろしさの餘り、ペタリと大地に坐り込んで、  
「どうかお赦し下さい。お言葉を破つた罪は幾重にもお詫びします、でも生れた子供は、わたくしたちの生活に大層役に立つのでございます。太陽は光を與へて

くれます。そのお蔭でわたくしたちはものを見ることが出来ます。太陽が沈むと、月がその代りに現れて、光を與へます。それから海は、わたくしたちに澤山の魚を與へて、食物に不自由なくしてくれるのでございます。』  
と言ひました。ナ・レアウは、二人の言葉を聞くと、心の中で、  
『なるほど、二人の言ふことは本當だ。赦してやることにしよう』  
と言つて、そのまま天界に歸つて行きました。

かうして太陽や月や海が、世界にあるやうになつたのでした。(ギルバート群島)

註一ペリユー群島にも、簡単な日月神話があります。それによりますと、大昔二人の神が手斧で大きな石を削つて、太陽と月とをこしらへて、天空に投げ上げたといふのであります。

註二デ・バボウ及びデ・アイといふ二人の男女が、太陽と月と海とを産んだといふ一事は、わが國の古史神話に伊奘諾、伊奘册の二神が、天照大神と月讀命と素

蓋鳴命のをのみこととお産うみになつたとあることを思おもひ出ださせます。

## 人類じんるゐの起原きげん

ミクロネシアには、餘あまり念ねんの入いつた人類じんるゐ創生さうせい神話しんわが見出みいされません。みな簡單かんたんな素朴そぼくなものばかりです。カロライン群島ぐんたうの神話しんわによると、リゴブンドといふ神かみが、空そらから大地だいちに降くだつて來きて、三人さんにんの子こを生うみ、そしてその三人さんにんが人類じんるゐの祖先そせんになつたと言いふのであります。また同群島どうぐんたうに存ぞんする他の神話しんわに従したがへば、ルクといふ神かみが大地だいちを造つくつて、これに樹きを栽うえつけたあとで、自分じぶんの娘むすめのリゴアププをそこくだに降くだしました。リゴアププは大地だいちに降くだると、大變喉たいへんのどが渴かわきましたので、樹きの洞うつろにたまつてゐる水みづを飲のみました。水みづの中なかに小ちひさい動物どうぶつが入はいつてゐましたが、かの女ぢよはそれに氣きがつかないで、水みづと一いつしよに嚙のみ下くだしました。すると間まもなく身重みおもになつて、一人ひとりの女をんなの子こを産うみました。女をんなの子こが大おほきくなつて、一人ひとりの娘むすめが出來でき、その娘むすめがまた一人ひとりの男をとこの子こを産うみました。男をとこの子こが大おほきくなると、その脇腹わきばらの骨ほね

の一本から男が出来、その男がリゴアププと夫婦となつて、この二人が人間の祖先になつたと言ふのであります。

更にモルトロク島の神話によりますと、リゴアププが、樹の洞にたまつてゐる水を飲んで、一人の女を産み、その女の腕から一人の男が生まれ、雙の眼から男と女が生れて、それ等が人類の先祖となつたと言はれてゐます。

またギルバート群島の神話によると、ナレウアといふ神が、一本の樹に火をつけますと、その火花と灰とから、人間どもが生れ出しました。ナレウアはそれ等の人間に言ひつけて、世界の諸地方に分れ住むやうにさせました。それが人類の祖先であると言つてゐます。

## インドネシヤ創造説

太初には、茫茫たる海があるだけでした。海原の中に一つの大きな岩があつて、絶えず波に洗はれてゐましたが、その岩から一羽の鶴が生まれました。岩は鶴を産

むとときに汗を流しました。そしてその汗からルミム・ウツトといふ女神が生まれま  
した。

鶴が女神に對つて、

「二握の砂を取つて撒きちらしてごらん」

と言ひました。ルミム・ウツトはすぐ二握の砂を取つて、海原に撒きちらします  
と、見る見るそれが大きくなつて世界が出来ました。

世界が出来上がると、女神は高い山に登つて、その頂に突立つて、吹き來る西風  
に體を曝してゐました。そのうちに身重になつて、一人の男の子を産みました。

男の子が大きくなると、ルミム・ウツトが妻を娶るやうに勧めました。男はそ  
の言葉に従つてあちらこちらを探し廻りましたが、どうしても女を見つけること  
が出来ませんでした。ルミム・ウツトは氣の毒に思つて、自分の背丈と同じ長さ  
の杖を息子に與へて、

「この杖よりも背の低い女を探すがいい。そんな女を探したら、それがお前の妻  
となるべき運命を持った女ですよ」

と教へました。そして二人は別れて、世界を一めぐりすることになりました。母は右に廻り、子は左に廻った。子は左に廻つて、永い間歩き續けてゐるうちに、たうとう世界を一巡りしてしまつて、二人がぱつたり出會ひました。二人は餘り永い間別れてゐたので、お互に見知りませんでした。男はすぐに杖と女との高さを比べて見ましたが、杖は男が氣のつかぬうちにだんだんと伸びてゐましたので、女の背丈よりずっと高かつたのでした。

「これだこれだ、この女こそお母さんに教はつた通りの女だ」  
と思つて、たうとうルミム・ウツトを自分の妻にしてしまひました。

ルミム・ウツトは澤山の子供を産みました。そしてそれがみんな神さまとなりました。（ミナハツサ島）

また一説に、太初には、茫々たる海と、それに覆ひかぶさつてゐる天空があるだけでした。

ある時、天空から一つの大きな岩が海の中に墜ちて來ました。そして月日がたつにつれて、赤裸々な岩の面に粘土が積み重なると、そこに澤山の蟲が生れまし

た。

蟲どもは、絶えず岩の面をかざりつづけますので、小さい砂土がだんだんと岩を覆ふやうになりました。と、天空に輝く太陽から、木でこしらへた刀の柄が落ちて来て、砂土の中に根をおろして、大きな樹となりました。暫くすると、今度は月から葡萄の蔓が落ちて来て、樹にまっはりつききました。

かうして樹と葡萄とが抱き合つて、一人の男の子と、一人の女の子とを産みました。そしてその二人が結婚して、カヤン族の祖先となりました。(中央ボルネオのカヤン族)

神々の誕生についての一説には、世界の初めに、一匹の蜘蛛が天から降りて来て、巣を造りました。と、小さい石が一つ蜘蛛の巣にひつかかりましたが、それが段々大きくなつて、天が下一ぱいに広がる大地となりました。

暫くすると、天空から地衣が墜ちて来て、岩の上に根をおろし、地衣の間から蟲が生れて、頻りに糞をひり、その糞から岩の上の土壌が出来ました。

暫くすると、また天から一本の樹が墜ちて来て、土壤の中に根をおろしました。

それから今度は一匹の蟹が大地に降りて来て、鋭い鋏脚でやたらに地面をかきむしり掘り返しました。かうして澤山の山や谷が出来ました。

一本の葡萄の蔓が樹に抱きつきました。さうしてみると、一人の男と一人の女とが、天からこの樹の上に降りて来て、男は刀の柄を、女は紡錘を地面に落しました。と、刀の柄と紡錘とが夫婦となつて、一人の子供を産みましたが、その子供は體と頭とを持つてゐるだけで手も足もありませんでした。

この怪物がひとりでに、二人の子を産みました。一人は男で、一人は女でした。男女は結婚して澤山の子を産み、その子がまた澤山の子を産む。かうしてゐるうちにだんだんと形態が完全になつて來ました。それがいろんな神様でありました。

(中央ボルネオ)

## 蛇の頭の上の大地

世界の初めには、天空と海とがあるだけでした。海の中に一匹の大きな蛇が泳



ぎ廻まはつてゐました。その蛇へびは、光ひかり輝かがやく石いしをはめた黄金わうごんの冠かむりを頭かしらにしてゐました。ある時とき天空てんくうにゐる一人ひとりの神かみが、下界げかいを見みおろしますと、海うみの中なかに光ひかり輝かがやくものが動うごいてゐます。何なんだらうと眼めをこらすと、それは蛇へびの頭かしらになつてゐる黄金わうごんの冠かむりでした。神かみは、

「あの上うへに大地だいちをこしらへることにしよう」と言いつて、一握ひとしまりの地つちを天空てんくうから投なげ落おとしました。土つちはうまく蛇へびの頭あたまに落おちかかつて、一つひとつの島しまとなりましたが、月日つきひがたつにつれて、だんだんと大おほきくなつて、たうとう大地だいちとなりました。（東南ボルネオ）

また一説いっせつに、空そらには七ななつの世界せかいがあります。そしてそのうちで最もつとも高たかいところにある世界せかいに神々かみがみのうちで最もつとも偉大ゐだいなムラ・ディアデイが、二羽にばの鳥とりを召使めしつかひとして住すんでゐました。

ムラ・ディアデイは、七ななつの世界せかいの一つひとつに大おほきな樹きを生はやして、その枝えだで天てんを支ささへることにしました。それから一羽いちばの牝めんどり鶏どりをこしらへて、それを大おほきな樹きにとまらせると、やがて三みつつの卵たまごを産うみました。

暫らくすると、三つの卵から三人の女の子が生まれました。そこでムラ・ディア  
デイは、三人の男を造つて、女たちと結婚させることにしました。これ等の男女  
の間に大勢の子が生まれて、それがまたお互に夫婦になることになりましたが、一  
人の女だけは、どうしても結婚しようとしませんでした。かの女の夫となるべき  
男は、蜥蜴のやうな顔をして、カメレオンのやうな皮膚をしてゐました。だから  
女はそれを嫌つて、

「わたしは結婚なんか決してしない。糸を紡ぐ方がいくらかも知れぬ」  
と言つて、朝から晩まで糸を紡いでゐました。と、ある日かの女が紡錘を取り落  
しました。紡錘は天上界から遙か下の方に廣がつてゐる海に墜ちました。女は天  
上界からだらりと垂れてゐる糸を傳つて海の面に降りて來ました。

海の中には、一匹の大きな蛇が浮んでゐました。女はそれを見ると、天を仰い  
で、

「ムラ・ディアデイさま、土を少しばかり下さいな」  
と叫びました。天界にゐるムラ・ディアデイはこれを聞くと、召使の鳥を一羽呼

び出して、

「これを下界の女に持つて行つておくれ」

と言つて、一握の土を渡しました。鳥がその土を女のところに持つて来ますと、女はそれを蛇の頭にふりまきました。と、土は見る見る大きくなつて、たうとう大地となりました。

蛇は、自分の頭の上に大地が出来たので、重くて苦しくてたまりません。彼は力まかせに首を振りました。大地は忽ち蛇の頭から轉げ落ちて、海の中に沈んでしまひました。ムラ・ディアデイはこれを見ると、すぐに八つの太陽を造つてかんかん照りつけさせました。激しい太陽の熱に、海の水がどんどん乾いて、やがて大地が水の上に現れて来ました。女は蛇の體に刀を突き刺して、一つの島にしかと縛りつけました。

「かうして置けば、二度と大地をこはすことはなからう」

女はかう言つて喜んでゐますと、天界にゐるムラ・ディアデイが、

「かうなると、あの兒も一人では置けぬ」

と言つて、嫌はれた男を吹筒と一しよに筵に包んで、空から投げおろしました。

大地に落ちて来た男は、腹が空いたので吹矢を飛ばして、一羽の鳩を射ましたが、狙がそれて中りませんでした。しかし男はうまく吹矢に縋りついて、女の住んでゐる村に飛んで行きました。女は今拒みかねて、彼と結婚をしました。それが人間の祖先であります。(スマトラ島のトバ・バタク族)

また、神々のうちで最も偉大なバタラ・グルの妻が、お産をしようとしてゐる時、

鹿の肉が食べたい。早く持つて来て頂戴

と言ひ出しました。バタラ・グルはすぐに一人の召使をやつて、鹿を射とめさせることにしました。しかし召使はどうしても鹿を狩り出すことが出来ないで、空しく歸つて来ました。バタラ・グルは更に大鴉をやりましたが、これも駄目でした。しかし獲物をあさり廻つてゐるうちに、深い穴を見つけました。試しに棒を投げ込んで見ましたが、いつまでたつても、底に届いたらしい響がかへつて来ませんでした。

☐ とても深い穴らしい。一つ底を探つて見よう☐

大鴉はかう思つて、穴の中に舞ひ込みました。そして眞暗いところをいつまでもいつまでも舞ひ降つて居ると、到頭漫々たる海原に出ました。大鴉はひどく疲れましたが、幸ひ自分が投げおろした棒が、波に漂つてゐましたので、その上にとまつて休んでゐました。

バタラ・グルは待ち遠しくなつて、五六人の召使と一しよに、大鴉を探しに出かけました。すると深い穴が見つかりましたので、一握りの砂と七本の樹と鑿と山羊と蜂とを携へて、穴の中に舞ひ降りました。海の面に降りつくくと、先づ光を呼んで、あたりを包んでゐる闇を追ひ退けました。それから七本の樹で筏を造るために、山羊と蜂とに樹を支へさせて、自ら鑿を揮ひました。筏が出来ると、持つて来た一握りの土をその上にまきました。土は見る間に廣がつて大地となりました。(スマトラ島のハイリ・バタク族)

以上古今東西各國の、天地開闢宇宙創造の説は、我皇典の所傳の外は、何れも

荒唐無稽にして、齒牙にかくるに足らざるを知るべし。即ち宇宙創造は夢中想像にして天地開闢は、癡癡怪百なり。我説示する天祥地瑞の宇宙創造説や天地開闢説に比して、天地霄壤の差異あるを玩味すべきなり。

昭和八年十二月五日 舊十月十八日 於水明閣 口述者識

## 第一篇 春風駘蕩

## 第一章 高宮參拜（一九一八）

紫微天界に於ける神政樹立の根元地なる高地秀の山の山麓に、宮柱太敷立て高天原に千木高知りて、四方に輝きたまふ高地秀の宮一名東の宮を後にして、思し召すことありとて、太元顯津男の神は、八柱の御樋代神を後に残りし、一柱の供神

を<sup>も</sup>連<sup>つ</sup>れ給<sup>たま</sup>はず立<sup>たち</sup>いで給<sup>たま</sup>ひければ、茲<sup>ここ</sup>に八<sup>やは</sup>柱<sup>しら</sup>の御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>神<sup>が</sup>は天津<sup>あまつ</sup>高<sup>たか</sup>宮<sup>みや</sup>に詣<sup>まう</sup>で給<sup>たま</sup>ひて、  
主<sup>ス</sup>の大神<sup>おほかみ</sup>の神<sup>みこと</sup>宣<sup>のり</sup>を乞<sup>こ</sup>ひ給<sup>たま</sup>ひ、宮<sup>みや</sup>の司<sup>つかさ</sup>たるべき神<sup>かみ</sup>を降<sup>くだ</sup>し給<sup>たま</sup>へと祈<sup>いの</sup>らせ給<sup>たま</sup>へば、主<sup>ス</sup>の  
大神<sup>おほかみ</sup>は、その願<sup>ねぎ</sup>事<sup>ごと</sup>を諾<sup>うべ</sup>な給<sup>たま</sup>ひて、茲<sup>ここ</sup>に鋭<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>、天津<sup>あまつ</sup>女<sup>め</sup>雄<sup>を</sup>の神<sup>かみ</sup>の二<sup>ふた</sup>柱<sup>はしら</sup>を降<sup>くだ</sup>し  
給<sup>たま</sup>ひて、朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>な宮<sup>みや</sup>仕<sup>づか</sup>へを言<sup>こと</sup>依<sup>よ</sup>さし給<sup>たま</sup>ひしこそ畏<sup>かしこ</sup>けれ。  
高<sup>たか</sup>野<sup>の</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は天津<sup>あまつ</sup>高<sup>たか</sup>宮<sup>みや</sup>の大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に願<sup>ねぎ</sup>事<sup>ごと</sup>白<sup>まを</sup>し給<sup>たま</sup>ふ、その御<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>。

㊦ 久<sup>ひさ</sup>方<sup>かた</sup>の天<sup>あまつ</sup>津<sup>たか</sup>高<sup>みや</sup>宮<sup>に</sup>詣<sup>まう</sup>で來<sup>き</sup>て

われはいのりぬ楔<sup>みそぎ</sup>をさめて

楔<sup>みそぎ</sup>してはるばる此<sup>ここ</sup>處<sup>こ</sup>に八<sup>やは</sup>柱<sup>しら</sup>の

女<sup>め</sup>神<sup>がみ</sup>は眞<sup>ま</sup>心<sup>こころ</sup>ささげて祈<sup>いの</sup>るも

久<sup>ひさ</sup>方<sup>かた</sup>の天<sup>あまつ</sup>の天<sup>あま</sup>の高<sup>たか</sup>地<sup>ち</sup>秀<sup>ほ</sup>の宮<sup>みや</sup>司<sup>つかさ</sup>

顯<sup>あき</sup>津<sup>つ</sup>男<sup>を</sup>の神<sup>かみ</sup>を守<sup>まも</sup>らせたまへ

朝<sup>あさ</sup>夕<sup>ゆふ</sup>に高<sup>たか</sup>地<sup>ち</sup>秀<sup>ほ</sup>の宮<sup>みや</sup>居<sup>や</sup>に仕<sup>つか</sup>へつつ

なほ眞<sup>ま</sup>心<sup>こころ</sup>の足<sup>た</sup>らぬを悔<sup>く</sup>ゆるも

國土くにを生うみ國魂くにたまがみ神がみを生うまさむと

出いでます岐美きみに恙つつがあらすな

天地あめつちの中なかに一人ひとりの岐美きみゆゑに

われは一人ひとしほ戀こふしみおもふ

わが岐美きみは何いづれの果はてにましますか

こころ許もとなく朝夕あさゆふいのるも

主すの神かみの惠めぐみかしこし二柱ふたはしらの

宮居みやの司つかさをくだしたまひぬ

鋭敏うなり鳴出りづの神かみはかしこき宮司みやづかさ

高地たかちほ秀ほの宮居みやは今いまより榮さかえむ

天津あまつめ女雄をの神かみの面おもざし眺ながむれば

瑞みづの御靈みたまに似にましつるかも

鋭敏うなり鳴出りづの神かみは答いらへの御歌みうた詠よませ給たまふ。



高野比女神の神言の御歌聞きて

足らはぬ吾を恥かしみおもふ

わが力及ばざれども村肝の

心をつくして仕へまつらむ

東の宮居に今より仕へむと

思へばうれしこころ榮ゆも

顯津男の神の力に比ぶれば

天と地との差別ありけり

力なき吾にはあれど真心の

あらむ限りを仕へむと思ふ

八柱の御樋代神を守りつつ

東の宮居を守りまつらむ

八柱の御樋代神を主とし

仕へむとおもふ朝な夕なを

天地あめつちのあらむ限りかぎは主スの神かみの

御樋代みひしろなりと思おもへばかしこし

國く土に未いまだ稚わかかる紫微しびの天界かみくにに

爲なすべき神業みわざは限りかぎなく多おほし

大宮居おほみやを守まもりまつりて主スの神かみの

神業みわざに仕つかふとおもへば樂たのし

今日けふよりは吾われをいたはり給たまひつつ

仕つかはせたまへ御樋代みひしろ女神めがみよ

天津女雄あまつめをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 鋭敏うなり鳴出なりづの神かみの司つかさの添柱そへばしらと

選えらまれし吾われの今日けふのうれしさ

幾萬里東いくまんりひがしの國く土にの高地たかちほ秀ひの

宮居みやに仕つかふと思おもへばいさまし  
御み樋ひ代しろの神かみの御み供ともに仕つかへつつ

いざやすすまむ東ひがしの宮居みやに

國くに土わが稚わかき紫し微び天てん界かいの大おほ宮居みやに

仕つかふるわが身みの魂たまは榮さかえつ

永とこ久しへの榮さかえと喜よろこび満みたせつつ

進すすみて行ゆかむ高たか地ち秀ほの宮居みやに

八や柱しらの御み樋ひ代しろ神がみははるばると

これの聖すが所とに來きませる尊たふとさ

優やさしくて雄を々をしくいます八や柱しらの

御み樋ひ代しろ神がみは御み魂たまひかれり

顯あき津つ男をの神かみは光ひかり明あと現あらはれて

四よ方もの雲くも霧きり別わけ明あしたまふ

顯あき津つ男をの神かみの仕つかへし貴うづの宮居みやに

仕つかふるわれを愧はづかしみおもふ

光ひかり明あなき吾わが身みながらも主スの神かみの

神みこと言ことなりせばかしこみ仕つかへむ

鋭う敏なり鳴り出づの神かみを補たすけて八や柱しらの

御み樋ひろ代ろ神がみに仕つかへむとおもふ

八や柱しらの御み樋ひろ代ろ比ひ女め神がみ今け日ふよりは

わが足たらはぬを補おぎなひ給たまはれら

梅うめ咲さく比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

白し梅らの花はな咲さきにほふ天か界みくにに

生つまましわれは御み樋ひろ代ろ神がみぞや

非とき時じくに梅うめ咲さく比ひ女めの神かみなれば

宮みや居ゐの庭にはを清きよめ仕つかへむ

主スの神かみの恵めぐみ畏かしこし二柱ふたはしら

東ひがしの宮居みやの司つかさたまひぬ

果はてしなき稚國原わかくにほらを旅立たびだたす

わが岐美きみの上に災わざはひあらずな

吾わが岐美きみは光明ひかりの神かみにまませば

醜しこの曲津まがつもさやらざるべし

岐美きみ立ちし日ひより八年やとせを經へにつれど

雁かりがねの便たよりだにも聞きかなく

吾わが岐美きみよ何處いづくの果はてにお在はすらむ

こころ許もとなく朝夕あさゆふをおもふ

久方ひさかたの天津高宮あまつたかみやの清庭すがにはに

宣のる言靈ことたまは澄すみきらひたり

言靈ことたまに森羅萬象すべてのものは生うまるなり

唯ただままならぬは岐美きみの水い火きなり

凡神ただがみの誹そしりあざけり思おもひはかり

つれなく岐美きみは出いでましにけり

國魂くにたまの神かみを生うまむと朝夕あさゆふに

祈いのれど甲斐かひなし水火すいくわ合あはねば

徒いたづらに若わかき月日つきひを經へぬるか

おもひて朝夕あさゆふわれは泣なくなり

いざさらば此これの宮居みやゐに感あやひ謝こと言

白まをして東ひがしの宮居みやに歸かへらむ

香具かぐ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

八柱やはしらの御樋みひ代神しろがみはいたづらに

東ひがしの宮居みやに年としを經へにけり

主スの神かみの御前みまへに復命かへりごとまを白まをすべき

功績なき吾をかなしみ思ふも

雄心の大和心を奮り起し

想像妊娠む岐美の御水火を

天高く地また廣く定まりて

この天界は榮え初めたり

非時の香具の木の實より生れしてふ

御樋代のわれ世に生きて淋しも

水火の限り高地秀山の神靈に

仕へて天界を照らさむと思ふ

吾岐美の光明を御魂に充たしつつ

紫微天界を明し行くべし

神に仕へ岐美を偲びて朝夕を

高地秀の峰に年經りにけり

掛卷も畏き天津高宮に

別わかれて言ことば葉はつし慎つしみ宣のらむ

宮みや司つかさ二柱ふたはしら神がみを得えし今日けふは

天地あめつち開ひらけし心こ地ちするかも

東ひむがしの宮みや居やに歸かへらむ御み樋ひ代しろ神がみよ

これすの清すが庭にはに神か樂ぐらをかななでよ

茲こに高た野か比の女ひ神めの神かは、各かく比ひ女め神がの神み言ことの提てい言げんを甚いたく悦よろこび諾うべひたまひ、鋭う敏なり鳴り出づ

の神か、天あ津まつ女つめ雄をの神か二柱ふたはしら神がみに、白しろ幣にぎてあをにぎておよ青あを幣にぎておよ及および二振ふたふりの五い百ほ鳴なりの鈴すずを授さづけ給たまへば、二に

神んは天あ津まつ高た宮かみやの聖すが所とに地つち踏ふみ鳴ならし、白びやく衣え長ちやう袖しうしとやかに踊をどらせ給たまへば、八柱やはしらの

御み樋ひ代しろ比ひ女め神がみを始はじめ、天あ津まつ高た宮かみやに仕つかへ奉まつる百ももの神か達たちも異い口く同どう音おんに祝いはひの御み歌うた詠よま

せ給たまふ。

その御み歌うた。

☞ 天あ晴はれ天あ晴はれ目め出で度たき言ことのかきりかも



タータータラリ タラリーラー アガリララーリトー チリーヤ タラリ ラ  
ラリトー』

茲こに二柱ふたはしらの宮司みやつかさ神がみは大地だいちを踏ふみならし、五百鳴いほなりの鈴すずをさやさやに響ひびかせ、右手めで  
に白幣しろにぎて青幣あをにぎてを打振うちふり給たまひつつ舞まひ踊をどり給たまへば、百ももの神等かみたちは天地あめつち一度いちどに開ひらけし心地ここち  
して、歡よろこぎ喜よろこび勇いさみ給たまふ。百鳥ももとりは微妙びめうの聲こゑを放はなちて、御神樂みかぐらの拍子ひやうしに和わして、彌々いよいよ  
茲こに天人てんじん和樂わらくの境きやうを現出げんしゆつせり。主すの大神おほかみは天津高宮あまつたかみやの扉とびらを内うちより押おし開あけ給たまひ、  
此この光景くわうけいを御覽みそなはすこそ畏かしこまれ。茲こに壽々すず子比女こひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

主すの神かみの光明ひかりに吾われは照てらされて

まなこくらみぬこの清庭すがにはに

次々つぎつぎに吾眼界わがまなかひは光ひかりつつ

今日けふの祝いはひの神樂見かぐらみしはや

二柱神ふたはしらかみの仕つかふる神樂かぐらの舞まひの

清すがしき姿すがたにとけ入いりにける

主スの神かみも諾うべなひ給たまふか御扉みとびらを

細目ほそめに開ひらきて覗のぞかせ給たまへり

今日けふよりは東ひがしの宮居みやも賑にぎはしく

かがやきわたらむ宮司みやつかさを得えて

わが岐美きみのいまさぬ宮居みやの淋さびしさも

わすれて御苑みそのの神樂見かぐらみしかや

御樋代みひしろの神かみと依よさし給たまひし八柱やはしらの

女神めがみもいまだ神業みわざつかへず

朝夕あさゆふを高地秀たかちほの宮みやの清庭すがにはに

立たちて御空みそらの月つきを仰あふぎつ

天渡あまわたる月つきの鏡かがみを仰あふぎつつ

岐美きみの安否あんびを思おもひわづらふ

曇りたる月をし見れば一人に

思ふは岐美の上なりにけり

瑞々しき月の鏡を仰ぐ夜は

岐美の御幸を思ひて樂しむ

我岐美は遠く行きますせども仰ぎ見る

月の姿に心なぐさむ

宇都子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

はるばると東の宮居を立ち出でて

主の神います宮居に詣でつ

西東皇大神の永久に

鎮まりいます宮居は明らけし

八柱の御樋代比女神ははるばると

今日けふの吉日よきひを西宮みやゐに詣まうでつ

久方ひさかたの天之道立あめのみちたつかむつかさ神司かみ

今日けふの神姿すがたの莊嚴おごそかなるも

道立みちたつの神かみ永久とこしへに仕つかへます

天津高宮あまつたかみやの莊嚴おごそかなるも

四方よも八方やもに雲霧くもぎり立たちし稚國土わかぐにを

固かためむとして岐美きみは出いでませり

吾われも亦また高地秀たかちほの宮居みやに朝夕あさゆふを

仕つかへて神かみを勇いさめむとおもふ

天界てんかいは愛あいと信しんとの神國みくになれば

眞言まことと祈いのりを要かなめと思おもへり

天界てんかいに住すみて尊たふとき神業かむわざは

嚴いづの言靈ことたまと楔みそぎなりけり

朝夕あさゆふを玉たまの泉いづみに楔みそぎして

百神等の幸を祈らむ

百鳥の聲も爽かに響くなり

天津高宮の庭の百樹に

晝月の光ほのぼのと見えながら

御空にさやる雲影もなし

主の神の御水火に生れし天津日の

光はますます冴えわたりつつ

天津日は光の限りを光りつつ

われ等の暗き魂を照すも

月も日も竝びてかがよふ天界に

仕へてわれは何を歎かむ

或は盈ち或ひは虧くる大空の

月に悟りぬ世のありさまを

日を重ねうつろひて行く月影の

定さだまらぬ世よを吾われ悟さとりけるかも

いざさらば二柱ふたはしら神かみを伴ともなひて

共ともに歸かへらむ高地たかちほ秀ほの宮みや居やへ

狭別さわけ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

有あり難がたし天津あまつた高宮かみやの清庭すがにはに

吾われは清すがしき神樂かぐら見みしはや

天地あめつちも一度いちどに開ひらく心地こちして

この清庭すがにはに神樂かぐら見みしはや

鈴すずの音ねもいとさやさやに響ひびかひつ

紫微しびてん天界んかいはいよよあかるし

白梅しらうめは非時ときじく香かをり鶯うぐひすは

彌生やよひの春はるをすがしくうたふ

常磐樹ときはぎの松まつの梢こずえに巢すぐひたる

鶴つるは十二じふにの卵たまごを産うめり

眞鶴まなづるの千歳ちとせをうたふ聲こゑの色いろの

すがしく響ひびきて榮さかゆる天界みくによ

我わが岐美きみの行衛ゆくゑは今いまに知しらねども

御空みそらの月つきを仰あふぎてなぐさむ

御空みそら行く月つきの鏡かがみの清きよき夜よは

岐美きみの榮さかえを思おもひて樂たのしむ

いざさらば高日たかひの宮居みやを拜をろがみて

いそぎ歸かへらむ東ひがしの宮居みやに

久方ひさかたの天あめ之道のみち立たつ神司かむつかさ

嚴いづの教をしへはたふとかりけり

嚴いづ御靈みたま瑞みづの御靈みたまの御教をしへは

世界せかいを十字じふじに踏ふみならず太元もとかも

火と水と土の力に天界は

今あきらけく固まりにける

花子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

白梅の花の粧ひ眺むれば

瑞の御靈の岐美のこちす

非時に匂ふ神苑の百千花も

手折りささげむ神の御前に

白梅の一枝を手折りて黒髪の

簪となさばや花子比女われは

花の香り松の響も清しけれ

主の神います宮居の庭は

東の宮居の司を伴ひて



歡よろこぎ歸かへらむ日ひとはなりけり

いざさらば神かみの御前みまへに感謝あやひごと言こと

うまらにつばらに宣のりて歸かへらむ

高地たかちほ秀ほの峰みねははるけしさりながら

駒こまの蹄ひづめのためらひもなし  
』

小夜子さよこ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㌿ 瑞御靈みづみたま高地たかちほ秀ほの宮居みやを出いでしより

御樋代みひしろわれは淋さびしく年としを經へし

神かみをあがめ岐美きみを戀こひつつ鷄とりの尾をの

長ながき月日つきひを暮くれにけるかな

高地たかちほ秀ほの山やまの松風まつかぜ朝夕あさゆふに

響ひびけど岐美きみの音信おとづれはなし

高地秀の峰の尾の上に見る月も

變らず思へばたふとかりける

小夜更けて仰ぐ月光冴え渡り

もの言はずげに思はするかな

月見れば岐美の靈よと思ひつつ

ながき別れをなくさめしはや

久々にこの高宮に詣で来て

わが魂線はよみがへりつつ

八柱の御樋代神は朝夕を

睦み和みて宮居に仕へつ

怨み妬みなき眞心に仕へ行く

宮居の聖所に雲霧もなし

いざさらば主の大神に拜禮して

はるばる東の宮居に歸らな

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

主の神の宮居に始めて詣でけり

高地秀の宮居にあるここちして

眞心を筑紫の宮居の清庭に

國土の始めの神樂見しはや

西の宮居筑紫の宮居は主の神の

光明も一入つよかりにける

御樋代神と選まれし吾はためらはず

岐美のみあとをまぎて行くべし

いたづらに待ちて月日を送るよりも

すすみて行かむ御子生みの旅に

主の神の御前に誓ひ白すべし

われは進みて神業に仕へむ

いざさらば筑紫の宮居を後にして

ともに歸らむ東の宮居へ

各神々は御歌詠ませ給ひつつ、大御前に御聲も爽けく祝詞を奏上し、天津高宮に仕へます百神等に別れを告げ、各自天の斑駒の背に跨り、高地秀の宮居をさして急がせ給ふぞ畏けれ。

(昭和八・一二・五 舊一〇・一八 於水明閣 森良仁謹録)

## 第二章 魔の溪流(一九一九)

ここに八柱の御樋代神は遙々と天津高宮に打ち集ひ、祈願をこらすべく上らせ給ひ、主の大神の神言もちて、高地秀の宮の神司として鋭敏鳴出の神、天津女雄の神の二柱を授けられ、いそいそとして白馬に跨り、蹄の音も勇ましく、高地秀

の宮をさして歸らせ給ひつつ、  
鋭敏鳴出の神は行進歌をうたはせ給ふ。

☐ 主の大神の神言もて

八柱神を守りつつ

紫微天界の眞秀良場に

そそり立ちたる高地秀の

神の御山の麓なる

高地秀宮に仕へむと

神の心に任せつつ

進み行くこそ樂しけれ

御空にかかる月光も

天津陽光も清らかに

雲霧晴れて天地は

常世の春を歌ふなり

百ももの木草きぐさは芳かむばしき

香かをりを放はなち種くさぐさ々の

艶えんを競きそへる花はなは咲さき

げに樂たのもしき國原くにはらや

小鳥ことりはうたひ蝶てふは舞まふ

紫微しびてん天界かいの眞秀まほ良場らばに

神かみの神言みことを蒙かかぶりて

百神ももがみ等たちと諸もろ共に

進すすまむ道みちにさやるべき

醜しこの曲津まがつ見みもあらざらむ

あかむながら惟かむながら神々々

萬里ばんりの山坂やまさかのり越こえて

吾われは堂々どうどう進すすむなり

わが乗のる駒こまは貴うづの駒こま

吹き来る風を鬣に

右と左に分けながら

嘶き強く駆け出だす

ああ惟神々々

今日の旅路のいさましさ

斯く歌ひつつ進み給ふや、行手に横はる川底深き溪流、如何なる神馬も越ゆる

あたはず。西岸の断崖絶壁を打ち眺めながら、各自駒の背を下り岸邊に立ちて休

らひ乍ら、この溪流を如何にして越えむかと語り合ひ給ひぬ。八柱の比女神天津

高宮に詣で給ひし行手の道には、かかる深き溪流あらざりしに、歸り路に當りて

同じ道筋に、かかる危険の溪流横はるは、大曲津見の神の神業をさまたげむとし

ての奸計ならむ。心を清め身を清め、靜に生言靈を宣り上げて、この溪流を遠き

彼方の海に退けやらむと、先づ高野比女の神は生言靈の御歌を詠ませ給ふ。

主スの神かみの神言みこと畏かしこみ吾われ伊行いゆく

道みちにさやらむ神かみはあるべき

明あきらけき紫微しびてん天界てんかいの國中くになかに

さやる曲津まがつはかならず亡ほろびむ

隠かくれ忍しのびいたづらを爲なす醜神しこがみの

御魂みたまあらはさむわが言靈ことたまに

さやります神かみは大蛇をろちか醜神しこがみか

姿すがたあらはせわが目めのまへに

瀧津たきつ瀬せの吠ほゆるが如ごとく響ひびくなる

この溪川たにがはは大蛇をろちの化身けしんよ

長々ながながと果はてしも知らぬ溪川たにがはの

流ながれはいたく濁にごらへるかな

果はてしなきこの天界てんかいの中なかにして

小ちひさき曲まがのすさびおそれむや



曲津見の醜の猛びの強くとも

いかで恐れむ神なるわれは

八十曲津見如何にすさぶとも猛るとも

生言靈の水火にはかなはじ

吾進む道にさやらむものあらば

眞言の劍もちてはふらむ

いすくはし神の依さしの御樋代と

まけられし吾の道を開けよ

木も草も神の教になびく世を

など曲神の道にさやれる

敷島の大和心の太刀もちて

斬りてはふらむ八十曲津見を

千早振る神の依さしの吾なれば

安く渡らむ溪川うづめて

西にしの宮居みややに詣まうでで歸かへる道みちしばに

さやりけるかな曲津まがつの神かみは

久方ひさかたの天あめの高たか地ち秀宮ほみやに仕つかふ

司つかさの出いでましよ恐おそれ畏かしこめ

御樋代みひしろと神かみの依よさしの八柱やはしらを

未いまだ知しらずや曲津まがつ見み汝なれは

いみじくも流ながる深ふかき溪川たにがはの

水瀬みなせを止とめて吾渡われわたらばや

吾駒わがこまはたてがみふるひ嘶いななきぬ

これこれの溪川たにがはやすく渡わたらむと

鋭敏うな鳴出なりづの神かみの出いでまし知しらざるか

八十曲津やそまがつ見みの神かみのおるかさ

黒雲くろくもの中なかにかくる曲津まがつ見みの

今いまにほろびむ時ときは來きにける

主スの神かみの造つくり給たまひし天界かみくによ

曲津まがつつの神かみの棲すまむ道みちなし

月つきも日ひも御空みそらに輝かがやき給たまひつつ

吾等われらが行手ゆくてを守まもらせ給たまへ

奴婢ぬばたま玉たまの闇やみを晴はらして嚴御靈いづみたま

瑞みづの御靈みたまはかがやきたまへり

伏ふして見みつ仰あふぎては見みつ天地あめつちの

くしき姿すがたにわれはかしこむ

むらむらと溪川たにがは深く湧わき立たてる

雲くもにひそめる八十曲津やそまがつつ見みよ

湯氣ゆげの如煙ごとけむりの如ごとく立たち昇のぼる

雲くもの姿すがたのあやしきろかも

鋭敏うなり鳴出なづの神かみの功いさをに曲津見まがつつみの

さまたげ拂はらひて吾われは進すすまむ

選えらまれて御み樋ひ代しろ神がみとなりし吾われは

醜しこの雲くも霧きりいかでおそれむ

穢けがれたる水い火あつ集まりて曲ま津が見みと

なる魂たまをしひあはれとおもふ

せせらぎの音おと高た々と聞きゆなり

溪たにのながれは巖いはを嚙かみて

手てを打うちて天あま津つ真ま言ことの神かみ言ことを

曲ま津が見みの爲ために宣のり上あげて見みむ

ねもごろに説とき諭さとせども曲ま津が見みの

心こころはますますくもるのみなる

平たいけひらくいと安やすらけき天かみ國くにの

道みちにさやれる曲ま津が見みあはれ

眼めに見みゆるものことごとスは主かみの神かみの

水い火きより出いでしみたまものなる

笑<sup>ゑ</sup>み榮<sup>さか</sup>え喜<sup>よろこ</sup>び勇<sup>いさ</sup>みて暮<sup>くら</sup>すべき

紫<sup>し</sup>微<sup>び</sup>天<sup>てん</sup>界<sup>かい</sup>にさ<sup>さ</sup>やる曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>よ

遠<sup>とほ</sup>き近<sup>ちか</sup>き差<sup>け</sup>別<sup>ぢめ</sup>も知<sup>し</sup>らに守<sup>まも</sup>ります

神<sup>かみ</sup>の光<sup>ひか</sup>りを知<sup>し</sup>らずや曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>

鬼<sup>おに</sup>大<sup>を</sup>蛇<sup>ろ</sup>醜<sup>ち</sup>の曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>もこ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>く

神<sup>かみ</sup>の水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>より生<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>れたるは<sup>は</sup>や

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>洗<sup>あら</sup>ひて道<sup>みち</sup>を行<sup>ゆ</sup>く

御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>神<sup>がみ</sup>を通<sup>とほ</sup>せ曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>

そ<sup>そ</sup>ば立<sup>た</sup>てるこの溪<sup>たに</sup>川<sup>がは</sup>の高<sup>たか</sup>岸<sup>ぎし</sup>に

行<sup>ゆ</sup>きなづみ<sup>つ</sup>つ神<sup>かみ</sup>言<sup>こと</sup>宣<sup>の</sup>るも

伴<sup>とも</sup>ひし御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>神<sup>がみ</sup>はこ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>く

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>きよ<sup>よ</sup>き神<sup>み</sup>柱<sup>しら</sup>の神<sup>かみ</sup>よ

野<sup>の</sup>も山<sup>やま</sup>も紫<sup>むら</sup>の雲<sup>さき</sup>た<sup>く</sup>だ<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>へ<sup>る</sup>

紫<sup>し</sup>微<sup>び</sup>天<sup>てん</sup>界<sup>かい</sup>よ退<sup>しり</sup>け曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>

ほのぼのと紫の雲立ち昇る

この天界は神ます神苑よ

もろもろの曲津見ここに集りて

深溪川と横たはるかも

よしやよし此川岸は高くとも

生言靈にうづめて行かむ

治まりて日々に榮ゆる天界を

亂さむとする曲津見あはれ

この御歌に鋭敏鳴出の神は、この溪川こそ八十曲津見の化身なりてふことを早くも悟らせ給ひ、生言靈の限りをつくし、「ウーウーウー」と唸り出で給へば、如何はしけむ、深溪川の溪水は眞綿をちぎりたる如き雲、次ぎ次ぎに湧き出でて天に沖し、風になびきて東の空さして幾百千ともなき雲片は、風のまにまに立ち去りにける。

變<sup>かは</sup>りたれば、百<sup>もも</sup>神<sup>がみ</sup>等<sup>たち</sup>は鋭<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>の功<sup>いさ</sup>績<sup>をし</sup>に舌<sup>した</sup>を卷<sup>ま</sup>き、感<sup>かん</sup>歎<sup>たん</sup>の餘<sup>あま</sup>り御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

梅<sup>うめ</sup>咲<sup>さ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>。

☐ 鋭<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>の神<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>の功<sup>いさ</sup>績<sup>をし</sup>に

曲<sup>まが</sup>の溪<sup>たに</sup>川<sup>が</sup>消<sup>は</sup>え失<sup>う</sup>せにける

曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>は雲<sup>くも</sup>霧<sup>きり</sup>となり川<sup>かは</sup>底<sup>そこ</sup>ゆ

立<sup>た</sup>ち昇<sup>のぼ</sup>りつつ逃<sup>に</sup>げ去<sup>さ</sup>りしはや

鋭<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>に曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>は

雲<sup>くも</sup>を霞<sup>かすみ</sup>と逃<sup>に</sup>げ去<sup>さ</sup>りにける

雲<sup>くも</sup>となり霞<sup>かすみ</sup>となりて曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>は

ほろび行<sup>ゆ</sup>きけむ東<sup>ひがし</sup>の空<sup>そら</sup>に

鋭<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>の生<sup>あ</sup>れま<sup>す</sup>高<sup>たか</sup>地<sup>ち</sup>秀<sup>ほ</sup>の

宮居は今日よりやすけかるらむ

曲津見の雄猛び如何に強くとも

何かおそれむ言靈の水火に

紫微の宮居に神言宣りて歸るさの

道にさやりし曲津見あはれ

曲津見は生言靈に照らされて

雲となりつつ逃げうせにける

香具比女の神は御歌詠ませ給ふ。

曲津見の奸計の深き溪川も

神の御稜威に消え失せにけり

神々は榮えをよるこび曲津見は

亡びを唯一の楽しみとなすも



深ふか溪たに川が包はみし雲くもも瀧たき津つ瀬せも

ウの言こと靈たまにほろび失うせける

鋭う敏なり鳴り出づの神かみの神言みことの功績いさをしに

煙けむりとなれる曲津まがつみ見みあはれ

天地あめつちの一度いちどに開ひらきし心地こちちせり

曲津まがつみの奸計たくみの幕まくはやぶれて

壽す々ず子こ比ひ女めの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

御樋みひしろ代の神かみと仕つかへし始はじめより

かかるためしは見みざりけるかも

曲津まがつみ見みは深溪ふかたに川がと身みを變へんじ

わが行ゆく道みちをさへぎりしはや

穢けがれなきこの天界かみくににも斯かくの如ごと

曲業ありとは知らざりにけり

束の間も心許せぬ天界と

つくづく思へり魔の溪川を見て

今日よりは瑞の御霊を恨むまじ

いづれも神の御心なりせば

我岐美のつれなき心を恨みてし

妾は今更はずかしくなりぬ

よしやよしこのまま天界に老ふるとも

瑞の御霊は永久に恨まじ

日に夜に心くるしめ給ひつつ

岐美は萬里の旅に立たせり

行く先きに八十曲津見の災を

切り抜け進まず岐美は畏き

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

永久とこしへに仕つかへ奉まつると思おもひてし

岐美きみは萬里ばんりの旅たびにいませり

幾萬里いくまんり山野やまぬを涉わたり西にしの宮みやに

詣まうでて心こころあらたまりしはや

曲津見まがつみの深ふかき奸計たくみにかからむと

せし今日けふの日ひにたすけられにき

鋭敏うなりづ鳴出なりづの神かみの功いさをのいまさずば

この溪川たにがはは消きえざらましを

曲津見まがつみの醜しこの大蛇をろちの姿すがたなれや

道みちにさやりし深溪川ふかたにがはは

何事なにことも神かみの御心みこころと悟さとりつつ

をりをりくもる心こころはづかし

駒止めて息を休めつ曲津見の

化身の溪川を望みけるはや

山となり溪川となり巖となり

八十曲津見は眞道にさやるも

この上は言靈みがき袂して

神の大道をひたに進まむ

我岐美を戀ひつ恨みつあこがれつ

經にし月日は雲となりけり

吾思ひ雲と湧き立ち霧と燃えて

天津月日をつつまひてゐし

主の神の清き光にあてられて

われは心の雲をはらひぬ

ねたみたる心の雲も晴れ行きて

胸にかがやく月日の御光

おほぞら つきひ  
大空の月日をうつして吾胸は

かがみ  
鏡のごとくかがよひにけり

くさき  
草も木も天津神國をゑらぐ世に

いか  
如何でなげかむ小さき事に

みひしろ かみ  
御樋代の神にまけられ村肝の

こころ  
心にくもりありしを悔ゆるも

わがきみ われら  
我岐美の吾等を見捨てて出でましし

こころ  
まことの心を今さとりけり

わがこころくも  
吾心曇らひあれば水火と水火

か  
交はさむ術もなかりけらしな

わがきみ  
我岐美を恨むるよりも吾心の

ま  
くもりしを先づ恨むべかりし

うづつこひめ  
宇都子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

非時の香具の木の實に生れながら

わが魂線はくもりてありき

くもりたる心抱きて御樋代と

おごりし事を今更悔ゆるも

山に野に花は匂へど百鳥は

うたへど春の心地せざりき

掛巻も綾に尊き高地秀の

宮居を穢せしわれなりにけり

宇都比女の貴の御名さへ恥しも

くもり穢れし神魂いだきて

くもりたる心の魂を洗はむと

この溪川は生り出でにけむ

村肝の心に曲津見住まひつつ

吾行く道をさへぎりにけむ

曲神まががみの仇あだとし思おもはず吾魂わがたまの

くもりゆ生あれし深ふか溪川たにがはよ

鋭敏うなり鳴出なりづの生言靈いくことたまに驚おどろきて

ふるひをののき曲まがは出いでけり

鋭敏うなり鳴出なりづの神かみの宣のらせる言靈ことたまに

身みも魂線たましひもをののきにけり

今日けふよりは元もとつ心こころに立たち歸かへり

楔みそぎの神事わさにつかへまつらむ

狹別比女さわけひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 幾年いくとせか高地秀たかちほの宮居みやに仕つかへつつ

なほわが魂線たましひのくもり去さらずも

わが岐美きみを戀こふる心こころの重かさなりて

神魂みたまも水火いぎもくもらひしはや

村肝むらきもの心こころを清きよめ今日けふよりは

まごころもちて神かみに仕つかへむ

何事なにごとも神かみの依よさしの神業かむわざと

思おもへば岐美きみを恨うらまむすべなし

道立みちたつの神かみの姿すがたの尊たふとさを

仰あふぎて一入ひとしほ岐美きみをおもふも

久方ひさかたの天之道立あめのみちたつの神柱かむばしら

いとおごそかに笑ゑませ給たまひぬ

道立みちたつの神かみにも増まして我わが岐美きみの

氣高けだかさ思おもへば堪たへやらぬかも

堪たへがたき心こころおさへて年月としつきを

仕つかふる身みこそ苦くるしかりける

悔くやみてもかへらぬ事こととは知しりながら



をりをり悲しくなりかなにけらしな

山川やまかはは清きよくさやけく百鳥ももとりの

聲こゑは澄すめどもさみしかりける

さみしてふ心こころの曇くもり晴はれにけり

今日けふの生い日は胸むねさえにつつ

花は子な比こ女ひの神めは御歌かみ詠みうたませ給よふ。

野のに山やまに百もも花ばな千ち花ばな匂にほへども

われ美うつくしと思おもはざりけり

吾心わがこころねぢり曲まがりてひたすらに

岐美きみの上うへのみ恨うらみてしはや

わが岐美きみは萬里ばんりの外そとの旅枕たびまくら

天界みくに造つくるとなやみたまはむ

安らかに高地秀の宮居に仕へつつ

なやみの岐美をうらみけるはや

岐美こそは顯津男の神國土を生み

國魂生ます神柱なりし

朝夕に岐美のつれなき心根を

恨みまつりし吾はづかしき

日竝べて旅に立ちつつ思ふかな

果てしも知らぬ岐美のみゆきを

澄みきりし紫微天界の中に生れ

何を歎かむ御樋代神われは

善と惡樂しみと苦しみ行き交ふ

紫微天界はありがたかりけり

災に遇ひて眞言の喜びを

つぶさに悟る天界なりけり

喜びよきこになるればまことの喜びよきこも

餘あまり樂たのしと思おもはざりける

安やすらけき月つき日ひ過すこせし吾われにして

神み世よを歎なげきしことを悔くゆるも

喜よきこびと苦くるしみ互たがひに行ゆき交かひて

世よは永とこ久しへに榮さかゆべかりけり

小さ夜よ子こ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

小さ夜よ衣ころも重かさぬる暇ひまもあらなくに

岐き美みは立たたせり長ながき旅たび路ぢを

御み子こ生うみの旅たびに立たたせる我わが岐き美みの

惱なやみ思おもひてわれは泣なくなり

わが涙なみだ天てんに昇のぼりて雲くもとなり

雨あめと降ふりつつ岐き美みに注そがむ  
岐き美みが行ゆく旅たびなる國くにの春はる雨さめは  
日に夜ちやになげきしわが涙なみだかも  
戀こひすてふ心こころの雲くもに包つつまれて  
魂たまのゆくへも知しらず亂みだれし  
いざさらば百もも神がみ等たちよ駒こま竝なめて  
東ひがしの宮みやに進すすませたまへ  
鋭う敏なり鳴づ出かみの神いの功さをに曲ま津が見みの  
影かげは失うせつつやすく通かよはむ  
㊦

天あ津まつ女め雄をの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

㊦  
八や柱はしらの御み樋しろ代がみ神を守まもりつつ  
魔まの溪たに川がはに突つきあたりける

鋭敏鳴出の神の功を今更に

さとりて心かしこみしはや

高野比女神の神言のさとき目に

曲津はすがたを現はせしはや

駿馬は嘶き初めたりいざさらば

百神たちよ鞍に召しませ

曲神は行手の道にさやるとも

いかで恐れむ言靈の武器に

ここに一行の神々は、天の駿馬にひらりと跨り、吹き來る風を駒のたてがみに  
切り分けつつ、鈴の音も勇ましく、鋭敏鳴出の神を先頭に、天津女雄の神を殿に  
として、高地秀の宮の聖場さして進ませ給ふぞ畏けれ。

(昭和八・一二・五 舊一〇・一八 於水明閣 谷前清子謹録)

第三章 行進歌（一九二〇）

八十曲津見の神は、高野比女の神一行が行手を妨げむとして、底ひも知れぬ深  
溪川と身を變じさやり居たりけるが、高野比女の神の炯眼に看破され、鋭敏鳴出  
の神の生言靈に打たれて、忽ち煙散霧消の體たらくとなり、風のまにまに東の空  
高く逃げ去りければ、一行十柱の神は駿馬に鞭うち、大野ヶ原を御歌うたひつつ  
東をさして進ませ給ふ。

高野比女の神の御歌。

高天原に舞ひ上り

天津高宮に詣でつつ

主の大神の大神言

かかぶりまつりて一同は

心の駒を立て直し

今迄いままでなやみし村肝むらきもの  
わが魂線たましひは晴れにつつ  
鋭敏うなりづ鳴出なみの神かみを先頭せんとうに  
天津あまつめを女雄なをの神伴かみともなひて  
東ひがしの宮居みやに歸りかへゆく  
紫微しびてんかい天界てんかいの大野原おほのはら  
清きよくさやけく澄すみきらひ  
林はやしに囀さへつる百鳥ももどりの  
聲こゑも清すがしく響ひびきつつ  
百草ももぐさちぐさ千草せんさうは咲さき匂におひ  
根本ねもとにすだく蟲むしの音ねは  
天界みくにの春はるをうたふなり  
吹ふき來くる風かぜも爽さわやかに  
吾等われらが面おもを撫なででゆく

ああかむながらかむながら惟神々々

今日のけふ旅路たびぢのたの樂しけれ

これにひ引き替かへみづみたま瑞御靈

わがせ背のかみ神はまがつみ曲津見の

伊いたけ猛りくるあらのふ荒野原

夜よをひ日についですす進みつつ

百もものなや惱みをあ浴びながら

主スのおほかみ大神のみよ御依さしの

神業みわざにつか仕へたま給ふべく

進すすませたま給ふを雄々しさよ

吾等われらはめがみ女神のみ身なりせば

四季しきのはな花咲くたかちほ高地秀の

安やすきすがと聖所につか仕へつつ

月日つきひをあだ仇におくらむや



再びふたたび天津高宮あまつたかみやの

主スの大神おほかみのみことのり

承うけたまはりて村肝むらきもの

心こころの空そらは晴はれ渡わたり

いよいよ聖地せいちを守まもらむと

萬里ばんりの駒こまに跨またがりて

歸かへらむ路みちをあら不思議ふしぎ

八十曲津やそまがつつ見みは千丈せんぢやうの

深溪川ふかたにがはと身みを變へんじ

吾等われらが行手ゆくてをさへぎりつ

横よこたはれるぞいまはしき

ここにウ聲こゑの言靈ことたまゆ

なり出いで給たまひし鋭敏うな鳴出なりづの

神かみの言靈ことたま勇いさましく

打ち出で給へば曲神は

怪しき雲と身を變じ

西吹く風にまくられて

東の空にはかなくも

消え失せたるぞ面白き

ああ惟神々々

東の宮居の聖所に

心を清め身を清め

朝な夕なを楔して

岐美の御幸を祈りつつ

仕へまつらむ楽しさよ

鋭敏鳴出の神は御歌うたひ給ふ。

主スの大神おほかみの神言みこともて

天津高宮大前あまつたかみやおほまへを

謹つしみ敬あやまひ畏かしこみて

御樋代神みひしろがみを守りつつ

萬里ばんりの荒野あらのを打ちわたり

いよいよ此處ここに來きて見みれば

邪氣じやきかたまりて曲津見まがつみと

なり出いで雲霧くもぎりわかしつ

深溪川ふかたにがはと身みを變へんじ

吾等われらが行手ゆくてをさへぎりぬ

高野たかのの比女ひめはすばしくも

曲津まがの正體しやうたい看破みやぶらし

生言靈いくことたまを宣のりませば

實げにもとわれは驚おどろきて

ウの言靈ことたまのある限りかぎ

金剛力こんがうりきを發揮はつきして

貴うづの言靈ことたまの宣のりつれば

流石さすがの曲津まがつみ見怖みおぢ恐れおそ

雲くもを霞かすみと逃にげ去さりぬ

そのたまゆらに溪川たにがはは

跡あとかたもなく消きえ失うせて

草莽くさばう々と生はえにつつ

百花ももばな千花ちばな咲さき満みちて

蟲むしのなく音ねもさやさやに

天界みくにの春はるとなりにけり

ああかむながら惟かむながら神々かむながら

生言靈いくことたまの幸さちひはに

わがゆ行く道みちは平たひらけく

いと安やすらけく開ひらかれて

跨またがる駒こまも勇いさましく

蹄ひづめを揃そろへて嘶いななきつ

果はてなき野の邊べを進すすむなり

行ゆくて手に如いか何かなる曲まが津つ見みの

さやりに災わざはひなすとても

主スの大神おほかみの賜たまひてし

生いくこと言たま靈たまの幸さちひに

汝なが神かみ等たちをやすやすと

東ひがしの宮みや居やにおくるべし

ああ惟かむながら神かむながら々々

神かみの守まもりの強つよければ

御み樋ひ代しろ神がみ等たち心こころ安やすく

思おぼしめ召めしませ鋭うなり敏び鳴なり出での

神かみは眞心まじこころ照らしつつ

ここに所信しよしんを宣のべまつる

ああかむながらかむながら惟神かむながら々々

御靈みたま幸さちはへましませよ』

朝香比女あさかひめの神かみは馬上ばじやうゆたか豊うたに歌はせ給たまふ。

☞ われ等は神かみに選えらまれて

御樋代神みひしろがみとなりながら

心こころは曇くもり魂たまねぢけ

生言靈いくことたまの濁にごらへば

御子産みこむ神業わざにふさはずと

百神達ももがみたちの嘲あざけりを

怨うらみし事ことの恥はづかしき

おほもとあきつを  
太元顯津男の神は

よわ  
弱き心は持たさねど

ももがみたち  
百神等の嘲りを

うるさ  
五月蠅く思し召しまして

しばしたためらひ給ひつつ

みひしろがみ  
御樋代神の魂線の

ひたに曇れる有様を

うかが  
窺ひ知りていち早く

ひがし  
東の宮居を出で立たし

あなたこなた  
彼方此方に間配れる

やそひめがみ  
八十比女神に見合ひして

くにたまがみ  
國魂神を生まさむと

こころ  
心の駒に鞭うちて

いで  
出で立ち給ひし畏さよ

吾等御樋代神等は

岐美きみの無情むじやうを怨うらみつつ

ただ徒いたづらに月つきと日ひを

疎うとみかこちて過すぎにけり

ああかむながらかむながら惟神々々

神かみの心こころも白雲しらくもの

空そらにさまよふ如ごとくなり

主スの大神おほかみの御光みひかりに

照てらされ今日けふよりわが魂たまは

月日つきひの如ごとく輝かがやきて

心こころにひそむ曲神まががみの

在處ありかを隈くまなく悟さとりたり

そも天界てんがいの要かなめなる

神業みわざといふは言靈ことたまの



水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>を清<sup>きよ</sup>めて澄<sup>す</sup>みきらし  
朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに袂<sup>みそぎ</sup>して  
愛<sup>あい</sup>と信<sup>しん</sup>との道<sup>みち</sup>守<sup>まも</sup>り  
眞<sup>まごころ</sup>心<sup>こころ</sup>こめて大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>に  
仕<sup>つか</sup>ふるより外<sup>ほか</sup>になし  
か<sup>か</sup>くも悟<sup>さと</sup>りし上<sup>うへ</sup>からは  
主<sup>す</sup>の大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>も怨<sup>うら</sup>むまじ  
岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の無<sup>む</sup>情<sup>じやう</sup>もかこつまじ  
心<sup>こころ</sup>平<sup>たひら</sup>に安<sup>やす</sup>らかに  
八<sup>や</sup>咫<sup>あ</sup>の鏡<sup>かがみ</sup>と澄<sup>す</sup>みきりて  
この天<sup>てん</sup>界<sup>かい</sup>に永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に  
仕<sup>つか</sup>へまつらむ眞<sup>まごころ</sup>心<sup>こころ</sup>を  
いよいよ今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>は固<sup>かた</sup>めたり  
あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>惟<sup>かむ</sup>神<sup>な</sup>々<sup>ら</sup>々<sup>かむ</sup>

神かみの守まもりの深ふかくあれ

恩みたまのふゆ頼さきの幸さきくあれ  
□

天津あまつめ女を雄をの神かみは、馬ばじやうゆたか上たか豊たかに御み歌うた詠よませ給たまふ。

□  
筑つくし紫しの宮みや居やを立たち出いでて

紫し微び天てん界かいの旅たび枕まくら

御み樋ひ代しろ神がみの御み尾を前さきを

守まもり仕つかへて今いま此こ處こに

いそいそ進すすみ來きて見みれば

言こと靈たま穢けがれ固かたまりて

八や十その曲まが津つ見み生うれ出いで

深ふか溪たに川がと身みを變へんじ

吾われ等らが旅たびゆく道みちの邊へを

さへぎりゐたるゆゆしさに

ウ聲こゑに生れし神柱かむばしら

鋭敏うなり鳴出の神は奮ふるひ起たち

力ちから限りに言靈ことたまを

天地てんちも破れよと宣のり給たまふ

強つよき御稜威みいづに辟易へきえきし

八十やその曲津まがつは忽たちまちに

雲くもと變へんじて空高そらたかく

風かぜのまにまに散ちり失うせぬ

ああ惟かむながら神言靈ことたまの

水火いの力ちからの尊たふとさよ

吾等われらは未いまだ村肝むらきもの

心こころの曇くもり晴はれざれば

如何いかに言靈ことたま宣のるとても

草木くさきの梢しずえゆるぐより  
外ほかに功いさをは無なかりける  
結むすびの水い火きの清きよまりし  
鋭う敏なり鳴出りづの神かみのけなげにも  
宣のり上あげ給たまふ言こと靈たまは  
わが魂たましひ線しの底そこまでも  
沁しみわたりつつ天地あめつちに  
ひそめる曲まがのかげもなく  
雲くもを霞かすみと逃にげ去さりぬ  
ああ惟かむながら神かむながら々々  
今日けふより心こころを改あらためて  
生いく言こと靈たまを研とぎすませ  
東ひがしの宮みや居やに朝あさ夕ゆふを  
仕つかへまつりて天界かみくにの

神業みわざに仕つかへ百神ももがみの

日々ひびの幸さちをば祈いのるべし

駒こまは勇いさみて鬣たてがみを

前後ぜんご左右さいうに振ふるりながら

花はな咲さく野の邊べをしやんしやんと

進すすみ行ゆくこそ樂たのしけれ

わが行ゆく先さきは遙はるかなり

行手ゆくてに如何いかなる曲神まががみの

さやらむ例ためしありとても

言こと靈たま清きよき鋭う敏な鳴なり出づの

神かみの先頭せんとうに立たちまさば

吾等われらは何なんの怖おそれなく

従したがひゆくこそ畏かしこけれ

ああ惟かむ神な々々らかむ

天界みくにの旅たびに幸さちあれよ  
天界みくにの旅たびに幸さちあれよ

ここに香具かぐひめ比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

見渡みわたせば大野おほのの奥おくに雲くもたちて

御空みそらの月つきはかくろひにけり

晝月ひるつきのかげを包つつみし黒雲くろくもは

曲津まがつ見みの水い火きの凝これるなるらむ

吾駒わがこまは勇いさみ進すすめど大空おほぞらの

月日つきひの光かげはうすらぎにつつ

曲神まががみは行手ゆくてにさやり居をるならむ

天地あめつちにはかに曇くもらひにけり

高野たかの比女ひめの御後みあとに従したがひわれは今いま

大野おほのの旅たびを續つづけけるかも  
曲津まが見つみは深ふか溪たに川がはと變へんじつつ

わがゆ行くみち道みちにさやりけるかな  
鋭う敏なり鳴り出づの神かみの言こと靈たま幸さちはひて

雲くもとなりつつ曲津まがは失うせけり

主スの神かみの神言みことを受うけて歸かへりゆく  
道みちにさやりし曲津まがぞ忌ゆ々ゆしき  
□

梅咲うめ比女さくひめの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。  
□

十柱とほしらの神かみの乗のらせる白駒しろこまの

蹄ひつめの音おとのいさましきかも  
地つち稚わかき荒野あらのヶ原がはらを涉わたりゆく

駒こまの蹄ひつめはふかく残のこれり

駒こま竝なめて東ひがしの宮みや居やに歸かへりゆく

わが旅たびだ立ちの幸さきかれと祈いのる

わが行ゆかむ道みちをさへぎり曲まが津つ見みは

深ふか溪たに川がはとなりて居ゐしはや

鋭う敏なり鳴づ出づの生いく言こと靈たまにやはれて

あはれ曲まが津つは消きえ失うせにけり

山やまも野のも一いち度どに暗くらくなりけり

月つき日ひを包つつみし醜しこの黒くろ雲くもに

この邊あたり曲まが神かみ等たちは黒くろ雲くもの

網あみを張はりつつ惱なやむるなるらむ

とにもあれかくにもあれや言こと靈たまの

水い火きを續つづけて聖すが所とに歸かへらむ

壽す々ず子こ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。



☐ 雲くもの幕まく十重とへに二十重はたへに包つつむとも

何かなに怖おそれむ神かみに在ある身みは

主スの神かみとともにある身みの今日けふの旅たび

さやらむものは亡ほろびゆくべし

十柱とほしらの神かみの出いで立たちさやらむと

待まち佗わぶるならむ曲津見まがつみの神かみは

惟かむながら神かみの神言みことを畏かしこみて

吾等われらは聖所すがとに歸かへりゆくなり

さまさまの奸計たくみの罟わなを張はるとても

破やぶりて進すすまむ言靈ことたまの水い火きに

天界てんかいは愛あいと信しんとの神國みくになれば

虚偽きよぎは許ゆるさじ惡あくはゆるさじ

曲神まがかみは偽うつそを誠まこととかまへつつ

眞言まことの神かみにさやらむとすも

浅ましき心なるかも曲津見の

奸計のわざは忽ち破れぬ

宇都子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

𠄎  
鋭敏鳴出の神に守られゆく道に

さやらむ曲津見はなしと思へり

曲津見の災如何に強くとも

ウの言靈にひらき進まむ

われも亦ウ聲になりし女神なれば

曲津の奸計を如何で怖れむ

大空の月日をのみし黒雲は

八十曲津見の姿なりける

大空を封じて八十の曲津見は

月つき日ひの光かげをさへぎりてをり

待まてしばし貴の言こと靈たま宣のりあげて

醜しこの黒くろ雲くも四よ方もに散ちらさむ

わが伊い行ゆく道みちの傍かたへに百も千ち花ばな

咲さきにほひつつ春はる榮さかえけり

春はるの野のに駒こまを竝ならべて進すすみゆく

わが旅たび立だちを勇いさましく思おもふ

鳥とりうたひ胡こ蝶てふは舞まへる春はるの野のを

駒こまを竝ならべて伊い行ゆくたのしさ

曲ま津が見みの奸たく計みたくみし深ふか溪たに川がはも

生いく言こと靈たまに消きえ失うせにけり

わが伊い行ゆく道みちにさやらむ曲ま津があらば

駒こまの蹄ひづめに蹶け散ちらし進すすまむ

狭別比女の神は御歌詠ませ給ふ。

はるばると遠野の旅を續けつつ

日々ひびに聖所すがとに近ちかづくたの樂たのしさ

吹ふく風かぜもいと軟やはらかに百鳥ももとりの

聲こゑはさやけく澄すみわたる春はる

大空おほぞらをつつみし醜しこの黒雲くろくもも

おちつかぬがにたち迷まよひつつ

科戸邊しなとの神かみの御水み火いの幸さちはひて

吹ふき散ちらすらむ黒雲くろくもの幕まくを

山やまとなり溪川たにがはとなり雲くもとなり

曲津見まがつみは行手ゆくてにさやらむとすも

恐おそるべきもの一つひとなき天界かみくにに

生きてはたらく身みは樂たのしけれ

萬世よろづよの末すゑの末すゑまで語り傳つたへ

御稜威照みいづてらさむ言靈ことたまの旅たびを

瑞御靈萬里みづみたまばんりの旅たびに立たせども

月つきをし見みれば淋さびしからずも

わが岐美きみの御靈みたまこもりし月光つきかげを

つつみし雲くもの憎にくらしきかも

狹別比女神さわけひめかみの神言みことの言靈ことたまに

御空みそらの雲霧くもぎりさわけ散ちらさむ  
□

斯かくうたひ給たまへば、科戸しなどの神かみも諾うへなひ給たまひけむ、科戸邊しなどべの風俄かぜにはかに吹ふき出いでて、四よ

方八や方に雲霧うんむを吹ふき散ちらし、さしもの黒雲くろくもは跡あとかたもなく消きえ失うせにける。  
この状さまを眺ながめて花子比女はなこひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

□ 狹別比女神さわけひめかみの神言みことの言靈ことたまに

御空の雲は散り失せしはや

久方の空の黒雲散りにつつ

月日の神はかがやき給へり

地の上に咲き足らひたる百花も

笑まひ顔なり月日をがみて

百鳥の聲もさやかに聞ゆなり

御空の雲の吹き散りしより

天界の旅をつづくる白駒の

蹄の音も冴えわたりつつ

野邊を吹く風さへ薫る春の日を

駒を竝べて進む楽しさ

小夜子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

科戸邊しなごべの風かぜに散ちりにし黒雲くろくもは

巖いはほとなりて道みちにさやらむ

散ちりはてし雲くもは彼方かなたの大空おほぞらに

伊寄いより集つどひて峰みねとなりつつ

もうもうと湧わき立ち湧わき立ち雲くもの峰みねと

なりて行手ゆくてにさやる曲津見まがつみ

曲津見まがつみの猛たけびは如何いかに強つよくとも

駒こまの蹄ひづめにかけて進すすまむ

美うつくしき清きよき天界みくにの中なかにして

由々ゆゆしきかもよ曲津見まがつみの猛たけびは

鋭敏うなり鳴出なりづの神かみの功いさをに村肝むらぎもの

心こころはつよく太ふとらひにけり

わが心こころふくれひろごり天地あめつちに

充みち足たらひつつ勇いさみけるはや

この上は如何なる曲津のさやるとも

何かおそれむ神にあるわれは

天津女雄の神は御歌詠ませ給ふ。

高野比女神の神言に従ひて

ゆく天界の旅は樂しも

曲神の隙をねらへるこの旅も

生言靈に安く進まむ

鋭敏鳴出の神の功に曲神は

雲を霞と逃げ失せにけり

梅咲比女神の神言の幸はひに

吹き來る風も香ばしきかな

香具比女の御魂幸はひ非時に



香具かぐの木この實みの香かりこそすれ

壽す々ず子こ比ひ女神かみの神言みことの言靈ことたまに

澄すみ清きよまりぬこの天地あめつちは

朝香あさか比ひ女神かみは面勝おもかつ神かみにして

またも射向いむかふ神かみにましける

宇都うづ子こ比ひ女神かみの神言みことは言靈ことたまも

いと美うつくしく冴さえ渡わたりけり

狹別さわけ比ひ女神かみの言靈ことたま幸さちはひて

御空みそらの雲くもは吹ふき散ちりにける

花はな子こ比ひ女め生いく言靈ことたまの幸さちはひに

百ももの木き草ぐさは花はな満みちにけり

小夜さよ子こ比ひ女め宣のらせる稜威いづの言靈ことたまに

眞晝まひるの月つきはあらはれにける

斯くの如く、神々は各自に御歌うたはせ給ひつつ、馬上ゆたかに揺られながら  
春風渡る大野ヶ原を、夜を日について進ませ給ふ。

(昭和八・一二・五 舊一〇・一八 於水明閣 林彌生謹録)

#### 第四章 怪しの巖山(一九二一)

八十曲津見の神は、鋭敏鳴出の神の生言靈にうたれて、雲霧となり、西吹く風  
にあふられて、一度は東の御空遙かに逃げ失せたれども、ここに再び陣容を立て  
直し、飽くまでも神の神業にさやらむと、古綿をちぎりたる如く、雲を次々吐き  
出だし、幾千丈とも限りなく重り合せて、遂には天を貫く大巨巖となり、蜿蜒數  
百里にまたがる巖骨の山を築き上げ、その前面に千尋の深き溪川をつくりて、一  
歩も進ましめざらむとし、力を盡すこそ忌々しけれ。

ここに、高野比女の神一行は、駒の轡を並べて、夜を日について進ませ給ふ折

しもあれ、前途に横はる思ひがけなき巖山に、行手を遮られ、暫し思案にくれ給ひけるが、ここに鋭敏鳴出の神は、曲津見の醜の雄猛びものものしやと宣りつつ、かたへの千引巖を、頭上高くさし上げながら、「うん」と一聲、深溪川の巖ヶ根に向つて打ちつけ給へば、巖と巖とは相摩して、迸り出でたる火の光に、曲津神は驚きて、さしもに堅き巖山も、どよめきそめつ梢後方に退きにける。

紫微天界に於ける、火の生れ出でしは、鋭敏鳴出の神の巖投げによりて始まるなり。曲津見の神は激しく飛び出でし火の光に、驚きて肝を冷し、今までの勇氣はどこへやら、數百里にまたがる巖山も、次第々々に影うすらぎ、遂には白雲となりて、御空遠く消え失せたるぞ不思議なれ。

高野比女の神はこの態を見て、感嘆のあまり御歌詠ませ給ふ。

☞ 鋭敏鳴出の神の功に生れ出でし

火は曲神を追ひ散らしける

巖骨の山と變じて曲神は

わが行先ゆくさきをさへぎりしはや

千引ちびき巖いはの摩擦まさつによりて現あらはれし

炎ほのほはすべてを焼やきつくすらむ

天界てんかいに始はじめて見みたる火ひの光ひかり

四よ方もを照てらして曲まがをやらへり

巖いはヶ根がねゆ火ひの出いづること悟さとりけり

鋭う敏なり鳴り出づの神かみの神業みわざによりて

鋭う敏なり鳴り出づの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

曲まが神かみは巖骨ロッキの山やまと變へんじつつ

行手ゆくてにさやれど何なにか恐おそれむ

巖いはと巖いはの軋きしりて生あれし火ひの神かみの

功いさをたふとくわれをろがみぬ

谷底たにそこに散ちりたる火ひ花ばなに怖おそぢ恐おそれ  
ときはの巖いはやま山やまも崩くづれ初そめたり  
堅かきはとき磐いは常は磐はの巖いは山やまと見みゆれども  
雲くもと雲くもとのかたまりなるも  
アオウエイ生いくこと言たま靈のを宣のりあげて  
この巖いはやま山やまを雲くもと散ちらさむら

かく歌うたひつつ、鋭う敏な鳴り出づの神かみは、  
聲こゑも朗ほがらかに御み歌うた詠よませ給たまふ。

アオウエイ天津あまつま眞ま言ことの言こと靈たまに

巖いづき骨き山さんは跡あとなく消きえむ

カコクケキ輝かがやき渡わたる大おほ空そらの

天津あまつ日ひ光ひかげに亡ほろびよ曲まが津つ見み

サソスセシ

さやりたる醜しこの曲津見まがつみの曲業まがわざも

生言靈いくことたまの水い火きに消きえなむ

タトツテチ

たつくもの重かさなり合あひて巖いはとなりし

曲津まがの山やまをば崩くづしてや見みむ

ナノ又ネニ

ながながと廣野ひろのの中なかに尾ををひきし

この巖山いはやまもいまに消きえなむ

八はホフへヒ空そら吹ふく風かぜの功績いさをしに

雲くもと散ちるべしこの巖山いはやまも

マモムメミ

曲津見まがつみの醜しこの猛たけびの深ふかくとも

われには言靈劍ことたまつるぎありけり

ヤヨユエイ

八十曲津見力の限りさやるとも

如何で惱まむ神なるわれは

ワヲウエヤ

わくらはに力あつめて生り出でし

曲の巖山いまに碎かむ

一二三四五六七八九十

百千萬の神守らせたまへ

斯く歌ひ給ふや、蜿蜒として幾百里にわたりたる巖骨の山も、次第々々に煙となりて碎けつつ、風のままに散り行くぞ愉快なれ。

天津女雄の神はこの態を見て、御歌詠ませ給ふ。

天晴れ天晴れ鋭敏鳴出の神の功績に

醜の巖山早や崩れたり

曲神まががみの奸計たぐみの深溪川ふかたにがはさへも

底そこあせにつつかくるひにけり

天地あめつちの中になか生うまれて主スの神かみの

恵めぐみを知らぬ曲津神まがつかみはも

火ひの神かみの在處あrikaを始はじめて悟さとりけり

巖いはと巖いはとの中なかにいますを

曲神まががみの醜しこのとりでを亡ほろぼさむ

ためには強つよき力ちからの火ひなるよ

あらがねの地つちにも火ひにも神かみますと

われは始はじめて悟さとらひしはや

曲神まががみは火ひの御光みひかりに怖おぢ恐おそれ

雲くもの彼方かなたに影かげをかくせり

かくのごと力ちからの限かぎりを集あつめたる

曲まがの仕組しぐみの山やまは崩くづれぬ



言靈ことたまの水い火きに生うれし天界かみくにに

尊たふときものは言靈ことたまなるかも

何なにひと一つ武器ぶきは持もたねど言靈ことたまの

水い火きの劍つるぎに守まもられ行ゆかむ

眞心まじこころをつくしの宮居みややより降くだり來こし

われ面白おもしろきことを見みたりき

駿馬はやこまは勇いさみすすみて天界かみくにの

この清すがしさに嘶いなき止やまらずも

梅咲うめさくひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

面白おもしろき旅たびに立たつかも行ゆく先に

曲まがの構かまへし砦とりでを破やぶりつ

主スの神かみの御み稜いづ威づは高たかしわが岐美きみの

功いさをは廣ひろしと思おもへば樂たのし

曲まが神かみの心こころつくしの巖いは山やまも

生いく言こと靈たまに跡あとなく亡ほろびぬ

曲まが神かみは偽いつはりごとをたぐみつつ

さやらむとする心こころ淺あはましも

天あま津つ眞ま言ことの生いく言こと靈たまの幸さちはひに

生なりし森も羅の萬な象なは永と久はに亡ほろびじ

香か具ぐ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

御み樋ひ代しろ神がみとわれは選えらまれ東ひむがしの

宮みや居やに仕つかへておもふ事ことなし

今いままでの心こころの雲くもり晴はれにつつ

わが背せの岐き美みを尊たふとくぞ思おもふ

戀<sup>こひ</sup>しさの心<sup>こころ</sup>は消<sup>き</sup>えて背<sup>せ</sup>の岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>を

敬<sup>うやまつ</sup>ふわれとなり<sup>なり</sup>にけらしな

鋭<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>なり</sup>出<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>の功<sup>いさを</sup>の尊<sup>たふと</sup>さを

悟<sup>さと</sup>りてわれは心<sup>こころ</sup>はづかし

力<sup>ちから</sup>なき女<sup>めが</sup>神<sup>かみ</sup>の身<sup>み</sup>もて神<sup>かむ</sup>業<sup>わざ</sup>に

仕<sup>つか</sup>ふる日<sup>ひ</sup>々の重<sup>おも</sup>さを思<sup>おも</sup>ふ

さりながら辭<sup>いな</sup>まむ術<sup>すべ</sup>もなかりけり

神<sup>かみ</sup>の依<sup>よ</sup>さしの尊<sup>たふと</sup>かりせば

わが心<sup>こころ</sup>曇<sup>くも</sup>らひにつつ背<sup>せ</sup>の岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の

神<sup>かみ</sup>業<sup>わざ</sup>にさやりし事<sup>こと</sup>を悔<sup>く</sup>ゆるも

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>も清<sup>きよ</sup>めずひたすらに

岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>を慕<sup>した</sup>ひし愚<sup>おろ</sup>かさを恥<sup>は</sup>づ

壽<sup>す</sup>々<sup>ず</sup>子<sup>こ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

ここに來て神の奇しき神業を

近く眺めつおどろきしはや

何事も生言靈の幸はひに

生り出づるよしを悟らひにけり

やすやすと神に仕へて朝夕を

過せしわれは愚かなりける

朝夕の禊の神事をおこたりし

われは御子生み叶はざりしよ

今日よりは瀬見の小川に禊して

生言靈を清め澄まさむ

鋭敏鳴出の神の言靈清ければ

流石の曲津見も逃げ失せにけり

朝香比女の神は御歌うたひ給ふ。

御樋代の神とはいへど言靈の

濁りにそひます神はあらまじ

わが岐美を恨みし事の今更に

はづかしきかも水火の曇れば

曇りたる水火もて少しも曇りなき

水火にあはすと思ひし愚かさ

吾のみか八柱比女神も悉く

生言靈は濁らひますらむ

御子生みの神業に離れし過も

みな言靈の濁ればなりけり

今日よりは心の奥より清め澄まし

神の依さしの神業につくさむ

御樋代の神と任けられいたづらに

この年月を暮すべきやは

言靈ことたまの清きよくありせば曲神まががみの

千引ちびきの巖いはも崩くづれこそすれ

朝あさな夕ゆふな瀬見せみの小川をがはに楔みそぎして

慎つつしみ敬みやまひ神業みわざに仕つかへむ

曲神まががみの強つよき猛たけびも恐おそれずに

進すすみ行ゆかむか言靈ことたま劍つるぎもて

宇都子うづこ比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

宇都子うづこ比女ひめわれは御樋みひしろ代神がみとして

今日けふが日ひまでも待まちあぐみたり

眞心まごころをつくしの宮居みややに詣まうでつつ

主スの大おほ神かみの光ひかりにうたれつ

主スの神かみの依よさしの神業みわざ成ならずして

あだに月日を過す苦しき

鋭敏鳴出の神の言靈清ければ

御空の月日も澄み渡りつつ

曲神は雲霧となり雨となりて

わが行先にさやりこそすれ

萬世の末の末まで生き生きて

神業に仕へむ若返りつつ

若返り若返りつつ神業に

仕へむとして言靈磨くも

狭別比女の神は御歌詠ませ給ふ。

いざさらば進み行かなむ曲津見は

影だにもなく逃げ失せにけり

うづ高く積みて造りし巖山も

跡なく消えて春風わたる

言靈の旅を重ねてをりをりに

曲津の奸計をめづらしみ見つ

言靈に消えて跡なき巖山の

あとに匂へる百花千花よ

言靈の水火の濁れば雲となり

曲津見となりて世を塞ぐなり

百神の曇れる水火の固まりて

八十曲津見は生れ出でにけむ

斯の如悟りしわれは今日の日を

さかひとなして言靈みがかむ

わが神魂清まりぬれば自ら

生言靈も澄みきらふらむ



天界かみくにの旅たびをつづけて今更いまさらに

生言靈いくことたまのたふとさを知る

洗あらへども磨みがけどおちぬ魂線たましひの

曇くもりを如何いかに拂はらはむかと思おもふ

神かみを愛あいし神かみを信しんじつ朝夕あさゆふに

魂洗たまあらふよりほかに道みちなし

花子比女はなこひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ われもまた御樋代神みひしろがみと仕つかへつつ

高地秀たかちほの宮居みやに年としをふりけり

高地秀たかちほの宮居みやの聖所すがどに朝夕あさゆふを

曇くもりし心こころに仕つかへ來こしはも

愛善あいぜんの眞言まことの光ひかりにおはす神かみは

われをきたためず許しましぬる

今日よりは心の駒を立て直し

小さき事にかかはらざるべし

大らかにいます岐美ゆゑ大らかに

仕へて神業に勉むべきなり

村肝の心の闇は晴れにけり

主の大神の御旨さとりて

何事も神の御心と知りながら

をりをり小さき心のわくも

妬み嫉み今まで續けし八柱の

御樋代神を愚かしみおもふ

御樋代の神の中にもすぐれたる

きたなき心持ちしわれなり

花のごと清くあれよと主の神は

花子と名づけ給ひしものを  
花も實もなき言靈を宣りにつつ  
わが背の岐美を悩ませしはや  
わが罪の深さ重さを悟りつつ  
神の御前に詫びつつ泣くなり  
□

小夜子比女の神は御歌詠ませ給ふ。  
たま

夜も晝も神の恵みに抱かれて  
天界に住むわれはたのしも  
樂しかるこの天界に生れあひて  
かこち過せしことを今悔ゆ  
言靈の幸はひたすくる天界に  
われは亡びの道を歩みし

知らず識らず亡びの道を辿りけり

妬ましき心いやかさなりて

御樋代神かたみに妬み嫉みつつ

高地秀の宮居を曇らせしはや

清らけき心の玉をかがやかし

かたみに仕へむ神の御前に

主の神の七十五聲の言靈に

國津神たち數多生れにき

國津神の上に立てよと主の神の

依さし給ひしわれ等なりける

國津神の心におとる魂線を

もちて仕へむことの難きも

眞心のあらむ限りを照らしつつ

世のため神のためにつくさむ

いざさらば百神駒に召しませよ

東の宮居は遙かなりせば

高野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

鋭敏鳴出の神はわが行く先に立ちて

進ませたまへこの廣原を

天津女雄の神は後方を守りつつ

進ませたまへ東の宮居へ

斯く歌ひ給へば、鋭敏鳴出の神は、高野比女の神其他一同に黙禮しながら、ひらりと駒に跨り、いざや道案内せむと、馬背に鞭うち蹄の音も勇ましく、鈴の音を四邊に響かせながら、春風わたる青野ヶ原を進ませ給へば、一行は轡を並べてしづしづと御心も朗かに進み出で給ふ。

(昭和八・一二・五 舊一〇・一八 於水明閣 白石恵子謹録)

第五章 露の宿(一九二二)

果てしも知らぬ大野ヶ原の眞中を十一頭の駒の轡を並べつつ、

花の香運ぶ春風に 鬢のほつれをいぢらせつ

手綱かい繰りしとと 大河小川を乗り越えて

勇み進むで出で給ふ その風景はさながらに

名高き畫工の描きたる 繪巻物の如見えにける。

高野比女の神は、大野ヶ原の眞中に駿馬の蹄を留めて、空行く雲を眺めながら  
心靜かに御歌詠ませ給ふ。

久方ひさかたの空そらに往ゆき交かふ白雲しらくもの

かげは高地たかちほやま秀山すやまより流ながるる

高地たかちほ秀山やまの聖所すがとも近ちかづきて

わが魂たまわが駒勇こまいさみ出いでけり

歸かへり行ゆく道みちの隈手くまでも恙つつがなく

神かみの恵めぐみに渡わたり來こしはや

晝月ひるつきのかげは白しろけて山やまの端はに

近ちかづきにつつ黄昏たそがれむとすも

三日月みかづきの月つきのまゆみに照てらされて

矢竹心やたけこころの駒こまは勇いさみぬ

久方ひさかたの高地たかちほやま秀山すやまもほの見みえて

この廣原ひろはらに黄昏たそがれむとすも

一夜ひとよの露つゆのやどりをたのみつつ

明日あすはかへらむ高地たかちほ秀山やまの山やまへ

高地秀の尾の上に白雲湧き立ちて

西へ流るる夕なりけり

吹く風もあとなく止みて静かなる

春の大野に露あびつ寝むか

梅咲比女の神は御歌詠ませ給ふ。

春駒のいななき高く響かひて

日は暮れむとす大野ヶ原に

山の端に傾く月のかげ見れば

利鎌の如く鋭かりけり

曲神の醜の猛びも消え失せて

御空の星はきらめき初めたり

大空の星は目と目を合はせつつ



永久とほのささやきつづけるかも

幾萬いくまんと數かずかぎりなき星ほしかけを

仰あふぎつわれは心こころはるけし

大空おほぞらを二ふたつに割わりて永遠とことはに

銀砂ぎんしゃ流ながる天あまの河かははも

久方ひさかたの空そらに横よこたふ天あまの河かはも

その行先ゆくさきは海うみに續つづけるか

蟲むしの音ねもいやさやさやに響ひびきつ

わが目め俄にはかに眠ねむくなりたり

春風はるかぜに吹ふかれて長ながき駒こまの旅たびを

しばし休やすめむ草くさの褥しとねに

大空おほぞらの星ほしの模も樣やうの夜具やぐを着きて

大地だいちの褥しとねに一夜ひとよを眠ねむらむ

香具比女の神は御歌詠ませ給ふ。

高野比女神の神言に従ひて

天津高宮に詣でけるかも

七日七夜駒の旅路を重ねつつ

今宵も草の褥に眠らむ

萬里行く駒も脚をば地にのべて

旅のつかれをやすらひ居るも

この駒はやさしき駒よ千萬里の

旅をたすけて報酬を求めず

天界に生きてほりする事なくば

日々の生活は安けかるらむ

幾千里われを助けて勇み立つ

駒の心のうるはしきかも

壽々子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

千萬里の旅を重ねて今ははや

高地秀の宮居に近づきにけり

明日ざれば高地秀の宮居にかへらむと

おもへば楽しく夜も眠られず

一夜の露の枕を重ねつつ

歸らむよき日待つは楽しき

曲津見の醜の猛びも言靈の

水火に被ひて歸り來にけり

鋭敏鳴出の神の言靈力もて

道の隈手もつつがなく來し

河となり又山となり雲となりて

曲津見は道にさやりけるはも

曲津見は如何に猛るも議ゆとも

生言靈に及ばざりけり

久方の筑紫の宮居の旅に立ちて

世のさまざまの憂をさとりぬ

風清く眺め妙なる高地秀の

宮居にし住めば世のさま知れずも

うつり行く世のさまざまの事毎を

悟らひにけり旅を重ねて

わが魂は黒雲の如濁らへりと

筑紫の宮居に詣でてさとりぬ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☞ 千萬里遠の旅路を重ねつつ

はや一夜の旅となりける

高地秀の山は戀しもなつかしも

岐美の御靈のとどまりませば

住みなれし高地秀の宮居の聖所こそ

わが永遠の命なりける

永遠の命の聖所を後にして

再び吾は旅立たむと思ふ

さりながら御樋代神等の御許しを

受けての後に定めむと思ふ

大空に星はまたたき地の上の

草葉の露は玉とにほひつ

春草の根にひそみ鳴く蟲の音も

いや冴えにつつ夜は更けにけり

星光は千萬あれど弓張の

月の光に及ばざりけり

山の端に新月の影消え失せて

闇のかたまり地に擴これり

闇の幕とほして仰ぐ星かげの

數限りなくまたたく夜半なり

宇都子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

長の旅を今日が宵まで續けつつ

世のさまざまを悟らひしはや

大空にただ一片の雲もなく

千萬の星かがやき初めつつ

満天に數の限りをかがやける

星かげを力に一夜を眠らむ

國くに土つち稚わかき大おほ野のヶが原はらも春はるされば

花はなの筵むしろとなりて匂にほへる

花はな筵むしろいやさや敷しきて春はるの夜よを

眠ねむりつ蟲むしの音ねきくは樂たのしむ

狹さ別わけ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

高たか地ち秀ほの峰みねは白しら雲くもたなびきて

遠とほ野の旅たびの夜よは更ふけにけり

明あ日すの日ひは高たか地ち秀ほの宮みや居やに歸かへらむと

心こころいさみて眼まなこ涙なみだえつつ

曲まが津つ見みに道みちの行ゆく手てを遮さへぎられし

時ときを思おもへば今こよひ宵ひは安やすけし

鋭う敏な鳴り出づの神かみの言こと靈たま天あめ地つちに

響ひびき渡わたりて曲ま津がは失うせける

言こと靈たまの貴うづの力ちからを今いま更さらに

われは悟さとりぬ旅たびを重かさねて

言こと靈たまの伊い照てりたすくる天かみ界のよに

生うれしわが身みの幸さちを思おもふも

見み渡わたせば深ふかく包つつみし闇やみの幕まくに

遙はるかの野の邊べはかくろひにけり

日け竝ならべて旅たびに立たちつつやうやくに

一ひと夜よをあます草くさ枕まくらはも

草くさ枕まくら旅たびの疲つかれもしらずがに

駒こまは安やすけく眠ねむらひにけり

花は子な比こ女ひめの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。



☐ 長旅ながたびに疲つかれし吾われも一夜ひとよの

旅たびとし思おもへば嬉うれしくなりぬ

明日あすの日は高地秀たかちほの宮居みやの大前おほまへに

復命かへりごとせむとおもへばうれし

高地秀たかちほの宮居みやゐは常に紫むらさきの

雲立くもたちのぼり清すがしき山やまはも

久方ひさかたの天津御空あまつみそらに聳そびえたる

高地秀山たかちほやまの春はるはうるはし

百千ももちばな花咲なき足たらひたる高地秀たかちほの

山やまは天界みくにの姿すがたなるかも

小夜子さよこ比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 小夜更さよふけて眠ねらへぬままに草くさの露つゆ

素足すあしにふめば清すがしかりけり

明日あすの日は高地たかちほ秀ほの宮居みややに歸かへらむと

おもへば心こころをどりて眠ねむれず

日けなら竝ならべて旅たびの樂たのしさ苦くるしさを

悟さとらひにつつ一夜ひとよとなりぬ

一夜ひとよの野邊のべの宿やどりももどかしく

おもひぬるかな聖しが所とちか近ちかみて

御樋代みひしろの神かみ打揃うちそろひ紫微しびの宮居みややに

詣まうでしことを珍めづらしとおもふ

主スの神かみの惠めぐみに夜よるも安やすらけく

幾日いくひの旅たびをつづけけるかも

わが心頓こころとみに勇いさみて眠ねむられず

駒こまのあがきの音おとききて居をり

薄曇うすぐもる春はるの陽氣やうきのただよひて

風かぜ静しづかなる神み苑そのにかへらむ  
大おほ宮みや居やの庭にはを流ながる清きよ川かはに  
明あ日すはかへりて楔みそぎせむかな  
」

天あま津つめ女を雄をの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

御み樋ひ代しろの神かみの御み供ともに仕つかへつつ

高たか地ち秀ほの宮みや居やに近ちかづきしはも

いざさらば夜よの明あくるまで眠ねむるべし

春はるの氣きのただよふ野の邊べの草くさ生ふに  
」

斯かく神かみ々がみは述じゆ懐つ歌わいをうたひつつ夜よの明あくるを待まち給たまひ、再ふたび  
駒こまの蹄ひづめの音おと勇いさまし  
次つぎの日ひの眞ま晝ひる頃ころ、やうやくにして高た地ち秀ほの宮みや居やの聖す所がどに無ぶ事じ歸かへらせ給たまひけ  
る。

(昭和八・一二・五 舊一〇・一八 於水明閣 内崎照代謹録)

第二篇 晩春の神庭

第六章 報告祭(一九二三)

春の陽氣は漂ひて、櫻花爛漫と咲き亂れ、庭の面に一辨二辨と靜に櫻の花辨の  
散りこぼれたる眞晝頃、高地秀の宮居の清庭に駒の轡を竝べて、高野比女の神一  
行は御面輝かせ、目出度く此所に歸り給ひければ、胎別男の神は比女神の姿を見  
るより打喜び、恭しく出で迎へて長途の旅の勞を犒ふべく、別殿に歡迎の馳走の  
準備に忙しく諸神を督して、忠實々々しく立ち働き給ひける。

茲こゝに高野比女の神かみいつかう一行は、大宮居の大前におほまへ楔被みそぎはらひを終り、感謝あやひの祭典まつりを行おこなひ太祝詞のりとを宣のらせ給たまふ。

海河山野うみかはやまぬの種々くさくさの美味物うましものを八足やたりの机代つくゑしろに置き足たらはし、十柱とほしらの神かみは式場しきちやうに列座れつぎし其他そのたの神々かみがみは末座まつぎに拜跪はいきして、今日けふの目出度めでたき祭典さいてんに列れつし給たまひつつ、天てんを拜はいし地ちを拜はいし歡よろこばせ給たまふ。

高野比女の神かみは御前みまへに拍手はくしゆして、

掛卷かけまくも畏かしこき紫微天界しびてんかいの眞秀良場まほらばなる高地秀山たかちほやまの下津岩根したついはねに、宮柱みやばしら太敷ふとしきた立て高天たかあま原はらに千木高知ちぎたかしりて、堅磐常磐かきはときはに鎮しづまりいます主すの大神おほかみの大前おほまへに、御樋代みひしろの神高野かみたかの比女等ひめら、慎つしみ敬あやまひ畏かしこみ畏かしこみも白まをさく。抑そも此これの天界かみくには主すの大神おほかみの廣ひろき厚あつき大御惠おほみめぐみと、赤あかき直なほき正ただしき生言靈いくことたまの御稜威みいづに依よりて、鳴なり出いで給たまひし國土くににしあれば、海うみと陸くがとの別わかちなく山やまと河かはとの差別けぢめなく、廣ひろき厚あつき恩賴みたまのふゆを蒙かかぶりて、彌遠永いやとほながに立たち榮さかゆるものにしあれば、一日ひとひ片時かたときも主すの大神おほかみの御惠みめぐみに離はなれては、世よに立たつべからざる事ことの由よしを、深ふかく悟さとり廣ひろく究きはめて、彌益いやすます々に其畏そのかしこさに戰慄をのき恐おそれ敬あやまひ奉まつらむとして、

過ぎつる吉月の吉日を選び、萬里の道を遙々と駒の背に跨り、岩根木根踏み佐久  
美て天津高宮に、草枕旅の宿りを重ねつつ詣で奉り、大御神の御口自から清き赤  
き貴き大神宣を承り、唯一言も洩らさじ忘れじと心の駒の手綱引締め、頸に受け  
て束の間も忘るる事なく、村肝の心に抱き胸に秘め、大御恵を忝けなみつあり  
しが、畏れ多くも主の大御神より高地秀の宮居の宮司として、此度新に鋭敏鳴出  
の神、其添柱として天津女雄の神を授け給ひぬ。天晴れ天晴れ今日よりは高地秀  
の宮居は彌生の花の咲き満つるが如く、秋の楓の紅に染むるが如く、彌美はしく  
彌清しく榮えまさむ事を、思ひ量りて嬉しみに堪へず、各自の御樋代神等は玉の  
泉に楔を修め、感謝言の神嘉言を宣り終へて、再び駒に跨りつ十柱の神等は果し  
も知らぬ大野原の駒の嘶き勇ましく、夜を日に次ぎて歸らむ道に、さやりたる八  
十曲津見の曲業も、主の大御神の深き厚き御守りに、喪なく事なく今日の吉日の  
吉時に、主の大御神を祭りたる此の宮居に歸りける、其嬉しさの千重の一重だも  
報い奉らむとして、海河山野の種々の美味物を百取の机代に横山の如く置き足は  
して奉る状を、うま怜に委曲に聞食相諾ひ給ひて、此の宮居に仕へ奉る司神等は

大御心に違ひ奉らず逆ひ奉らず、大御神の授け給ひし眞言の光を照らし仕へ、罪穢過なくうま怜に委曲に仕へしめ給へと畏み畏みも願ぎ奉る。

言別けて白さく、高地秀の宮居を眞中として、四方を廻れる稚國土原の、國津神等は各自に日々の業務を勵し勤めて緩ぶ事なく、怠る事なく、此の天界を彌益に拓かせ榮えしめ給ひて、紫微天界の眞秀良場たる貴き御名を落さじと、勵み勵み活動かしめ給へと、鹿兒自物膝折伏せ、宇自物頸根突貫きて畏み畏みも願ぎ奉らくと白す。惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世

高野比女の神は大前の祝詞を終り、しづしづと御前を下り諸神と共に、直會の席に着かせ給ひ、合掌久しうしつ御歌詠ませ給ふ。

足引の山鳥の尾の長旅も

神の恵にやすくをはれり

遙々と筑紫の宮居に駒竝べて

詣まうで來きつるも惟かむな神がらわれ等らは

主スの神かみの厚あつき惠めぐみしなかりせば

此この旅たび立たちは難かたかりしものを

廣ひろ々と果はてしも知しらぬ地つち稚わかき

國くに原はらを行ゆく危あやふき旅たびなりし

曲まが津かみ神は到いたる處ところにさやらむと

手て組ぐ脛すね引ひきて待まち構かまへたりき

斯かくの如ごと危あやふき旅たびも恙つつがなく

今け日ふを御み前まへに歸かへり來こしはや

十と柱はしらの賑にぎはしき旅たびも斯かくの如ごと

苦くるしきものをと背せの岐き美みを思おもふ

背せの岐き美みの旅たびの艱なやみを今いま更さらに

悟さとりけるかな愚おろかしき吾われも

何なに事ことも神かみの心こころの儘ままにして



生るべきものと悟らひにけり  
主の神は宮居の司と鋭敏鳴出の

神を聖所に降したまひぬ

鋭敏鳴出の神の司の添柱と

降り來ませる天津女雄の神

高地秀の峰に春の氣漂ひて

今をさかりと櫻咲くなり

櫻木の梢にうたふ鶯の

聲長閑なる東の宮居はも

草枕長の旅より歸り見れば

この清庭に春はふかめり

御木も草も瑞氣立ちつつ若やぎて

天界の春を言祝ぎ顔なる

鋭敏鳴出の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代神御供に仕へ漸くに

此の聖所にわれ來つるかも

東の宮居に仕へて思ふかな

これの聖所はまた世になしと

高地秀の山は隈なく櫻木の

花咲き満ちて長閑なりけり

此處に來て始めて知りぬ天界の

春の景色のさわやかなるを

西の宮居の松の神苑に比ぶれば

華美なるも東の宮居は

西の宮居は心靜かに落付けど

東の宮居は心ときめく

ときめける心抱きて高地秀の  
宮居に仕へつ國土固めばや  
御樋代の比女神等の心にも  
似て晴れ晴れし櫻の盛りは  
非時に花は散らざれ萎れざれ  
生きたる神の庭に咲く花は

折もあれ櫻の花辨は、ひらひらと直會の席に列なり給ふ朝香比女の神の持たせ  
る御杯の上に、一辨落ち來り浮びたれば、朝香比女の神はほほ笑みつつ御歌詠ま  
せ給ふ。

背の岐美の清き心の一辨か

わが杯に浮ける櫻は

背の岐美の心と思へば捨てられじ

花はなもろともにいただかむかなら

斯かく歌うたひながらら花はな辨びらの浮うける神み酒きをぐつと飲のみ下くだし給たまひ、

背せの岐き美みの深ふかき心こころの花はな辨びらと

神み酒き諸もろ共ともに飲のみ干ほしにけり

御み樋ひ代しろの神かみと選えらまれ背せの岐き美みの

水い火きと思おもひて飲のみし花はな酒ざけよ

斯かくならば吾われは御み樋ひ代しろ神かみとして

岐き美みの在あり所かをたづね行ゆくべしら

梅うめ咲さ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

梅うめの花はなははや散ちり果はててさくら花はな

また散り初めぬ神の御前に

移り行く世の有様をまつぶさに

梅と櫻の花に見しはや

白梅のつぼめる朝を立ち出でて

櫻花散る春を歸れり

今日よりは心改めて大宮居に

朝な夕なを眞言捧げむ

言靈に森羅萬象は生るてふ

由を悟りし吾は畏し

終日を神の御前に太祝詞

言靈捧げて仕へまつらな

朝夕の祝詞は愚か夜も晝も

かたみに宣るべき祝詞なりけり

言靈の稜威に榮ゆる森羅萬象は

又また言こと靈たまぞ力ちからなりける〚

香か具ぐ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

非とき時じくの香か具ぐの木この實みも言こと靈たまの

尊たふとき水い火きに生なり出いでしはや

吾われも亦また香か具ぐの木この實みゆ生うれたる

神かみにしあらば言こと靈たまたふとし

言こと靈たまの聲こゑを聞きかずば片かた時ときも

苦くるしさ覺おぼゆる吾わが體みなりけり

言こと靈たまの水い火きに空くう氣きを造つくり出だし

百ももの生いの命ちを生うみ出いだすなり

正ただしかる神み魂たまの水い火きは天よ界よを拓ひらき

曇くもれる水い火きは天み界よを傷そこな

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>曇<sup>くも</sup>りて濁<sup>にご</sup>りたる

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>は鳴<sup>な</sup>り出<sup>い</sup>づるなり

主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>を常<sup>と</sup>磐<sup>は</sup>に祀<sup>まつ</sup>りし高<sup>た</sup>地<sup>か</sup>秀<sup>ち</sup>の

宮<sup>みや</sup>居<sup>や</sup>は清<sup>すが</sup>しも言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>澄<sup>す</sup>めば

吹<sup>ふ</sup>き渡<sup>わた</sup>る梢<sup>こすゑ</sup>の風<sup>かぜ</sup>も爽<sup>さわ</sup>かに

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>清<sup>きよ</sup>く鳴<sup>な</sup>り響<sup>ひび</sup>くなり

庭<sup>には</sup>の面<sup>も</sup>を流<sup>なが</sup>るる瀨<sup>せ</sup>見<sup>み</sup>の川<sup>かは</sup>水<sup>みづ</sup>も

澄<sup>す</sup>みきり澄<sup>す</sup>みきり透<sup>す</sup>き徹<sup>とほ</sup>りつつ

常<sup>とき</sup>磐<sup>は</sup>木<sup>ぎ</sup>の松<sup>まつ</sup>の木<sup>こ</sup>の閒<sup>ま</sup>に咲<sup>さ</sup>き満<sup>み</sup>つる

櫻<sup>さくら</sup>の眺<sup>なが</sup>めは殊<sup>こと</sup>更<sup>さら</sup>目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>き

壽<sup>す</sup>々<sup>ず</sup>子<sup>こ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

はろばると遠<sup>とほ</sup>の旅<sup>たび</sup>路<sup>ぢ</sup>を重<sup>かさ</sup>ね來<sup>き</sup>て

目出度く今日は感謝言宣る

言靈の水火に生り出でし天界に

澄める言靈の吾生命かも

言靈の活用なくば束の間も

生きて榮えぬ天界なりけり

わがもてる意志想念も悉く

生言靈の光なるらむ

正しかる生言靈の光る天界は

言葉のはしも慎むべきなり

顯津男の神の拓きし高地秀の

山の姿は生き通しなり

高地秀の山を朝夕眺めつつ

吾背の岐美と仕へ奉るも

長旅に見え得ざりし高地秀の



山やまの一ひとしほ戀こひしき吾われなり

此この宮居みやは吾背わがせの岐美きみの築きづきたる

貴うづの宮居みやぞ殊更ことさらうるはし

朝夕あさゆふにこれの神山みやまを力ちからとし

吾背わがせの岐美きみとなして生いくるも

草枕旅くさまくらたびを重ねかさて背せの岐美きみの

艱なやみを深ふかく悟さとりつつ泣なくも〆

宇都子うづこ比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

今日けふよりは鋭敏うな鳴出りづの神かみ現あれまして

宮居みやの司つかさと仕つかへますかも

天津女雄あまつめをの神かみも出いでまして大宮居おほみやの

日々ひびの仕つかへも革あらたまるべし

御槌代神旅なるあとは胎別男の

神かみの司つかさの依よさしなりけり

胎別男みわけをの神かみよ今日けふより鋭敏うなり鳴出づの

神かみの司つかさの神業みわざ補たすけよ

御槌代みひしろの八柱やはしらがみ神かみは聖殿すがどのに

終日ひねもす集つどひて言靈ことたま宣のるべし

言靈ことたまの水い火き止とどまれば天界かみくにの

森羅萬象すべてのものは枯かれ萎しほむなり

御槌代みひしろの神かみは御子みこ生うみのみならず

生言靈いくことたまの槌代ひしろなりしよ

顯津男あきつをの神かみの御槌代みひしろと任まけられしも

生言靈いくことたまを補たすくるためなりき

槌代ひしろとは生代いきしろの意いぞ國魂くにたまの

神生かみうむのみの司つかさにあらずも

今日<sup>けふ</sup>までは吾<sup>わが</sup>勤<sup>つと</sup>めさへ知<sup>し</sup>らずして  
岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>をのみ戀<sup>こ</sup>ひしことの恥<sup>はづ</sup>かしき  
』

狹<sup>さ</sup>別<sup>わけ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

宇<sup>う</sup>都<sup>づ</sup>子<sup>こ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>かみ</sup>の言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>聞<sup>き</sup>くにつけ

吾<sup>われ</sup>も悟<sup>さと</sup>りぬ御<sup>み</sup>槌<sup>ひしろ</sup>代<sup>しろ</sup>の司<sup>つかさ</sup>を

雲<sup>くも</sup>霧<sup>ぎり</sup>を別<sup>わ</sup>けて昇<sup>のぼ</sup>らす天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>も

主<sup>ス</sup>の言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>ゆ生<sup>な</sup>り出<sup>い</sup>でましける

月<sup>つき</sup>も日<sup>ひ</sup>も星<sup>ほし</sup>も悉<sup>ことごと</sup>言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の

水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>と思<sup>おも</sup>へば尊<sup>たふと</sup>きろかも

草<sup>くさ</sup>も木<sup>き</sup>も鳥<sup>とり</sup>も獸<sup>けもの</sup>も言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の

水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>に育<sup>そだ</sup>つる天<sup>みく</sup>界<sup>に</sup>なりけり

櫻<sup>はな</sup>花<sup>はな</sup>咲<sup>な</sup>くも散<sup>ち</sup>らすも吹<sup>ふ</sup>く風<sup>かぜ</sup>も

皆みな言靈ことたまの水い火きなりにけり

吾わが身み又また生いく言靈ことたまの幸さちはひに

生うまれて言靈ことたまに仕つかへ奉まつる身みよ

言靈ことたまの水い火きの幸さちはひ無なかりせば

この天界かみくには直ただに亡ほろびむ

遙々はろはろと旅たびを重かさねて曲まがもなく

歸かへりしわれも言靈ことたまの幸さちなり

斯かくの如尊ごとたふとき稜威いづの言靈ことたまを

忘わすれて祝詞のりとを怠おこたるべしやは

氣魂からたまの濁にごらば心濁こころにごるべし

心濁こころにごらば言靈ことたま汚けがれむ

身みを清きよめ心清こころきよめて仕つかへなば

生いく言靈ことたまは自おのづと光てるべし

神々かみがみの要かなめの勤つとめは朝あさ夕ゆふの

楔みそぎの神事わさぎにまさるものなし

主あるじなき宮居みやゐは頓とみに淋さびしけれ

生言靈いくことたまの祝詞のりとなければ

胎別男みわけをの神かみの宣のらする言靈ことたまの

祝詞のりとは弱よわくうすら濁にごりぬ

御樋代神みひしろがみいまさぬ宮居みやゐの淋さびしさは

主スの神坐かみまさぬ如ごとくなりけり㊦

花子比女はなこひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

高たか地ち秀山ほやま今いまを盛さかりと咲さき匂にほふ

櫻桜さくらもしばしの命いのちなるかも

惜をしめども花はなは梢しずえに止とどまらず

そよ吹ふく風かぜにも散ちり初そめにつつ

夜嵐よあらしの花はな散ちらすかと吾われはただ

生言靈いくことたまに支ささへて居ゐるも

束つかの間まも花はな散ちらざれと支ささへつる

吾言靈わがことたまも怪あやしくなりぬ

夜嵐よあらしは吹ふかねど梢しすゑの櫻さくら花はな

時ときの來きつればこぼれ落おちつつ

落おち散ちりし庭にはの花はな辨はな眺びらめつつ

踏ふむさへ惜をしく思おもはるるかも

移うつり行ゆく世よの有あり様さまを高たか地ち秀ほの

宮居みやの櫻さくらに悟さとらひしはや

花はなは散ちれど梢しすゑに若葉わかばもえ立たちて

眼めあたらしく夏なつをさかえむ

櫻さくら花はな散ちりたる庭にはに紅あかく白しろく

勻にほへる牡丹ぼたんのあでやかなるも

さりながら又夏更けて丹牡丹の

花は一辨々々くづれむ

丹牡丹の蕾ほぐれて咲き初めし

日より三日経て又散る世なるも

清庭の白梅の花散り果てて

跡に青々つぶら實生れり

白梅は開きて散りて實を結び

移り行く世の態を教ゆも

小夜子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

はるばると遠の旅路を重ねつつ

今大前に復命せり

今日よりは神魂を清むと朝夕の

楔みそぎの神事みわざ怠おこたらざるべし

楔みそぎして吉よ言こと靈たまに天界かみくにを

照てらすは御樋みひしろ代神がみの勤つとめよ

朝夕あさゆふは言いふも更さらなり暇いとまあらば

楔みそぎて貴うづの言こと靈たま宣のらばや

言こと靈たまの天照あまてり助たすけ生いくる國土くにに

怠をこたるべしやは生言靈いくことたまを

言こと靈たまの水い火き澄すみきらひて天地あめつちは

彌いやとほ遠なが永ながに榮さかえますべし

月つきも日ひも生言靈いくことたまに照てり渡わたる

曇くもるは曲津まがの水い火きにこそあれ  
□

給たまひ、此度このたびの旅行りよかうにて學まなび得えたる言こと靈たまの眞理しんりを告白こくはくしながら、各自おののおのの居間ゐまに就つか

斯かくの如ごとく十柱とほしらの神々かみがみは、下向げかうの報告祭ほうこくさいを大宮おほみやに奏上そうじやうし終をはりて、直會なほらひの式しきに列れつし



せ安々と今日の一日を休らはせ給ひける。折しもあれ、ぼやぼやと吹き来る春風に満庭の櫻は雪の如く夕立の如く、算を亂して清庭の面に散り敷きければ、庭は一面の花筵となりて、名残惜しげに數多の胡蝶來りて、低く舞ひ遊び戯れ居たりける。

（昭和八・一二・六 舊一〇・一九 於水明閣 森良仁謹録）

## 第七章 外苑の逍遙（一九二四）

長途の旅に疲れたる百神等は、各自春の日の夢を結ばせ給ひ、高地秀の宮居の廣庭は水を打ちたる如く静まりて、小鳥の春を囀り交す聲のみぞ聞ゆ。

胎別男の神は駒の疲れを休ませむとして、限りも無き廣き外苑の若草萌ゆる清庭に、駒を放ちて遊ばせ給ひつつありける。

春風は徐ろに吹き花の香を四邊に送り、四方はおぼろに靄立ちこめて、げに長

閑なる晩春の景色なりける。

朝香比女の神は長途の疲れもいとひ給はず、この長閑なる春日を眠るは惜しし  
と、花の蕾のほぐれたる清庭に立ち出で給ひ、心静に御歌詠ませ給ふ。

梓弓春の女神は夏山の

みどりの園にうつらせ給ひぬ

吹く風も長閑なりけり晩春の

野邊の景色は湯の沸ける如し

百千草所せきまで萌え出づる

野邊の遊びは心地よろしも

露おびし若草の上を踏みて行く

素足の裏のさも心地よき

紫の花はほぐれて池水に

咲くも床しき庭のあやめよ

やがて今あやめの花は紫と

日々ひびににほ勻にほひて夏深なつふかむらむ

池水いけみづの底そこに泳およげる大魚おほな小魚さな

鱈ひれの動うごきのすみやかなるも

背せの岐美きみはいづくの果はてにお在はすらむと

朝あさな夕ゆふなを思おもひわづらふ

爛漫らんまんと咲さきほこりたる櫻木さくらぎの

花はなもつれなく散ちる世よなりけり

白梅しらうめは早はや散ちり果はてて若葉わかば萌もゆる

梢しゆにつぶら實みのぞきゐるかも

天津日あまつひは霞かすみの空そらにほのぼのと

光ひかりやはらげて昇のぼりましける

駿馬はやこまの嘶いななき強つよく草くさむしる

愛めぐしき姿すがたに夏なつは來きむかふ

山やまも野のもみどりの衣ころも着き飾かざりて

夏なつの粧よそほひものものしけれ

われもまた御み樋ひ代しろ神がみの一ひと柱しら

ただいたづらに時ときを待まつべき

天地あめつちの森す羅べて萬もの象ものはうつり行く

この天かみ界くにに黙もだしあるべき

いたづらに岐き美みを戀こひつつ歳としを經へし

わがおるかさを今いま更さら悔くゆるも

御み樋ひ代しろ神がみは御み子こ生うみのみにあらずとは

知しれど如いか何かでか忍しのばるべしやは

岐き美みを戀こふる心こころの駒こまははやり立たちて

女め神がみの胸むねは高たか鳴なり止やまずも

草くさの露つゆ素す足あしに踏ふみて行く庭にはの

果はてにも霞かすむ晚おそ春はるの色いろ

躊躇の弱き心を立直し

勇み進まむわが背の岐美許に

吾行かば背の岐美怒らせ給ふらむ

言靈照して和らげて見むかも

鋭敏鳴出の神の出でましし大宮居は

彌榮えなむわれ居らずとも

百神に議らば心ず止められむ

吾はひそかに旅立たむかも

天津日の西にかたむく夕暮を

駒に跨り御空をたづねむ

朝香比女の神はひそひそと述懐歌をうたひ乍ら、芝生を逍遙し給ひけるが、胎

別男の神は耳ざとくも朝香比女の神の御歌を聞き給ひ、驚きて大宮居に馳せ歸り、

七柱の御樋代神始め鋭敏鳴出の神、天津女雄の神に事の由を詳細に告げ給へば、

おのもおのあどろ  
各自驚き給ひて夢を破らせつつ、朝香比女の神の出立を止めむと、夏草萌ゆる外  
苑に立出で給へば、朝香比女の神は吾乗らむ駒の背に鞍を置かせ給ひ、片御手に  
手綱を取り、左の御足を駒の鐙に半ばかけむとし給ふ折なりければ、高野比女の  
神は驚き給ひて馳せより、駒の轡を堅く握らせ給ひて御歌詠ませ給ふ。

□ 春さりて夏來むかへる清庭に

何故汝は駒に召さすか

駿馬に跨りいゆく旅衣も

早や夏の日となりにけらしな

草枕旅に立たすは春と秋の

花と紅葉の頃なるべきを

朝香比女の神は右手に手綱を取りながら答の御歌詠ませ給ふ。

背せの岐美きみの御上みうへ思おもへば戀こふしさの

心こころつつのりて得え堪たへずなりぬ

八十筋やそすぢに亂みだれ初そめにしわが心こころ

つかねむ由よしもなかりけるかな

大道おほみちに違たがひ奉まつると知しりつつも

吾われ進すすまばや背せの岐美きみ許がり

駿馬はやこまのはやる心こころを止とどめます

公きみの言ことの葉は恨うらめしきかな

いか程ほどにとどめ給たまふもわが心こころ

はや旅たび立ちを定さだめたりける

なまじひに止とどめ給たまひそわが駒こまは

旅たびに立たたむと足あ搔がき止やまずも

高野比女たかのひめの神かみは儼然げんぜんとして御歌詠みうたよませ給たまふ。

主スの神かみの汝なれは依よさしの御み樋ひ代しろよ

許ゆるしなくして旅たびに立たたすか

天かみ界くには主スの大神おほかみの御み樋ひ代しろよ

いかで許ゆるさむ獨ひとり斷ごころ心を

朝あさ香か比ひ女めの神かみは答いらへの御み歌うた詠よませ給たまふ。

主スの神かみの道みちに背そむくと知しりながら

戀こふしさつつのりて死しなまく苦くるし

日ひに夜よるに苦くるしみもがきし吾わが魂たまは

消けなば消けぬべく死しなば死しぬべし

矢やも楯たてもたまらぬまでの戀こふしさに

胸むねの高たかな鳴なり苦くるしく止やまずも

今いまとなりて戀こふしき心こころをひるがへす



ちから  
力なきわれを許させ給へ  
□

うなりづ  
鋭敏鳴出の神はこの様を見て驚きながら、  
みうたよ  
御歌詠ませ給ふ。

ス  
主の神に御樋代神とまけられし  
□

きみ  
公にあらずや省みまませ

くさまくらめがみ  
草枕女神の一人旅立ちは

あや  
危ふかりけむ時を待たせよ

ほど  
いか程に心はやらせ給ふとも

わかくに  
この稚國土は進む道なし  
□

あさかひめ  
朝香比女の神は決然として歌ひ給ふ。

□  
よしやよし萬里の荒野を涉るとも

吾は恐れじ言靈劍もてれば

言靈の貴の劍をふりかざし

さやらむ曲津を斬りはふり行かむ

高地秀の宮居は尊し背の岐美は

一人なつかし黙しあるべきや

吾一人これの宮居にあらずとも

鋭敏鳴出の神ひかへますなり

遠くはかり深く思ひて吾は今

御子生みの旅に立たむとすなり

主の神の依さしの神業遂ぐるまで

吾は歸らじ許させ給へ

御樋代の比女神等よわが願ひ

うま怜に委曲に聞きて許さへ

わが心千引の巖より重くして

如何なる力も動かし得ざらむ  
□

梅咲比女の神はしとやかに御歌詠ませ給ふ。  
うめさくひめのかみはしとやかにみうたよたま

背の岐美を思はず心のあさからぬ  
せのきみをおもはすこころのあさからぬ

朝香の比女の眞言を悲しむ  
あさかのひめのまことかな

吾とても日々ひびに戀こふしく思おもへども  
われとてもひびにこふしくおもへども

御許しなればせむ術すべもなし  
みゆるしなればせむすべもなし

あらためて神かみの許ゆるしの下くだるまでは  
あらためてかみのゆるしの下るまでは

朝香あさかの比女ひめよ暫しばく待まちませ  
あさかのひめよしばく待ちませ

いたづらにわが思おもひねをつき通とほし  
いたづらにわがおもひねをつき通し

後あとにて悔くいます公きみを悲かなしむ  
あとにてくいますきみをかなしむ

御樋代みひしろの神かみと仕つかへてわれとても  
みひしろのかみとつかへてわれとても

心こころ苦くるしくけ長ながく待まちぬる  
こころくるしくけながく待ちぬる

汝なが心こころ吾われは知らぬにあらねども

神かみの許ゆるしのなきを恐おそる

兔とも角かくも高地たかちほ秀ほの宮居みやに歸かへりませ

汝なれが心こころのはやりいませば

落おちつきて身みの行ゆく末すゑを語かたらひつ

静しづかに静しづかにおこなはせませ  
静しづかに静しづかにおこなはせませ

朝香比女あさかひめの神かみは御歌みうたもて答こたへ給たまふ。

㊦  
ありがたし梅咲比女うめさくひめの神宣みことり

心こころに刻きざみて忘わすれざるべし

さりながら生命いのち消けぬまでこがれてし

岐美きみはわが身みに捨すて難がたきかも

百神ももがみはいかにわが身みをはかゆとも

恐れず行かむ駒に鞭うちて  
御樋代の神等宮居の司等

わが旅立ちを詳細に許せよ

いざさらば駒に跨り出で行かむ

すこやかにませ御樋代神等

と言ひつつ、再び駒に跨らむとし給ふにぞ、  
手握り給ひて、御歌詠ませ給ふ。  
壽々子比女の神は駒の轡をきびしく

吾とても岐美を戀ひつつ朝夕を

歎きて暮らす神魂なりけり

さりながら主の大神の許しなくて

これの聖所をはなるべしやは

汝が神の清き心のそこひまで

吾は悟れりとどむるも悲し

止めあへぬ涙かくして夜晝を

なげきし吾はかくもやつれし

さりながら神の依さしの重ければ

忍びて待ちぬ長の月日を

この度は思ひ止まり給へかし

牡丹の花も開き初むれば

爛漫と咲き匂ひたる櫻花も

夜嵐に散る世を思ひませ

愛善の紫微天界も永久に

花も梢のものならざらむ

立ちを止めむとして御歌詠ませ給ふ。  
宇都子比女の神は、駿馬の前にしとやかに立たせ給ひつつ、  
朝香比女の神の旅

春はるさりて夏なつはやうやく來向きむかへる

野のに若草わかぐさは萌もえさかりける

夏草なつぐさの萌もゆる聖所すがとを後あとにして

旅立たびだたす公きみの心こころあやしも

願ねがはくば暫しばしを待またせ主すの神かみの

やがて許ゆるしの下くだる日ひ來きたらむ

何事なにことも己おのが心こころのままにならば

吾われも黙もだして止とどまらざるべし

汝なが神かみの切せつなる心こころは悟さとれども

天界みくにのために吾われはとどめむ

大宮居おほみやに朝あさな夕ゆふなを仕つかへます

汝なれの勤つとめを汚けがし給たまふな

言靈ことたまの御樋みひしろ代神がみとつしみて

高地秀たかちほの宮居みやに暫しばし仕つかへませ

吾<sup>われ</sup>とても同<sup>おな</sup>じ思<sup>おも</sup>ひに泣<sup>な</sup>きながら  
忍<sup>しの</sup>びて宮<sup>みや</sup>居<sup>や</sup>に仕<sup>つか</sup>へゐるなり」

狭<sup>さ</sup>別<sup>わけ</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

☞ 朝<sup>あさ</sup>香<sup>か</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>かみ</sup>の神<sup>かみ</sup>言<sup>こと</sup>の出<sup>い</sup>で立<sup>た</sup>ちを

とどめむとする吾<sup>われ</sup>は苦<sup>くる</sup>しも

苦<sup>くる</sup>しさを忍<sup>しの</sup>びてとどむるわが言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>

うべなひ給<sup>たま</sup>へ朝<sup>あさ</sup>香<sup>か</sup>の比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>かみ</sup>よ

高<sup>たか</sup>地<sup>ち</sup>秀<sup>ほ</sup>の峰<sup>みね</sup>の櫻<sup>さくら</sup>は散<sup>ち</sup>り果<sup>は</sup>てて

野<sup>の</sup>は常<sup>とこ</sup>夏<sup>なつ</sup>の色<sup>いろ</sup>をそめたり

高<sup>たか</sup>地<sup>ち</sup>秀<sup>ほ</sup>の春<sup>はる</sup>のはじめの櫻<sup>さくら</sup>花<sup>はな</sup>も

はや散<sup>ち</sup>りにけり御<sup>み</sup>樋<sup>ひ</sup>代<sup>しろ</sup>神<sup>かみ</sup>の身<sup>み</sup>に

春<sup>はる</sup>過<sup>す</sup>ぎし花<sup>はな</sup>なき木<sup>き</sup>草<sup>くさ</sup>の如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>にして



花なる岐美と水火の合ふべき

夏草は所せきまで萌え出でぬ

汝が神すでに歳古りにける

歳古りし御樋代神は言靈の

もとゐとなりて天界を守れよ

吾も亦歳ふりし身よ言靈の

御樋代神となりて仕へむ

高地秀の宮居の名花を散らすかと

思へば惜しし公の旅立ち

花子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

花子比女花の姿はあせにけり

朝香の比女も斯くやましけむ

あさからぬ朝香の比女の志あさか ひめ こころざし

とどめむとして涙あふれつなみだ

顯津男の神の御後を訪ねむとあきつを かみ みあと たづ

思ほす公の心かなしもおも きみ こころ

顯津男の神は國土生み神生みのあきつを かみ くにう かみう

神業忙しく顧みたまはじわざいそが かへり

遙々と遠の山野をのり越えてはろばろ とほ やまぬ

無情に泣かす公を悲しむむじやう な きみ かな

村肝の心の駒を立て直しむらきも こころ こま た なほ

止まり給へ高地秀の宮居にとど たま たかちほ みや

小夜子比女の神は御歌詠ませ給ふ。さよこひめ かみ みうたよ たま

小夜更けし身ながら光の顯津男のさよふ み なら ひかり あきつを

神かみの御後みあとを訪とはす術すべなさ  
春はるさりて夏なつの夕ゆふべを旅たび立たす  
公きみを悲かなしとおもひて泣なくも  
□

朝香比女あさかひめの神かみは、決心けつしんの色いろを面おもに浮うかべて御歌詠みうたよませ給たまふ。

□  
神々かみがみのあつき心こころは悟さとれども

心こころの駒こまの足あ掻がき止やまずも

わが神魂みたま愛めぐしと思おぼし給たまはれば

許ゆるさせ給たまへ今日けふの旅たび立ちを

よしやよし曲まが神道かみみちにさやるとも

生言靈いくことたまになびけ進すすまむ

言靈ことたまの幸さちに生うまれしわれにして

言靈ことたまの水い火か輝かがかざらめや

駿馬はやこまのはやる心こころを貫つらぬきて

吾われは進すすまむ背せの岐美許きみがりに〚

天津女雄あまつめをの神かみは憚然ぶぜんとして歌うたひ給たまふ。

〚 朝香比女あさかひめの強つよき心こころは悟さとれども

今暫いましばらくを待またせたまはれ

比女神ひめがみの矢竹心やたけこころをおさへむと

百神等ももがみたちの眞心まごころかなしも

百神ももがみのやさしき心こころをよそにして

旅立たびだたむとする公きみぞつれなき〚

朝香比女あさかひめの神かみは矢も楯たてもたまらず、  
決然けつぜんとして鞭むちを右手みぎてに手握たにぎり、  
左手ひだりてに手綱たづな  
をささげながら御歌詠みうたよませ給たまふ。

「いざさらば百神等よ大宮居に

朝な夕なを仕へまませ

百神等の御旨にそむくと思へども

かたき心をわれ如何にせむ」

と言擧げしつ一つ鞭あててまつしぐらに夕闇の幕分けつ一つ目散に驅け出で給ふ  
ぞ是非なけれ。

(昭和八・一二・六 舊一〇・一九 於水明閣 谷前清子謹録)

## 第八章 善言美靈(一九二五)

ここに朝香比女の神は、顯津男の神を慕はせ給ふ心の駒の狂ひたちて足搔き止  
まねば、御樋代神等、宮司神等の心を籠め力を盡しての諫めも、空吹く風と聞き

流し、白馬に鞭うち、黄昏の空を東南指して駆け出で給ふぞ雄々しけれ。後に残れる御樋代神等は慨然として歎かせ給ひつつ、高地秀の宮居の聖殿に心靜かに歸らせ給ひて、朝香比女の神の旅の無事を祈らむと、種々の美味物を奉り、大御前に祈りの祝詞を奏上し給ひぬ。

先づ例の如く祭典の用意整ひたれば、鋭敏鳴出の神は宮居の司の務として、御自ら高御座の大前にひれ伏し、御聲爽かに太祝詞白し給ふ。

掛巻くも綾に畏き高地秀山の下津岩根に大宮柱太しき建て、高天原に千木高知りて、堅磐常磐に此の聖所を領有ぎ鎮まりいます主の大神の大御前に、齋主鋭敏鳴出の神、謹み敬ひ畏み畏みも白さく。如何なる神の經綸なるかも、如何なる神の計らひなるかも、御樋代比女神と神の依さしに朝な夕なを仕へましし、其が中の一柱とます朝香の比女神は、百神等の諫め止むる言靈をも聞かせ給はず、駿馬に鞭うち給ひて常闇の夕の空を、太元顯津男の神の御許に詣で仕へむと、心雄々しく出でましぬ。かれかくなりし上は、吾等が眞心もちて止めまつらむ由もなけ

れば、惟神に任せて、比女神の旅路を安らげ平けく渡らせ給へと祈るより外  
に詮術無かりければ、ここに神々相議りて、今日の御祭仕へまつると、海河山野  
種々の美味物を、八足の机代に横山なす置き足らはして、奉る状を、平けく安ら  
げく穩に聞き召しまして、朝香比女神の神が伊行き給ふ道の隈手も恙なく聖所に進  
ませ給へかし。過ち犯さむ事しあらば、神直日大直日に見直し聞き直し宣り直しま  
して、比女神の神言の立出に恙あらせじと、夜の守り日の守りに守り幸へ給へと、  
鹿兒自物膝折り伏せ宇自物頸根突貫きて畏み畏みも祈願奉らくと白す。一二三四  
五六七八九十百千萬、惟神靈幸倍坐世、惟神御靈幸はへまませよ  
高野比女神の神は御祭の庭に立たせ給ひて、御歌詠ませ給ふ。

□ 高地秀の貴の宮居に永久に

ます大神に願ごと白さむ

朝香比女神は夕べを立ち出でぬ

つつがあらずな道の隈手も

朝香比女は面勝神よ射向ふ神

わが言靈も聞かず出でましぬ

思ひ立ちし事を貫く朝香比女の

こころの駒は止め得ざりき

かくならば詮術もなし主の神の

あつき恵みにすがらむと思ふ

曲津神の伊猛り狂ふ荒野原を

進まず比女の身をあやぶみぬ

危ふかる旅の枕を重ねむと

朝香の比女は雄々しく出でませり

かくまでも其の心ばせを立て通す

朝香の比女は面勝神なり

御樋代神われは司と任せられて

詫びごと宣らむ言の葉も出で



わが心こころおろそかにして朝香比女あさかひめの  
こころを今いままで悟さとらざりしよ  
悟さとらざりしわが過あやまちを神直日かむなほひ  
大直日神おほなほひかみの宣のり直なほしませ〆

鋭敏鳴出うなりづの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

朝香比女あさかひめ神かみの雄々ををしき心こころばせを

われは氣付きづかず眠ねむらひにけり

豫かねてよりかくと定さだめし朝香比女あさかひめの

こころの駒こまは止とどめ得えざりき

朝香比女あさかひめ神かみの神言みことはまさしくや

射向いむかふ神かみなり面勝神おもかつがみなる

果はてしなき荒野あらのを一人出ひとりで立たたす

雄々しき比女をまもらせたまへ

曲津神は姿をいろいろ變へにつつ

比女の行方にさやらむとすも

曲津見の猛びは如何に強くとも

喪なく事なくすすませたまへ

八百萬神ましませど朝香比女の

雄々しき心は誰も持たなくに

梅咲比女の神は御歌詠ませ給ふ。

東南の荒野は山も高くして

初夏ながら春の氣漂はむ

白梅の花はあちこちに匂ひつつ

比女神の旅を慰むなるらむ

白梅しらうめの匂におへる山路やまぢを踏ふみわけて

白毛しろげの駒こまに鞭むちうたすらむ

主スの神かみの厚あつき恵めぐみに朝香比女あさかひめの

神かみはやすやす進すすませ給たまはむ

言靈ことたまの幸さちはひたすくる天界かみくにに

さやらむ曲津まがは必ずかなら亡ほろびむ

さりながら朝香あさかの比女ひめの草枕くさまくら

旅たびの苦くるしさわれにせまるも

朝夕あさゆふを神かみの御前みまへに祈いのらばや

朝香あさかの比女ひめに恙つつがなかれと

四方よもやも八方もに白梅しらうめ薫かをる春はるの野のを

心こころ豊ゆたかに立たち出いでますらむ〆

香具比女かぐひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

非時に香具の木の實の香りたる

紫微天界はにぎはしきかも

櫻花散り敷く庭の夕ぐれを

朝香の比女は一人立たせる

神々の誠をこめての言靈も

聞かさず立ちし比女神天晴れ

比女神の後姿見送りてわれはただ

故知らぬ涙ほとばしりぬる

今日を限り長の別れにならむかと

おもへば悲しくなみだぐまるも

大野原駒に鞭うち一人ゆかす

雄々しき比女の心いたまし

背の岐美をおもふあまりの旅立ちと

おもへばわれも悲しくなりぬ

神思かみおもひ岐美きみを慕したひて胸むねの火ひの

炎消ほのほけさむと出いでませしはや

燃もゆる火ひも溢あふる水みづもいとひなく

戀路こひぢのためには命惜いのちをしまさず

玉たまの緒をの命捧いのちささげし岐美きみゆゑに

かくもありけむ朝香比女あさかひめがみ神は

よしやよし曲津見まがつみのさやり繁しげくとも

つらぬき通とほせ公きみの眞心まじこころを

壽す々ず子こ比女ひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☞ 朝香比女あさかひめ道の隈手くまでも恙つつがなかれと

こころ清きよめて祈いのりけらしな

駿馬はやこまに鞭むちをうたせて出いで立たちし

比ひ女めの姿すがたは雄を々をしかりける

岐き美みおもふ心こころの征そ矢やを通とほさむと

駒こまにまたがり驅かけ出いで給たまひぬ

春はるさりて夏なつ來きたりける大野原おほのほらを

進すすます公きみのすがたしの俣ばゆ

昆蟲はふむしの災わざはひもなく高津神たかつかみの

さまたげもなく進すすみ給たまはれ

一ひと度たびは止とどめまつれど如何いかにせむ

かくなるうへはただに祈いのらむ

比ひ女めの進すすます道みちは安やすくあれ

高津鳥たかつとり等のらわざはひもなく

山やまを越こえ野のを越こえ溪川たにがは渡わたりつつ

出いで行ゆく公きみの雄を々をしきるかも

かくならば後あとに残のこりしわれわれも

比女神の旅を祈るのみなる』

宇都子比女神の神は御歌詠ませ給ふ。

高地秀の宮居の聖所を後にして

山河わたり比女神出でましぬ

數千里の旅の枕をかさねつつ

一人出でます比女神天晴れ

百神の神言の止めも聞かずして

雄々しも比女は出でましにける』

狭別比女の神は御歌詠ませ給ふ。

幾十日筑紫の宮居の旅をへて

間もなく比女神又旅に立てり

氣魂も神魂も強き比女神の

こころの駒を止むる術なし

幾千里荒野をわたり旅立たす

朝香の比女は雄々しき神なり

徒に月日送らむ苦しさに

朝香の比女は立ち出でにけむ

主の神の御許しもなくただ一人

立たせる朝香比女の神はも

朝香比女神の神言のとりしわざは

かへりて神に叶ふなるらむ

主の神の御旨に叶はぬわざなれば

朝香の比女の駒は走らじ

黄昏の闇を駆け出しし雄々しかる



すがたに神旨をわれはうたがふ

村肝の心照らして言靈の

水火清まらばすべてはならむも

朝香比女神はかならず顯津男の

神と御水火を合はせますらむ

西方の國土稚ければ御樋代の

神まさぬ世を悟らしにけむ

西方の國土の御樋代神となり

國魂神を生ます旅かも

西方の國土は黒雲立ちこめて

大曲津見の棲めるとぞ聞く

曲津見のほしいまなる振舞を

たださむとして出でましにけむ

朝香比女神は面勝神なれば

大曲津見もただになびかむ

かくの如雄々しき神はあらざりき

御樋代神は數多ませども

花子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

高た地か秀ちの峰ほの櫻みは早さや散ちりて

青あ葉をの園そとなりにけらしな

野のに山やに若わ葉か若わ草か萌ぐえ立たちて

夏なの御み空そは來きむかひにけり

青あ葉を萌もゆる山や河ま渡はり駒この背せに

乗のりて出いでます朝あ香さ比か女ひはも

朝あ香さ比か女ひ神かはかならず曲ま津が見つの

猛たびけにくるしみ給たふまなるらむ

朝香比女あさかひめ旅たびの惱なやみをおもひつつ

腮邊しへんにつたふわがなみだかな

西方にしかたの國土くには黒雲くろくも立ちこめて

スウヤトゴルの曲津まがは火ひを吐はく

非時ときじくに黒雲くろくもむらむら立ち上たり

御空みそらをつつむ西方にしかた小暗をぐらき

月つきも日ひも星ほしもかげなき西方にしかたの

國土くに造つくるべく出いでましにけむ

朝香比女あさかひめ神かみの雄々をしき心こころばせを

われは朝夕あさゆふ悟さとり居ゐしはや

かくの如思ごとひきりたる草枕くさまくら

旅たびにたたすをうべよと思おもへり

今いまとならば止とどめむよしもなきままに

恙つつがなかれと祈いのるのみなる

朝香比女功を太しく建てまさば

御樋代神のほまれなるかも

八柱の御樋代比女神の中にして

雄々しき神の出でますは嬉し

小夜子比女の神は御歌詠ませ給ふ。

丹牡丹の花はくづれて庭池の

菖蒲の紫匂ひ初めたり

大庭の瀬見の小川にかけうつす

菖蒲の花のつやつやしかも

菖蒲咲くころの聖所を後にして

朝香の比女は旅立たしける

朝香比女は燃ゆる心の苦しさに

菖蒲も目にはうつらざりけむ

庭の面に咲ける菖蒲や燕子花

何れをそれと別ち兼ねつつ

朝香比女の今日の旅立ちよしあしの

あやめもわかずわれは黙さむ

何事も主の大神の御心に

任すは眞のつとめなるらむ

如何ならむ太しき功たつるとも

御神の御許しなきは仇なり

主の神の生言靈に依らずして

われは進まむ雄心起らず

徒に長き月日を送りしと

思ふは心のひがみなりしよ

朝夕に神に仕へて祝詞宣るは

御樋代神のつとめなりける

地稚つちわかきこの天界かみくにを固かためむと

御樋代神みひしろがみをう生うましし神かみはや

御子みこ生うみの神業わざはさておき言靈ことたまの

御樋代みひしろとして生あれ出いでしならむ

かくならば朝あさな夕ゆふなに世よの爲ために

御樋代神みひしろがみは言靈ことたま宣のらばや

一日ひとひだも生言靈いくことたまをおこたらば

亂みだるる世よなりと悟さとらひにけり  
㊦

天津女雄あまつめをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 御樋代みひしろの比女ひめが神等みたちに従したがひて

珍めづしき事ことを見聞みききするかも

眞心まごころを筑紫つくしの宮居みやゐあとにして

高地秀たかちほの宮居みやに仕つかへつるかも

朝香比女神あさかひめかみの旅立たびだち送りおくつつ

雄々ををしき姿すがたに見みとれけるかな

かくの如ごと雄々ををしき神かみにいますとは

愚おろかしきわれは悟さとらざりしよ

この上うへは朝あさな夕ゆふなを大宮居おほみやに

祈いのりて比女ひめの幸さちを守まもらむ

西方にしがたの國魂神くにたまがみを生まうますべく

雄々ををしく一人ひとり出いでましにけむ

今いまとなりて悔くやむも詮せんなし眞心まごころを

持もちて祈いのらむ神かみの御前みまへに〇

かくの如ごとく、神々かみがみは大宮居おほみやの前まへに比女神ひめがみの無事ぶじを祈いのりつつ各自おのもおの述懐もじゆつくわい歌うたをうたひ

て、靜かに定め居間に就かせ給ひける。

(昭和八・一二・六 舊一〇・一九 於水明閣 林彌生謹録)

第三篇 孤軍奮闘

第九章 闇の河畔 (一九二六)

別れて程經し背の岐美の  
戀ふる心の矢も楯も  
神の神言は唯一騎  
太元顯津男の神を  
たまらぬままに朝香比女  
高地秀山を後にして



白馬の背に鞭うちつ

櫻の花の風に散る

夕べの空をしとしと

諸神の諫言もきかずして

進ませ給ふ旅の空

道の隈手にさやりたる

八十曲津見を悉く

生言靈に打ち拂ひ

駒の蹄に踏み躪り

初心を貫徹せむものと

勇み進むで出で給ふ。

闇の幕はますます深く大地一面を包み、  
悽慘の氣四方に漂ふ。  
朝香比女の神は、とある河畔に着き給ひ、  
闇の流れに駒を水飼ひながら、  
聲も  
ひそかに歌はせ給ふ。

☪ 天晴れ天晴れ

わが背の岐美は今いづこ

たづねいゆくも夏の夜の

月空つきそらになく星ほしかげは

御空みそらの雲くもに包つつまれて

あやめもわかぬ眞しんの闇やみ

河かはの流ながれはしろじろと

北きたより南みなみに光ひかりつつ

せせらぎの音おとひそひそと

囁ささやく聞きけば淋さびしもよ

果はてしも知らぬ大野原おほのはら

心こころは闇やみにあらねども

岐美きみを慕したひし眞心まごころの

つもりつもりで常闇とこやみと

なりにけるかも今日けふの旅たび

うま怜まらに委曲つばらに照てらしませ

高地秀山たかちほやまの聖場せいぢやうに

ながとしつきつか  
長き年月仕へたる

あさかひめがみ  
われは朝香比女神よ

おほみかみこころ  
主の大御神心あらば

かは  
この河やすやす渡しませ

せんりこま  
千里の駒は嘶けど

ふかあさ  
深き浅きもしらなみの

こすべ  
越す術もなき闇の河

まもたま  
守らせ給へ惟神

かみめぐ  
神の恵みを乞ひ奉る。

とこやみかはべ  
常闇の河畔にたちて思ふかな

こひこころ  
戀にくもれる心の闇を

ひとすぢ  
一條の闇を縫ひつつしるじると

流るる水瀬はわれに似たるも

星かげもなき闇の野を馳せて行く

駒の蹄の音を力に

かくならば駒の嘶き力にて

進むむほかはなかりけらしな

天界に闇と夜とのなかりせば

わが旅立ちも安けからむを

小夜更けて眠らむとすれど眠られぬ

心の駒のはやりたつれば

廣々と果てしも知らぬ荒野原を

辿るも岐美を戀ふるが爲なり

闇よ闇早く去れかし朝津日よ

はや昇れかしわれを守りて

すいすいと闇を縫ひゆく螢火の

燃ゆるおもひを消さむ術なし

螢火も瑞の御靈を慕へるか

岸の小草にかすかに光れり

初夏の夜は更けにけりわが袖を

吹く風さへも涙にしめりつ

萬斛の涙流るる闇の夜の

河瀬にたちて燃ゆる螢火

如何にしてこの闇の河を渡らむと

思へば悲しはてなきおもひに

かく御歌詠ませ給ふ折しもあれ、八十曲津見は青白き大火團となりて、河下よ  
り長き尾を引きながら、闇の空に波を打たせつつ進み來る。

朝香比女の神は、曲津見の神御座むなれと、兩手を組み合せ水も漏らさぬ身構

へしなから、

□ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

百 千 萬 千 萬 の 神

曲 津 の 怪 し 火 退 け 給 へ

と 祈 り 給 へ ど、 火 團 は 何 の 頓 着 も な く、 朝 香 比 女 の 神 の 傍 近 く 進 み 來 り、 四 邊 を  
眞 畫 の 如 く 照 ら し な が ら、 忽 ち 目 一 つ 口 八 つ の 怪 物 と な り、 比 女 神 に 向 つ て そ の  
口 よ り は 各 自 巨 大 な る 蜂 を 吐 き 出 し、 比 女 神 の 身 邊 目 が け て 嚙 み つ か む と す る に  
ぞ、 駒 は 驚 き て 前 後 左 右 に 跳 ね ま は り、 忽 ち 河 中 に ざ ん ぶ と 飛 び こ み、 水 底 深 く  
沈 み け る。 朝 香 比 女 の 神 は 氣 丈 の 女 神、

□ 御 樋 代 の 神 と 仕 へ し わ れ な る ぞ

さ ま た げ す る な 八 十 の 曲 津 見

主 の 神 の 御 水 火 に 生 り し 天 界 に

何 を さ や る か 退 け 曲 津 見

われこそは朝香の比女神言靈の  
水火足らひたる面勝神ぞや

かく御歌詠ませ給へども、怪物は容易に去らず、益々無数の蜂を吐き出し、比女神の全身を襲はむとするにぞ、比女神はここに一計を案じ、懐より燧と石を取り出し、曲津見に向つてかちりかちりと打ち給へば、忽ち迸り出づる眞火の光りに驚きにけむ、怪物の姿は煙と消えてあとかたもなく、かすかに野を吹く風、せせらぎの音聞ゆるのみ。

この光景を見て朝香比女の神は、勇氣日頃に百倍し、燧を懐に納め、両手を合せ、天に向つて感謝の御歌詠ませ給ふ。

主の神の恵み畏し曲津見は  
眞火の力に消え失せにけり  
曲神の醜の猛びをやらひましし

主スの大神おほかみの御稜威みいづを感謝みやひす

わが駒こまは河かはの底そこより現あらはれぬ

醜しこの曲津まがつの消え失うせしより

水底みなそこを潜くぐりてかしこき駿馬はやこまは

蜂はちのなやみを免まぬかれしはや

幾いくせんまん千萬の蜂はちとなりたる曲津見まがつみの

拙つたなき業わざは眞火まひに亡ほろびぬ

東ひむがしの空そらはやうやくしののめぬ

新あたしき日は昇のぼりますらむ

新あたしき日光ひかげを浴あびて曲津見まがつみの

伊いたけ猛たくり狂くるふ野路のぢを進すすまむ

常闇とこやみの眞夜まよを曲津見まがつみに襲おそはるも

岐美きみを戀こふるが爲ためなりにけり

背せの岐美きみにあはむ日ひあらば幾萬いくまんの



曲津見の妨げわれは恐れじ  
玉の緒の命捧げし背の岐美の  
爲には如何なるなやみも恐れじ  
岐美戀ふる心は炎と燃えたちぬ  
河の流れの底あするまで

かく御歌うたひ給ふ折しも、  
の神は悠々と昇らせ給ひける。  
鵲の聲かすかに響き、  
高照山の谷間より、  
天津日

曉を告ぐる鵲の聲清く  
響きわたれり狭葦の河畔に  
閻の幕大野の奥にしりぞきて  
天津日かけは昇らせ給へり  
かくならばわれは恐れじ底深く

碧める河も安く渡らむ<sup>□</sup>

かく歌ひつつ駒の背にひらりと跨り、駒の腹帯をゆるめ、鬣をしつかと掴み、  
駒諸共に水底深き激流を、流れ渡りに彼方の岸にやうやうにして着き給ひける。  
すべて深き流れを駒にて渡る時は、腹帯をゆるめ、駒を水中に飛び込ませ、鬣  
を片手に握り、駒も騎手も共に水中に浮き、泳ぎ渡るを以て、水馬の法となすも  
のなり。

朝香比女の神は水馬の法を深く覺り給ひければ、かくの如き方法をもちて、無  
事彼岸に着かせ給ひけるなり。

□ われも駒も無事に狭葦河渡りけり

水馬のわざの今あらはれて

玉鞍も手綱も鞭も濡れにけり

暫し休らひ日に干さむかも

罪つみのなき獸けものなるかもやすやすと

岸邊きしべの草くさをむしりゐるとは

駿馬はやこまの食くふべき餌ゑさは満みち満みちぬ

草くさもて命いのちつなく身みなれば

われもまた主スの大神おほかみの水い火き吸すひて

長ながき命いのちを保たもちけるはや

玉たまの緒をの命いのちの糧かては言こと靈たまの

清きよけき水い火きの幸さちはひなりける

あけぬれば八十やその曲津まがつの影かけもなく

蟲むしの音ね清きよく冴さえわたるなり

鵲かささぎはあしたをうたひ眞まなづる鶴は

天界かみよを祝ことほ言ことぐ狭葦河さあかはのほとりよ

名なも知しらぬ草くさにいろいろ花はな咲さきて

狭葦さあの河瀬かはせの水みづかをるなり

高地秀の山の尾の上に雲わきぬ

宮居の神たち如何ますらむ

わが立ちし後の宮居に百神は

伊寄り集ひて言議りますらむ

西方の國土は遙けしわが駒は

萬里の駒とおもへど淋しき

曲神の雄猛び狂ふ荒野原を

一人進むも岐美戀へばなり

大空はただ一片の雲もなく

わが旅立ちをあかして澄めり

駒の鞍漸く乾きはてぬれば

手綱握りてまたも進まむ

ここに朝香比女の神は、再び駒の背に跨り、  
青草萌ゆる大野ヶ原を、あてども

なく東南とうなんさして進すすませ給たまひける。

（昭和八・一二・七 舊一〇・二〇 於水明閣 白石惠子謹録）

第一〇章 二本松にほんまつの蔭かげ（一九二七）

見渡みわたす限かぎり夏草なつぐさ萌もゆる大野おほのヶ原がはらの露つゆを駒こまの蹄ひづめに踏ふみくだきながら、朝香あさか比女ひめの  
神かみは馬ば上じやう豊ゆたかに、小聲ここゑに御歌みうた吟ぎんじつつ進すすませ給たまふ。

ㄣ 丹牡にぼたん燃もゆる高地たかちほ秀ほの

宮居みやの聖所すがとを立たち出いでて

駿馬はやこまの背せに跨またがりつ

果はてしも知しらぬ大野原おほのほら

進すすみて來きたる折をりもあれ

霞かすみただよふ野のの果はてに

ひとり淋さびしも天津あまつ日ひかげは地ちにかくれ

黄昏たそがれの幕まくはおそひ來きぬ

駒こまの脚あしなみ竝なみいそいそと

とある河邊かはべに着つきぬれば

闇やみはますます深ふかみつつ

ただ一條ひとすぢの河瀬かわせの色いろは

闇やみに白々しろじろよこた横よこたはり

せせらぎの音幽おとがすかに響ひびく

かかる淋さびしき河かはの邊べに

駒こまに跨またがり佇たたずめる

折をりしもあれや曲津まがつみ見みは

火玉ひだまとなりて河下かはしもゆ

闇やみを照てらしつ迫せまり來くる

よくよく見れば火の玉は

眼一つに口八つ

各自に口開き

巨大の蜂を吐き出し

吾と駒とを襲ひければ

駒はかしく水中に

身ををどらして飛び込みつ

蜂の禍のがれける

妾は言靈宣り上げて

神を祈りつ燧石

かちりかちりと打ち出せば

忽ち眞火はほとばしり

あたりを照らす功績に

さすが曲津見恐れ出し

煙けむりとなりて消きえ去さりぬ

折をりしもあれや東ひむがしの

空そらはほのぼの東しのの雲のめて

鶺鴒かささぎの聲こゑさわやかに

蟲むしの音ね清きよく朝あさ風かぜは

おもむろに大野おほのヶ原がはらを吹ふき

せせらぎの音おとさやさやに

響ひびき渡わたれる曉あかつきの

空そらより昇のぼる天津あまつ日は

光ひかりの限かぎりを光ひからせつ

草葉くさばの露つゆを玉たまと照てらし

中天ちうてん高たかく昇のぼります

ああかむながらかむながら惟かむながら神かむながら々々

高地たかちほやま秀山たを立いち出いでて



初<sup>はじ</sup>めて遇<sup>あ</sup>ひし曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>の  
曲<sup>まが</sup>の禍<sup>わざはひ</sup>追<sup>お</sup>ひ拂<sup>はら</sup>ひ  
極<sup>きは</sup>みも知<sup>し</sup>らぬ夏<sup>なつ</sup>の野<sup>の</sup>を  
吾<sup>われ</sup>ただ一<sup>ひとり</sup>人<sup>り</sup>進<sup>すす</sup>むなり  
わが背<sup>せ</sup>の岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>は今<sup>いま</sup>何<sup>いづ</sup>處<sup>こ</sup>  
一<sup>ひと</sup>日<sup>ひ</sup>も早<sup>はや</sup>く巡<sup>めぐ</sup>り逢<sup>あ</sup>ひ  
積<sup>つも</sup>る思<sup>おも</sup>ひの數<sup>かず</sup>々<sup>かず</sup>を  
岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まへ</sup>に打<sup>う</sup>ち開<sup>あ</sup>けて  
日<sup>ひ</sup>頃<sup>ごろ</sup>の戀<sup>こひ</sup>の意<sup>い</sup>地<sup>ぢ</sup>を立<sup>た</sup>て  
水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>と水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>とを合<sup>あ</sup>せつつ  
神<sup>かみ</sup>の依<sup>よ</sup>さしの神<sup>かむ</sup>業<sup>わざ</sup>に  
仕<sup>つか</sup>へ奉<sup>まつ</sup>らでおくべきか  
吾<sup>われ</sup>は女<sup>め</sup>神<sup>がみ</sup>の身<sup>み</sup>なれども  
御<sup>み</sup>樋<sup>しろ</sup>代<sup>がみ</sup>神<sup>み</sup>と選<sup>えら</sup>まれし

主スの大神おほかみが國くに土に生うみの

貴うづの器うつはぞ寶たからぞや

鶴つるは御空みそらに舞まひ遊あそび

小鳥ことりは天界みよの春はるうたひ

千草ちぐさにすだく蟲むしの音ねは

わが出いで立たちを壽ことほぎつ

駒こまの嘶いななき勇いさましく

風かぜの響ひびきも冴さえきりて

わが行ゆく野邊のべは廣ひろ々と

果はてしも知しらぬ主スの神かみの

御稜みいづ威こを此處ここにあらはせり

ああ惟かむながら神かむながら々々

榮城さかきの山やまも近ちかづきぬ

駿馬はやこまの蹄ひづめ休やすめて今いましばし

吾も憩はむ常磐樹の  
二本竝ぶこの樹蔭

と歌はせつつ駒をひらりと飛び下り、  
二本松の樹下に暫しを休らひ給ふ。

久方の御空は高し野は廣し

その眞中をわれ一人行くも

國土稚き大野を駒に跨りて

行くはたのしも岐美を力に

目にさはるもの一つなき廣野原に

珍しきかも二本の松

二本の松の樹蔭に休らへば

御空に低う田鶴の舞ふなり

この松は梢こもれり眞鶴の

翼つばさ休やすむる聖すがと所ところなるらむ

駿馬はやこまは青草あをぐさむしりわれは今いま

生言靈いくことたまの水みづ火かを吸すふなり

天界かみくにに生うまれて清きよき言靈ことたまの

水みづ火かを吸すひつつ生いくる吾われなり

百草ももぐさの花はなはいろいろ咲さき満みちて

わが行ゆく道みちを飾かざりたつるも

種々くさくさの花はな咲さき匂におふ大野原おほのほらに

暫しばしやすらひ岐美きみの歌詠うたよまむ

顯津男あきつをの神かみの神言みことの瑞御靈みづみたま

あつき心こころのわれには解とけむ

冬ふゆの日ひの氷こほりの如ごとく堅かたくとも

熱ねつには解とける瑞御靈みづみたまかも

御子みこ生うみの神業みわざに仕つかふる岐美故きみゆゑに

わが伊行くとも辭みたまはじ

おほらかに御樋代神と名乗りつつ

われは仕へむ岐美の御前に

その岐美の在處は未だ知らねども

矢竹心のかよはざらめや

高地秀の貴の宮居を立ち出でて

一人旅すも岐美に逢はむと

曲津見の醜の荒びを言むけて

岐美に會はむとわが來つるかも

よしやよし萬里の遠きにいますとも

たづね行かなむ眞心の駒に

わが駒は歩みも速し幾萬里

彼方の空もやすく進まむ

二本の常磐の松の蔭に立ちて

岐美と吾とのすがた見るかな

一本は雄松なりけり一本は

わが身に似たる雌松なるかも

落ち散りし松の一葉も二本の

鉢葉は堅くはなれざりけり

廣々と果しも知らぬ野の中に

生ふる二本の松めづらしも

雌雄の松梢手折りてわが髪に

かざし進まむ遠き大野を

わがかざす松の梢は岐美がりに

誓ひまゐらすしともがな

わが行手祝ひて舞ふか眞鶴は

頭上を高くつばさ搏つなり

安らかにあるべき身ながら戀故に

われは萬里の旅に立つかも

廣々と果しも知らぬ天界を

一人の岐美に會はむと行くかも

わが戀は御空の如くはるけかり

月讀の舟のそれならなくに

比女神の固き心は岩ヶ根も

貫かずしておくべきものかは

いざさらば再び駒に跨りて

萬里の廣野を駆け行かむかも

斯く歌ひ給ひ、ひらりと駒に跨り、  
御空に輝く日の御光を仰ぎながら、またも

や御歌詠ませ給ふ。

高照の山の尾の上を出でし日は

わが頭邊にかがやき給へり

高地秀の峰に沈ます頃ほひは

榮城の山にわれは進まむ

なつかしき榮城の山よわが岐美の

祈りたまひし聖所と思へば

榮城山尾の上の宮居に詣でつつ

岐美の行方をうかがはむかも

南の國土を巡りて西方の

國土にいますと便りは聞けども

西方の國土には御樋代神あらず

われは進みて神業に仕へむ

スウヤトゴルの大曲津見は黒雲と

なりて日に夜に猛ぶとぞ聞く

背の岐美を悩ます醜の曲津見を



吾<sup>われ</sup>はやらはむ眞<sup>ま</sup>火<sup>ひ</sup>の功<sup>いさを</sup>に

鋭<sup>う</sup>敏<sup>なり</sup>鳴<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>の神<sup>みこと</sup>言<sup>を</sup>の教<sup>をし</sup>へたる

眞<sup>ま</sup>火<sup>ひ</sup>の力<sup>ちから</sup>に刃<sup>は</sup>向<sup>む</sup>ふ曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>なし

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>見<sup>み</sup>に向<sup>むか</sup>ひてこよなき武器<sup>ぶき</sup>こそは

燧<sup>ひうち</sup>の眞<sup>ま</sup>火<sup>ひ</sup>にまさるものなし

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>見<sup>み</sup>は陽<sup>やう</sup>火<sup>くわ</sup>をおそれ陰<sup>いん</sup>火<sup>くわ</sup>もて

國<sup>くに</sup>津<sup>つか</sup>神<sup>かみ</sup>等<sup>たち</sup>を惱<sup>なや</sup>ましをるかも

そよそよと吹<sup>ふ</sup>き來<sup>く</sup>る風<sup>かぜ</sup>も芳<sup>かむ</sup>ばしき

榮<sup>さか</sup>城<sup>き</sup>の山<sup>やま</sup>の千<sup>ち</sup>花<sup>ばな</sup>のかをりか

由<sup>ゆ</sup>縁<sup>かり</sup>ある榮<sup>さか</sup>城<sup>き</sup>の山<sup>やま</sup>に驅<sup>か</sup>けつけて

岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の御<sup>み</sup>後<sup>あと</sup>を偲<sup>しの</sup>びまつらむ

榮<sup>さか</sup>城<sup>き</sup>山<sup>やま</sup>遠<sup>とほ</sup>野<sup>の</sup>の奥<sup>おく</sup>に霞<sup>かす</sup>みたり

ひと鞭<sup>むち</sup>あててわれ急<sup>いそ</sup>がばや

斯く歌はせ給ひつつ、遙の空にぼんやりと霞む榮城の山を目當に、其の日の黄  
昏れる頃、朝香比女の神は安々と着かせ給ひける。榮城山の神々は御樋代神出で  
ますと、雁の便りに聞き知りまして、山麓に横はる細溪川の岸邊まで出迎へ給ふ。  
其の神の御名は機造男の神、散花男の神、中割男の神、小夜更の神、親幸男の神  
の五柱にして、何れもウ聲の言靈より生り出で給ひし神々におはせり。

(昭和八・一二・七 舊一〇・二〇 於水明閣 内崎照代謹録)

## 第一章 榮城の山彦(一九二八)

千里の荒野を涉りて、朝香比女の神は榮城山の麓に、新月の輝く黄昏時漸く着  
き給へば、榮城山の宮居に仕ふる五柱の神々は、高地秀山の宮居より遣はし給ひ  
たる雁の御文によりて前知し給ひ、賑々しく比女神を迎へ給ふ。  
朝香比女の神は諸神に向ひ、御歌詠ませ給ふ。

☐ 顯津男の神の由縁の御跡と聞く  
榮城の山はこれの聖所なりや  
夕月の光はさやかに山の端に  
かかる夕べを吾來つるかも

茲に機造男の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 名に高き高地秀の宮居の八柱の  
比女神にますかよくも來ませり

雁の文の便りを見しわれは  
公の出でまし迎へまつるも

瑞御靈由縁の深き榮城山の  
月の光はことさらによし

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 新月の光を爽けみ吾はいま

榮城の山にたづね來にけり

榮城山尾の上の松の色深み

さす月光はいよよ爽けし

八柱の御樋代神の位置を捨てて

岐美に會はまく長の旅すも

榮城山に今宵一夜の宿からむ

天渡る日も地に沈めば

鶏の尾の長き旅路に駿馬も

疲れ果てたり宿をたまはれ

機造男の神は、答の御歌詠ませ給ふ。

☐ 御言葉みことばを聞きくも畏かしこし八柱やはしらの

御樋代比女神みひしろひめがみやす安やすくましませ

禊川みそぎがはなが流ながる水みづの底そこ清きよみ

利鎌とがまの月つきは浮うかばせたまへり

月讀つきよみの御靈みたまと生あれし瑞御靈みづみたまの

御樋代比女神みひしろひめがみよくも來きませるよ

比女神ひめがみの來きませる今日けふは月光つきかげも

一ひとしほ冴さえて風かぜ澄すみきらふ

榮城山さかきやま今日けふの吉日よきひを限かぎりとし

この國原くにはらは安やすく榮さかえむ ☐

散花男ちるはなをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 春去はるさりて峰みねの櫻さくらも散花男ちるはなをの

神はみどりの公を迎へむ

初夏の景色ただよふ榮城山に

花なる公は出でましにけり

雁の便り見しより朝夕を

公の出でまし待ち侘びにけり

久方の高天原の大宮居ゆ

天降り給ひし朝香比女神天晴れ

輝ける朝香比女神の粧ひは

月さへ花さへ及ばざるべし

初夏の夕べの風はすすやかに

榮城の山の常磐樹ゆすりつ

常磐樹は勇み悦びさゆれつつ

花なる公のすがた待ち居り

潺々と流るるきよき禊川に

花なる公のすがた浮べる  
只さへも清きが上に眞清水に  
うつろふ公の御姿うるはし

中割男の神は御歌詠ませ給ふ。

天地の中を割男の神なれば

公の行手を守りまつらむ

楔川山と大野の中割きて

雄々しく清しくたぎち流しつ

駿馬のいななき高く草の生ゆ

聞ゆと見れば公は來ませる

兔も角も休ませたまへ長旅の

疲れ給ひし身を横たへて

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

□  
ありがたし百神等の眞心は

幾世経るとも吾は忘れじ

草枕旅を重ねて情ある

神の言葉に涙しにけり

ともかくも吾はさて置き駿馬の

褥と餌を與へたまはれ

小夜更の神は御歌詠ませ給ふ。

□  
掛巻も綾に畏き御樋代の

神を迎ふる今日のうれしさ

吹く風も非時かをる榮城山の



これの聖所は常安の國土よ  
果しなき荒野をわたりはるばると

來ませる公の雄々しさ思ふ  
曲津見の伊猛り荒ぶ荒野原を

わたり來し公の雄々しくもあるか  
輝けるその御姿にもるもるの

醜の曲津は影かくしけむ

親幸男の神は御歌詠ませ給ふ。

顯津男の神の神言を蒙りて

われ大宮居に仕へ來にけり  
榮城山尾の上に清しく立つ宮居は

主の大神の神靈祀れる

顯津男の神の神勅乞ひましし

榮城の山は聖所なりけり

由縁ある朝香の比女の出でましに

榮城の山は笑みさかえぬる

常磐樹の松に巣ぐへる眞鶴も

公の出でまし壽ぎてうたへり

朝香比女の神は駒の背よりひらりと下り給ひ、  
楔川に暫し楔を修し給ひ、  
五柱の神に守られて、  
榮城山の中腹なる神々の御憩所に入らせ給ひ、  
長途の旅の疲れを休ませ給ひつつ、  
述懐歌をうたはせ給ふ。

八柱の御樋代神と選まれて

われは空しく年を経にける

はろばると萬里の荒野を打ちわたり

天津高日の宮居に詣でし

久方の筑紫の宮居に詣でてゆ

わが行く道を悟らひにけり

はるばると高地秀の宮居に歸り來て

ますます心は落付かざりしよ

永久にわが仕ふべき宮居ならずと

駒に鞭うち離り來にけり

七柱御樋代神はわがために

神の御前に祈りたまはむ

村肝の心かためし吾にして

始めの心かへすべきやは

常闇の狭葦の河瀬を渡らむと

八十の曲津に出で會ひにける

言靈の力の限り宣りにつつ

眞火打ち出づれば曲津は消えたる

天津日の光を浴びて大野原

駒に跨り此處に来つるも

背の岐美に由縁の深き榮城山の

夕べは心清しくなれり

此處に来て旅の疲れを忘れけり

百神等のあつき心に

駿馬の嘶き聞えずなりにけり

やすやす旅の夢結ぶらむ

背の岐美の行方は何處か知らねども

わが眞心に逢はまくおもふ

榮城山これの聖所に来て見れど

岐美のおとづれくちなしの花

くちなしの花の香れる夕暮の

これの聖所にもの思ふかな  
御子生みの神業に仕ふる御樋代の

比女神われは心さわぐも

猛り狂ふ心の駒を鎮めむと

思へど詮なし燃ゆる戀路に

榮城山樹々の葉末に置く露も

月の御靈を宿してかがよふ

御樋代の比女神われに月讀の

露の宿らぬためしあるべき

日を追ひて廣がりて行く月かけを

見つつ楽しき旅に立つかも

八柱の御樋代神の高き位置を

戀ゆゑ吾は捨てて來にけり

八十比女の御樋代神と下るとも

心こころ足たらへり岐き美みにし逢あへば  
』

機はた造つくり男をの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ はろばると來きませる公きみを犒ねぐはむ

術すべなき今こよひ宵ゆを許ゆるしたまはれ

まきて來こし背せの岐き美み此こ處こに坐まさずして

淋さびしかるらむ御み樋ひ代しろ比ひ女め神がみは

村むら肝きもの心こころのかぎり身みのかぎり

盡つくして比ひ女めを犒ねぐはむとぞ思おもふ

地つち稚わかき榮さか城きの山やまよ比ひ女め神がみを

慰なぐさむるものなきが嘆うたてき  
』

朝あ香さ比か女ひめの神かみは答いらへの御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 恐れおほき神々等の言靈よ  
おそ われ かがみたち ことたま

吾は感謝の言葉も知らずに  
われ みやひ ことば し

此處に來て始めて心落付きぬ  
ここ きて はじ ころおちつ

榮城の山の松のみどりに  
さかき やま まつ

楔川清き流れに浮びます  
みそぎがはきよ なが うか

夕月の光によみがへりける  
ゆふづき かげ

大空も水底も月の光冴えて  
おほぞら みそこ つき かげさ

わが旅立ちを慰むるかな  
たびだ なぐさ

大空の月の御靈ゆ出でましし  
おほぞら つき みたま い

わが背の岐美を思ふ宵はも  
せ き み おも よひ

幾萬里の遠きに岐美はおはすとも  
いくまんり とほ き み おはすとも

魂の限りはまぎて行かなむ  
たま かぎ い

散花男の神は歌詠ませ給ふ。  
ちるはなを かみ うたよ たま

『榮城山峰の白梅櫻花』

漸く散りて牡丹は匂へり

紅の牡丹の花に置く露は

紅き心の現はれなるかも

山姫は牡丹の花を紅に

染めて夏衣纏ひたまへり

早夏の陽氣ただよふこの山に

あつき心の公をむかへつ

月ははや榮城の山の後手に

隠るひまして闇はせまれり

大空にまたたく星の光清み

森に聞ゆる梟の聲

濁りたる聲にはあれど梟の

啼けるを聞けばゆかしくぞ思ふ』



中割男の神は御歌詠ませ給ふ。

大宮居に仕へて幾年経ぬれども

今日の輝き未だ見ざりき

きらきらと光らせ給ふ比女神の

姿まぶしくおはしますかも

明けぬれば榮城の山の頂上の

宮居の聖所に導きまつらむ

仰ぎ見れば北より南に横はる

天の河原にさざなみもなし

金砂銀砂輝き渡る天の河の

今日の姿のうるはしきかな

野邊を吹く風は薰れり百草に

咲きつる花のかをり運びて

榮城山さかきやま花はなは散ちれども常と磐きは樹ぎの

松まつのしたびにつつじ咲さくなり

晝ひるされば紫むらさきつつじ紅べにつつじ

石しやく南な花げのはな木こ蔭かげににほへり

明あけぬれば松まつのこ木したのも百も花ばなを

手た折をりて公きみにまゐらせむと思おもふ

小さ夜よ更ふけのか神みは御み歌うた詠よませ給たまふ。

榮城山さかきやま小さ夜よ更ふけにふけり梟くろの

啼なく音ねも頓とみにし静じつまりしはや

眞ま鶴なづるはこ聲ゑをひそめて休やすらひぬ

比ひ女め神がみさらば寢ふ床しどにいりませ

親幸男の神は御歌詠ませ給ふ。

この館は吾等が休む小家なれば

導きまつらむ離れの宮居に

新しく造り備へて比女神の

出でまし待ちし御殿なりせば

斯く歌ひて、親幸男の神は朝香比女の神の御手を取らせつつ、新殿に導き給ひける。茲に朝香比女の神は長旅の疲れに前後も忘れて夜の明くるまで、御水火も静に安らかに御寝ましにける。

(昭和八・一二・七 舊一〇・二〇 於水明閣 森良仁謹録)

第一二章 山上の祈り(一九二九)

朝香比女の神は榮城山の中腹に、神々の心により新しく建てられたる八尋の殿  
に旅の疲れを休めむと、初夏の一夜を明し給ひけるが、曉を告ぐる山鳥の聲に眼  
を醒ませ給ひ、靜に床を跳ね起き給ひて、髮のほつれをととのへ、白き薄き衣  
を纏ひ給ひつつ、居間の窓を押し開き給へば、榮城の山の朝風は颯々として芳ば  
しく吹き入り、展開せる大野の原に棚引く霧は、陽光に映じて得も言はれぬばか  
りの美しき眺めなりける。伽陵頻迦は木の間に囀り、眞鶴は松の茂みに曉を歌ふ。

見渡せば遠の大野に霞立ちて

そよ吹く風も初夏を匂へり

榮城山松吹く風の音も冴えて

梢にうたふ眞鶴愛ぐしも

白梅の花はなけれど鶯の

聲のさえたる榮城山はも

長旅の疲れやすみて吾は今

八尋の殿に國土見するかも  
常磐樹の松の下びに咲き匂ふ

つつじの花の目出度くもあるか

石南花の花桃色に咲きにけり

小さき鳥の來りてあそべる

背の岐美の御後したひて吾は今

榮城の山に安居するかも

百神のあつき心にほだされて

榮城の山に一夜いねけり

その昔わが背の岐美の神言を

の宣らせたまひし御山戀しも

東の空に高照山霞み

西にそびゆる高地秀の山

高照山高地秀の山の中にして

清すがしく立たてる榮城さかきの山やまはも

榮城山さかきやまこれの聖所すがどに岐美きみまさば

吾われはこの天界よに思おもひなけむを

ままならぬ浮世うきよなるかな背せの岐美きみは

萬里ばんりの外そとの旅たびに立たたせり

翼つばさあらば高照山たかてるやまを飛とび越こえて

光明ひかりの岐美きみが許もとに行ゆかむを

駿馬はやこまの脚あしは如何程いかほど速はやくとも

萬里ばんりの道みちははるけかりけり

御樋代みひしろの神かみと生うまれて斯かくの如ごと

苦くるしき吾われとは思おもはざりけり

わが思おもひ淡あはく清すがしくあるなれば

かかろ惱なやみもあらざらましを

谷水たにみづの冷つめたき心こころ持ちてわれ

この天界かみくにに住すみ度たくおもふ  
さり乍ながら如何いかがなしけむわが思おもひ

炎ほのほとなりて胸むねを焦こがしつ

わが胸むねの炎ほのほを消けすは瑞御靈みづみたま

水みづの力ちからに及おほぶものなし

岐美きみを思おもふあつき心こころに焦こがされて

はづかしきことを忘わすれけるかな

斯かく一人歌ひとりうたはせ給たまふ折をりしもあれ、小夜更さよふけの神かみは紫むらさき、紅くれなゐのつつじ及および石南花しゃくなげの花はな  
を捧ささげ乍ながら、静々しづしづ比女神ひめがみの御殿みとのに入り來きたり、比女神ひめがみに捧ささげむとして御歌詠みうたよませ給たまふ。

榮城山松さかきやままつの木蔭こかげに匂におひたる

生命いのちの花はなを公きみにまゐらす

小夜更さよふけて公きみに誓ちかひし丹につつじや

桃色ももいろ石南花しやくなげみそなはしませ

朝香比女あさかひめの神かみは小夜更さよふけの神かみの奉たてまつるつつじ、石南花しやくなげの花はなを莞爾くわんじとして受取うけとり乍ながら、  
わが唇くちびるに花はなの臺うてなをあてさせ給たまひ、御歌詠みうたよませ給たまふ。

芳かむばしき紅くれなるの花はなよ紫むらさきよ

桃色ももいろの花はなよ口くちづけて見みむ

この花はなは香かをり妙たへなり背せの岐美きみの

水い火きのまにまに匂におひつるかも

紅くれなるのつつじの花はなの心こころもて

いつかは岐美きみに見まえまつらむ

石南花しやくなげの花はな美うらはしく桃色ももいろに

香かをり初そめたり吾われにあらねど



桃色ももいろの花はなの姿すがたを見るみにつけ

岐美きみのつれなき心こころをおもふ

背せの岐美きみをうらむらさきの花はなつつじ

手折たをりし小夜更さよふけ神かみの心こころは

斯かく問とはせ給たまへば、小夜更さよふけの神かみは畏かしこみながら御歌みうた詠よませ給たまふ。

桃色ももいろの石南花しやくなげの花はなたてまつり

比女ひめの心こころをそこなひしはや

石南花しやくなげの花はな美うるはしと心こころなく

奉たてまつりたるあやまち許ゆるせよ

紫むらさきの花はなは目出度めでたきしるしぞや

やがては岐美きみに逢あはむと思おもひて

いろいろの花はなの心こころを比女ひめがりに

供へて旅を慰めむと思ひしよ』

朝香比女の神は莞爾として、御歌詠ませ給ふ。

故もなきわが言の葉に汝が神の

心悩ませしことを悔ゆるも

只吾を慰むる爲の花なりしを

深く思ひてあやまちしはや

紅の花の唇朝夕に

吸ふ蝶々のうらめしきかも

いつの日か紅の唇まつぶさに

吸はむと思へば心はるけし』

斯く歌ひ給ふ折しも、機造男の神は恭しくこの場に現れ給ひ、

☪ 朝津日は昇り給へりいざさらば

尾の上の宮居に導きまつらむ

長旅に疲れましぬと思ひつつ

朝の居間をおどろかせつる

紫の雲は東の大空に

いや棚引きつ陽は昇りたり

久方の御空雲なく晴れにけり

榮城の山のいただき清しく

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☪ 長旅の疲れを岐美が眞心に

休らひにけり一夜ねむりて

眺めよき八尋の殿に導かれ

朝あしたの景色けしきにとけ入いりにけり  
常磐樹ときはぎの松まつの下したびに咲さき匂におふ  
つつじの花はなにこころ休やすめり  
いざさらば導みちびき給たまへ背せの岐美きみの  
祈いのりたまひし聖所すがどをさして

ここに機造男はたつくりをの神かみは諸神しよしんと共に、朝香比女あさかひめの神かみを前後左右ぜんごさいうに守りつつ、頂上ちやうじやうの  
宮居みやの大前おほまへさして上のほらせ給たまひける。

朝香比女あさかひめの神かみは宮居みやの聖所すがどに立たたせ給たまひ、感慨無量かんがいむりやうの面持おももちにて、四方よもの國形くにがたを  
覽みそなはしながら大前おほまへに拜跪はいきして、神言かみことを御聲みこゑさわやかに宣のらせ給たまふ。

掛卷かけまくも綾あやに尊たふとき

榮城山さかきやまの上津岩根うはついはねに  
宮柱みやばしら太ふとしく建たてて鎮しづまりいます

主スの大おほ神かみの大おほ前まへに

朝あさ香か比ひ女めの神かみ謹つしみ敬あやひ

祈こひ願のみ奉まつら

そもそもこれの大おほ宮みや居やは

顯あき津つ男をの神かみ御み自づら

大おほ峽が小ひ峽をの木きを伐きりて

百も神が等みを率ひゐまし

開ひらき給たまひし宮みや居やにしあれば

吾われは一ひと入し尊ほたしも

いやなつかしもこの宮みや居やに

鎮しづまりいます主スの神かみの

深ふかき惠めぐみをかかぶりて

吾わが背せの岐き美みの出いでませる

西にし方かたの國くに土にに恙つつがなく

進すすませ給たまへと願ねぎ奉まつる  
八や十そ曲ま津か神かは猛たけるとも  
醜しこの醜しこ女めはさやるとも  
荒あ野らのに風かぜはすさぶとも  
大を蛇ろちは道みちにさやるとも  
神かの御み水い火きに生あれませる  
天あめの駿はや馬こまに鞭むちうちて  
安やすらに平たいに岐き美み許がに  
進すすませ給たまひて詳まつ細ぶに  
御み子こ生うみの神わ業ざをねもごろに  
仕つかへ終をへしめ給たまへかし  
榮さ城かの山やの松まつヶ枝がえは  
千ち代よのみどりの色いろ深ふく  
眞ま鶴なの聲こゑは彌い清きよく

伽陵頻迦の音も冴えて  
御空はいよいよ明けく  
國土の上まで澄みきらひ  
四方にふさがる雲霧は  
あとなく消えてすくすくと  
神の依さしの神業に  
仕へ奉らせ給へかしと  
榮城の山の山の上に  
畏み畏み願ぎ奉る。

見渡せば榮城の山は雲の上に  
そびえ立ちつつ常磐樹茂れり  
見の限り四方は霞めり高地秀の

山やまはいづくぞ黒雲くろくもふさがる

雲くもの奥空おくそらのあなたに高地たかちほ秀ほの

神山みやまは高くそびえ立つらむ

榮城山さかきやまの頂上いただきに立ちて打ち仰あふぐ

御空みそらの碧あをの深くもあるかな

ここに來きてわが背せの岐美きみの功績いさをしを

一ひと入しほ深くさとらひにけり

皇神すめかみの厚あつき恵めぐみをかかぶりて

又またもや明日あすは旅たびに立つべし

機造男はたつくりをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☞ 顯津男あきつをの神かみの造りしこの宮居みややは  
むらさきの雲くもいつも包つつめり



比ひ女め神がの登のらせし今日けは殊こと更さらに

御み空そらあかるく雲くも晴はれにけり

日け竝ならべてこの神か山みやまにおはしませ

朝あさな夕ゆふなにつかへまつらむ

見み渡わたせば四よ方もの國くに原はら未まだ稚わかく

湯ゆ氣げもやもやと立たち昇のぼりつつ

散ちる花はな男をの神かは御み歌うた詠よませ給たまふ。

久ひさ方かたの御み空そらは晴はれぬ山やま晴はれぬ

この神か山みやまの今け日ふのさやけさ

御み樋しろ代の比ひ女め神がこここに現あれまして

神み山やまの雲くも霧きりとほざかりけり

非とき時じくに春はるをうたへる鶯うぐいすの

聲こゑに榮城さかきの山やまは生いきたり

家か鷄け鳥どりは宮居みやの面おもてに時ときをうたひ

田た鶴づは千歳ちとせを壽ほぎて鳴なくかも

風かぜ薰かをるこの神山かみやまのいただきに

立たたせる比女ひめの光ひかりさやけし

中割男なかさきをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

この宮居みやに吾われは仕つかへて年月としつきを

經へぬれど晴はれし吉よき日ひなかりき

今日けふの如ごと晴はれわたりたる神山かみやまに

國形くにがたを見みるたのしさを思おもふ

永とこ久とはに榮城さかきの山やまは晴はれよかし

御樋代神みひしろがみののぼりし日ひより

榮城山溪間に棲める曲津見も

今日より雲は起さざるらむ

比女神の生言靈のひびかひに

八十の曲津見あとなく消えなむ

國土造り國魂神を生まします

御樋代神の出でまし天晴れ

吾も亦比女神の御供に仕へむと

思へどいかに思召すらむ

朝香比女の神の御歌。

神々の厚き情に守られて

榮城の山の尾の上にのぼりぬ

榮城山今日を限りに榮えかし

常磐ときはの松まつの色いろふかみつつ

榮城山さかきやまめぐ廻めぐらす野邊のべはかたらかに

いやかたまりて國くにの秀見ほみゆるも

あちこちと國魂神くにたまがみの家見いへみえつ

果はてなき榮さかえを思おもはしむるも  
□

小夜更さよふけの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐  
晴はれ渡わたる今日けふの吉よき日ひに大宮居おほみやに

比女ひめを守まもりてわれは詣まうでし

高地秀たかちほの山やまは雲間くもまにかくれつつ

榮城さかきの山やまは陽炎かげろふもゆるも

陽炎かげろふのもえ立つ尾根おねに佇たたずみつ

大野おほのの夏なつを見みるはたのしき

山やまも野のも縁みどりのころも着き飾かざりて  
夏なつの女神めがみをむかへゐるかも  
榮城さかきやま山尾をの上へを渡わたる夏風なつかぜは  
爽さはやかにして涼すずしくもあるか

親幸男ちかさちをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

はるばると來きませる比女神ひめがみ導みちびきて  
晴はれたる榮城さかきの尾根をねにのぼりつ  
大宮居おほみやの聖所すがどに立たちて比女神ひめがみの

生言靈いくことたまをわれ聞ききしはや

言靈ことたまの水い火きより生あれし天地あめつちに

言靈ことたま宣のらで生いくるべきやは

いざさらば神山みやまを下くだり八尋殿やひろどのに

休ませ給へ御樋代比女の神よ<sup>『</sup>

神々は尾の上の大宮居の聖所に立ちて、各自御歌詠ませつつ、岩の根木の根踏  
みさくみ乍ら、右に左りに折れつ曲りつ、九十九折の坂道を比女神の御憩所なる  
八尋殿さして下らせ給ひける。

(昭和八・一二・七 舊一〇・二〇 於水明閣 谷前清子謹録)

第一三章 朝駒の別れ(一九三〇)

榮城山の聖場に仕へ給ふ五柱の神司等は、朝香比女の神の長途の疲れをねぎら  
はむとして、又送別の宴を兼ねつつ八尋殿に集まりて、種々の美味物を机代に置  
き足らはし、百木百草の花を飾りて、歌ひ舞ひつつ、賑かに宴し給ふ。  
機造男の神は御歌詠ませ給へば、四柱の神は歌の調子に合せて、手を打ち、足

を踏み鳴らせて踊らせ給ふ。

☐ 朝日直射す榮城の山に

夕陽かがよふ紅葉山

御空碧々大地は廣し

中を岐美ゆゑ一人旅

遠き旅路も岐美故なれば

命死すとも恐れまじ

岐美は萬里の旅寢の枕

一人寝る夜の夢に見る

岐美の御後を遙々慕ひ

まぎて來ませる朝香比女

月は御空に星光冴えて

比女を迎ふる榮城山

千里萬里も戀故なれば

如何でいとほむ岐美の側

神々は各々手を打ち足拍手を揃へて、うたひ舞ひ給ふにぞ、朝香比女の神はや  
や面ほてりつつ御歌うたひ給ふ。

はづかしき今日の宴よ百神に

からかはれつつ面ほてるなり

からかはれ笑はるとも何かあらむ

戀しき岐美に會ふ日ありせば

かく迄も岐美を戀ひつつ玉の緒の

命ささぐと誓ひしわれなり

榮城山尾の上の松は枯るとも

岐美戀ふ心はほろびざるべし



天地は闇となるともいとはまじ

光明の神の岐美ましませば

曲津神の荒びもいとはず尋ねゆくも

われは戀しさあまればなりけり

かくならば總ての心さらけ出して

神々等の肝冷やさばや

笑はれて心は變へじ謗られて

戀路は捨てし命のかぎりは

わが命よし死するとも岐美許に

魂は通ひて水火を合はさむ

百神等如何に議らひ給ふとも

われはひるまじ戀路の坂を

いざさらば岐美の戀ふしくなりつれば

一時も早くこの場を立たむ

朝香比女の神の思ひ切つたる御歌に、百神等は舌を巻きながら、踊の手を止め

て各自御歌詠ませ給ふ。  
機造男の神の神歌。

白梅の花にもまして美はしき

比女の言葉のおほらかなるかも

かくの如面勝神と知らざりき

射向ひまつらむわれは術なし

おほらかにおはする比女よおほらかに

戀の御歌を詠ませたまへり

かくの如細女賢女に慕はるる

顯津男の神の幸をおもへり

幾萬里の道もいとはずと宣らしませし

比女のこころの素直なるかも

われも亦また神かみの御許みゆるしあるならば  
かかる雄を々をしき比女ひめを娶めとらむ  
』

朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐  
細女くはしめに見合みあひまさむとおもほさば

しばし神魂みたまを引き締め給たまはれ

緩ゆるみたる神魂みたまを持ちて細女くはしめに

あはむと宣のらすをかしき公きみかも

眉目容姿みめかたち勝れし神かみに非あらざれば

烏からすも妻つまにならざるべきを

百神ももがみよわが言ことの葉はを許ゆるせかし

いつはりのなき眞言まことなりせば

此處ここにます神かみの面おもざしことごとに

女神めがみにかなへる御姿みすがたはなし

永久とこしへに榮城さかきの宮居みやの神社かむなびに

仕つかへて神業みわざを勵はげませたまへ

わが爲ためにひらき給たまひしこの宴うたげ

白しらけけるかな言靈ことたますさみて

ともかくもわが背せの岐美きみは戀こふしもよ

眉目みめも容姿かたちも勝すぐれたたまへば

神々かみがみは數多あまたあれども背せの岐美きみと

仰あふがむ魂たまはかげだにもなし

散花男ちるはなをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

白梅しらうめも散ちりたるあとことりは小鳥ことりさへ

梢つれにとまらぬ浮世うきよなるかも

かくの如ごとみにく醜おもき面もを持つわれは

つつしみ畏かしこみ戀こひは語かたらじ

勝まさりたる男をがみ神なけれど優すぐれたる

女神めがみまたなき浮うきよ世なりけり

朝あさ香か比ひ女神めがみの神かみ言みことの美うるはしさ

櫻さくらの花はなのさかりに似にたるも

何いつ時まで迄こすゑも花はなは梢こすゑにとどまらで

嵐あらしに散ちりゆく夜よ半はのあはれさよ

天あま渡わたる月つきにも盈みつる虧かくるあり

朝あさ香かの比ひ女めも今いまさかりなる

時とき來くればやがて萎しをれむ朝あさ香か比ひ女め

とく出いでませよ背せの岐き美み許がりに

東つかの間まにも櫻ういの花はなは散ちる世よなり

いそがせ給たまへ背せの岐き美みの許もとへ  
𠄎

朝香比女の神はこれに答へて、

村肝の心いそげど焦れども

万里の山河せむすべもなし

さりながら瑞の御霊の夢見さへ

わが魂線はよみがへるなり

中割男の神はあきれながら、御歌詠ませ給ふ。

男神數多集へる蓆に比女神は

憚りもなくのろけますかも

かくの如雄々しき賢しき細女と

今の今までもおもはざりけり

面白き比女神なるかも背の岐美の

艶事つやごとのみを時ときじく宣のらすも

天界かみくにに生うまれてわれはかくの如ごとき

雄を々をしき女神めがみに會あはざりにけり

細女くはしめにして賢女さかしめよ朝香あさか比女ひめの

神かみは面勝おもかつ射向いむかふ神かみはも

かくの如ごと雄を々をしき女神めがみの前まへに出いでて

伊竦いすくみにけり男神をがみのことごとは『

小夜更さよふけの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

比女神ひめがみのこれの聖所すがどに來きませしゆ

榮城さかきの山やまは花はな満みちにけり

いさぎよく雄を々をしく宣のらす言靈ことたまに

うたれて返かへさむ言ことの葉はもなし

比女神ひめがみのこの雄健をたけびに曲津まがつ見みは  
雲くもをかすみと逃にげ去さりにけむ  
憚はばかりもなく眞心まごころをさらけ出して  
恥はぢらひ給たまはぬ比女ひめの雄々をしさ  
』

親幸男ちかさちをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㌿  
顯津男あきつをの神かみの御樋代みひしろ比女神ひめがみは

さこそあらむと思おもひけるかな

顯津男あきつをの神かみも驚おどろきたまふらむ

はるばる訪とひし比女ひめのまことに

世よの中なかは勇いさみ進すすみて己おのがじし自

行くゆべき道みちを拓ひらくべきかな

朝香比女神あさかひめがみの雄建をたけび勇いさましく



醜しこの雲霧くもぎりかげをひそめむ

一つ目ひとめの八口やくちの曲津まがも比女神ひめがみの

生言靈いくことたまに逃げ散りしとふ

潔いさぎよき比女ひめの神言みことを迎へまして

榮城さかきの山やまに春はるよみがへる

比女神ひめがみと俱ともにしあれば常春とこはるの

花咲はなき匂におふ心地こちするかも

神々かみがみは他愛たあいもなく、心こころの文たけを互たがひに打開うちあけながら、無禮講ぶれいかうを終り給たまひける。

ここに朝香比女あさかひめの神かみは、其日そのひを一日ひとひこれの神山みやまにとどまり給たまひ、百鳥もどりの聲こゑ、百も木の花はなの香かりに魂たまを養やしなひながら、翌日よくじつの朝あさ又またもや駒こまに鞭むちうちて、靄もや立ち昇のぼる荒野あらのケ原がはらを立たち出いで給たまはむとして御歌詠みうたよませ給たまふ。

三日三夜みかみよさわが魂線たましひを遊あそばせし

榮城の山はあこがれの山よ

百神のあつき心にほだされて

思はず知らず日を重ねけり

榮城山に楽しく嬉しく遊びてし

この思ひ出は千代につづかむ

大空のあらむ限りは青雲の

空なりにけりわが立つよき日は

百神よさらばこれより草枕

旅に立たなむ安くまします

大宮居に朝な夕なを仕へつつ

生言靈に世をひらきませ

懐かしく親しくなりし神々に

別るる今朝の名残惜しまる

何一つ心にかかる雲もなし

はばかりもなく語らひにつつ  
𠄎

機造男の神は御歌詠ませ給ふ。  
はたつくりを かみ みうたよ たま

なつかしの朝香の比女は今日を限り  
𠄎

旅に立たすと思へばさびしも  
たび たた おも

幾年も俱に居まして語らまく  
いくとせ とも ゐ かた

思ひしことも夢なりにけり  
おも ゆめ

國土生みの神業に仕ふる比女神を  
くに う みわざ つか ひめがみ

止むるよしもわれなかりける  
とど

比女神よ顯津男の神に會ひまさば  
ひめがみ あきつを かみ あ

うま怜に委曲に吾等をつたへよ  
うまら つばら われら

顯津男の神の御幸を祈りつつ  
あきつを かみ みさち いの

神に仕ふとつたへませ公  
かみ つか きみ

雨あめ降ふれば比ひ女め神がみおもひ風かぜ吹ふけば

汝なれをしの俣ばむはたつくりを機はた造つくり男をわれは

比ひ女め神がみの立たたせ給たまひし榮さか城きやま山は

又またもや日ひ々びに淋さびしくならむを

行ゆく水みづの止とどめもあへぬ公きみゆゑに

われあきらめて見み送おくりまつるも  
』

散ちる花はな男をの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

ㄣ  
春はるの野のに咲さく百も花も散ちる世よなり

こころして行ゆけ大おほ野の旅たびを

雄を々をしくも出いで立たちますか朝あさ香か比ひ女め

神かみの神み言ことは世よを照てらしつつ

駿はや馬こまの嘶いなき高たかく進すすみます

公きみの行手ゆくてを安やすかれと祈いのる

中割男なかさきをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

何い時つまでも名な残りご惜をしけれど詮せんもなし

いざや女神めがみよ別わかれまつらむ

西方にししかたの國くに土には曲津まがつ見み棲すむと聞きく

心こころ注つぎて出いでませ比ひめが女神かみよ

汝なれこそは面勝おもかつが神かみと射向いむかふ神かみよ

如何いかなる曲津まがつもやらひますらむ

一ひと日ひなりと泊とまらせ給たまへと祈いのりつつ

惜をしき別わかれとなりなりにけらしな

小夜更さよふけの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ わけもなき事語り合ひて親しみし

比女神今日を旅に立たすも

惜しめども今日の別れは詮もなし

神の依さしの神業なりせば

長き世に又會ふ事のあらむかと

當なきことを頼みて待たむ

小夜更けて天地しづまる頃とならば

比女のすがたの目に浮ぶらむ

ともかくも公を門邊に送り來つ

別れのなみだ雨と降るかも

親幸男の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ はろばると出でましし比女ははろばると

旅たびに立たたすか別わかれ惜をしまる

折をり々は榮城さかきの山やまの松まつヶ枝がえに

汝なが魂線たましひを移うつさせたまへ

今け日の日ひの別わかれ惜をしむか眞鶴まなづるの

うたへる聲こゑも悲かなしかりけり

百鳥もどりの鳴なく音ねも今け日はしめりたり

公きみの出いで立たち惜をしむなるらむ

高照たかてるの山やまははるけし心こころして

旅たびに出いでませ朝香比女あさかひめの神かみよ

朝香比女あさかひめの神かみは駒こまに跨またり、諸神しよしんに默禮もくれいしながら、

□ ゆかりあるこれの聖所すがどを後あとにして

旅たびゆくわれはかなしかりけり

百神ももがみのあつき心こころは忘れまじ

岐美きみにし會あへば詳細つぶさに傳つたへむ

いざさらば百神ももがみ等たちよ永久とこしへに

命いのち榮さかえてかがやきたまへ

と御歌みうた詠よませつつ駒こまに鞭むちうち、榮城山さかきやまを後あとに、靄もや立ち籠こむる朝明あさあけの大野おほのヶ原がはらを、  
進すすませ給たまふぞ雄々ををしけれ。

（昭和八・一二・七 舊一〇・二〇 於水明閣 林彌生謹録）

第一四章 磐楠舟いはくすぶね（一九三一）

高地秀山たかちほやまの聖場せいぢやうに

御樋代神みひしろがみと仕つかへたる



やはしらひめ 八柱比女の神司 かむつかさ  
 なか 中にも別けて面勝の おもかつ  
 かみ 神とまします朝香比女は あさかひめ  
 をごころ 雄心押さゆる由もなく よし  
 さくら 櫻の花の散り敷ける はなち  
 はる 春の夕の唯一人 ゆふへ ただひとり  
 はくば 白馬に跨りしとと またが  
 ふみ 踏みも習はぬ大野原 おほのほら  
 みち 道なき道を別けながら わ  
 さみ 狭葦の河瀬の曲神を かはせ まががみ  
 いくことたま 生言靈を打ち出し う いた  
 まひ 眞火の功に追ひ拂ひ いさを お ほう  
 ふたた 再び荒野をわたりまし あらの  
 さかき 榮城の山の聖場に やま せいぢやう  
 たま 着かせ給ひて百神の ももがみ  
 あつき あつき待遇喜びつ もてなしよろこ  
 しば 暫し御足を留めつつ みあし とど  
 また 又もや駒に鞭うちて また こま むち  
 おほもとあきつを 太元顯津男の神の かみ  
 みあと 御許に進み行かばやと すす ゆ  
 ま 未だ地稚くもうもうと つちわか  
 きり 霧立ち昇る大野原 のぼ おほのほら  
 ひとり 一人雄々しく出で給ふ。 を たま

ゆふぐれちか 夕暮近くなりし頃、  
 ぜんぼう 前方に横はる大沼あり、  
 よこた 駒は左右の耳を前方に傾け、  
 おほぬま 俄に

蹄を止め、何程鞭うち給へども一步も進まざる怪しさに、兔も角も旅の疲れを休らへ様子を<sup>み</sup>見むと、萱草茂る芝生に下り立ち給ひける。

要するに總て馬は鋭敏なる動物にして、前方に敵ある時は耳を前方に傾け進まむとせず、又馬自身の氣分良き時得意なる時は、耳を眞直に空に向つて敬て、又騎手に對し不満を抱き或ひは振り落さむと思ふ時は、左右の耳を後方に傾くるものなり。故に馬に乗るものは第一に耳の動作に注意すべきものとす。

朝香比女の神は萱の生にとつかと尻を落付け、暫し雙手を組み考へ給ひけるが、白駒は一脚一脚後退り止まず、果ては前脚を上げて直立し、驚きの聲を放ちて凶事を報ずるが如く見えける。

わが駒の驚く見れば行く先に

曲津見は罫を造り待つらむか

前方に左右の耳をかたむけて

歩みたゆとふ駒のあやしも

果<sup>はて</sup>しなき大野<sup>おほの</sup>の末<sup>すゑ</sup>に黄昏<sup>たそが</sup>れて

わが駿馬<sup>はやこま</sup>は居竦<sup>あすく</sup>みさやぐも

濛々<sup>もうもう</sup>と夕<sup>ゆふへ</sup>の霧<sup>きり</sup>のふかみつつ

咫尺<sup>しせきべん</sup>辨<sup>あや</sup>ぜぬ怪<sup>あや</sup>しき野邊<sup>のべ</sup>なり

斯<sup>か</sup>くならば夜<sup>よ</sup>の明<sup>あ</sup>くる迄<sup>まで</sup>草<sup>くさ</sup>の生<sup>ふ</sup>に

駒<sup>こま</sup>をやすめてわれは待<sup>ま</sup>たなむ

進<sup>すす</sup>み進<sup>すす</sup>み退<sup>しりぞ</sup>く事<sup>こと</sup>を知らぬ吾<sup>われ</sup>も

駒<sup>こま</sup>おどろけばせむすべなけれ

夕<sup>ゆふがらす</sup>鳥聲<sup>こゑ</sup>も悲<sup>かな</sup>しくきこゆなり

霧<sup>きり</sup>ふかしくて影<sup>かげ</sup>は見<sup>み</sup>えねど

陰々<sup>いんいん</sup>と邪氣<sup>じやき</sup>迫<sup>せま</sup>り來<sup>き</sup>てわが水火<sup>いさ</sup>も

今<sup>いま</sup>は苦<sup>くる</sup>しくなりにけらしな

顯津<sup>あきつ</sup>男<sup>を</sup>の神<sup>かみ</sup>の神言<sup>みこと</sup>は日竝<sup>けなら</sup>べて

斯<sup>か</sup>かる艱<sup>なや</sup>みに逢<sup>あ</sup>はせ給<sup>たま</sup>はむ

面勝おもかつの神かみと言いはれし吾われにして

如何いかで曲津まがつにためらふべしやは

今いまこそは燧ひうちを打うちて眞火まひて照てらし

八十やその曲津まがつをしりぞけむかな〆

斯かく歌うたひながら燧ひうちを取とり出し、かちりかちりと打うち出だし給たまへば、火花ひばなは四邊あたりに散ち

りて原野はらのに落おち、若草わかくさの根ねに重かさりたる去年こそのかたみの枯草かれくさに忽たちまち火移ひうつり、見み

る吹ふき來きたる風かぜに煽あふられて、火ひは前方ぜんぱうに延のび廣ひろまり、沼ぬまの岸邊きしへに到いたりて燃もえ止とまり

ける。四邊あたりを包つつみし深霧ふかぎりは俄にはかに四方よもに散ちり失うせ、空晴そらは々ばれと青雲あをくもの生地きぢを現あらはし、

六日むゆかの月つきは鋭すどき光ひかりを地上ちじやうに投なげければ、目路めぢの限かぎり一いつてん點んのさやるものなく、沼ぬまの

面おもはきさらきらと月光つきかげうか浮うかぶ夜よるとはなりける。八十曲津やそまがつ見みの神かみは狹葦さあひの河瀬かはせの眞夜まよなか中か

を、朝香比女あさかひめの神かみの眞火まひの功いさをに退やはれ傷きずつきたれば、暫しばし影かげを潛ひそめ居ゐたりしが、火やけ

傷ども漸やうやく癒いえければ第二だいにの作戦計畫さくせんけいぐわくを思おもひ立たち、駒諸こまもろとも共ともに沼ぬまの中なかに迷まよひ入いらしめ、

仇あだを報むくいむと待まち居ゐたりしなり。駿馬はやこまは早はやくも前方ぜんぱう間近まぢかく斯かかる難所なんしよのあるを知し

りて、危難を恐れためらひしものと思はる。

茲に朝香比女の神は心落付き給ひ再び駒に跨りて、廣く長く展開したる沼の岸邊に驅け寄り給ひ、波間に浮べる爽けき月光を眺めながら、御歌詠ませ給ふ。

曲津見の醜のたくみも霧となり

煙となりて逃げ去りにけり

大野原わが打ち出でし火に焼かれ

あとかたもなく清められたり

曲津見は此の荒野に影ひそめ

われ傷ふと待ち構へ居しか

駿馬の敏き耳と眼に看破られて

八十曲津見の罨はやぶれし

有難し神の賜ひしこの眞火は

わが行く道の守りなるかも

幾萬いくまんの曲津まがつ見來みきたり襲おそふとも

われには眞火まひの劍つるぎありける

きらきらと水の面もに冴さゆる月光つきかげは

わが背せの岐美きみの御靈みたまなるかも

千萬里せんまんり遠とほきにいます背せの岐美きみの

影かげを間近まぢかく此處ここに見みるかな

上下うへしたにかがやきわたる月光つきかげは

わが背せの岐美きみと思おもへば嬉うれしも

此沼このぬまを見みつつすべなし吾行わがゆかむ

西方にしかたの國土くにをさへぎるこの水みづ

兔とに角かくに今宵こよひは沼ぬまの月光つきかげに

いむかひながら夜よを明あかすべし  
□

朝香比女あさかひめの神かみは駒こまの背せよりひらりと下り給たまへば、不思議ふしぎなるかな、小石こいし一つな

き汀みぎはに長方形ちやうほうけいの巖横いはよこたはりありければ、  
格好かくかうの坐席ざせきなりと腰打こしうち下おろし憩いこひ給たまひつつ、  
御歌詠みうたよませ給たまふ。

主スの神かみの惠めぐみなるらむ汀邊みぎはべに

わがやすむべき巖いははありけり

此巖このいはに吾身わがみの疲つかれやすめつつ

月つきを拜をがみて夜よを明あかさばや

蟲むしの音ねは焼やき拂はらはれし草くさの根ねに

ひそみて鳴なくかこゑの悲かなしき

波なみの面もを右みぎと左ひだりに飛とび交かひて

土鳥啼つちどりくなり月つきにはえつつ

いつの間まにかわが駿馬はやこまも巖いはの上へに

蹲つくづくりつつ水い火きをやすめり

此巖このいは未まだ稚わかければ舟ふねにして

この廣沼をわれは渡らむ』

斯く歌はせ給ひながら、比女神は細き柔かき左右の御手もて、巖の中をえぐり  
舟の形となし給ふ。恰も陶器師が柔かき粘土を以て皿、茶碗などを練るが如く、  
またたく間に舟の形を造り、

一 ひとふたみよいつむゆななやこのたり  
二 一二三四五六七八九十

百千萬千萬の神

集まり來りて守り給はれ

八ホフヘヒ舟に成れ成れ此の巖  
今わが造りしこれの巖舟  
水の面に浮ぶるまでも輕くなれ



軽かるくなれなれ木舟きぶねの如ごとくにに

斯かく宣のらせ給たまふや、流石さすがの巖舟いはぶねも忽たちまち木舟きぶねと變へんじ、自おのづからするすると滑すべりて汀邊みぎはべ  
にばかりと浮うきければ、比女神ひめがみは駒こま諸もろとも共に舟中ふねに飛とび入いり給たまひ、

☐ 天晴あはれ天晴あはれ生言靈いくことたまの幸さちはひて

巖いはほは眞木まきの舟ふねとなりける

艚ろも楫かいもなけれど吾われは言靈ことたまに

これの御舟みふねをあやつり渡わたらむ

大空おほぞらの月つきは益々ますます冴さえにつつ

わが乗のる舟ふねは波なみすべるなり

水底みなそこにうつるふ月つきを眺ながめつつ

波なみのおもてを風かぜなでて行く

天あめと地つちの中なか空ぞらわたる心地こころかな

上うへと下したとに月つきをながめて

千萬ちよろづの御空みそらの星ほしは水底みなそこの

金砂きんしゃ銀砂ぎんしゃとなりてかがよふ

曲神まががみの醜しこの奸計たくみの千引巖ちびきいはも

われをたすくる舟ふねとなりしよ

駒こまよ駒こま汝なれは賢さかしく雄々ををしけれ

曲津まがの奸計たくみをわれに知らせし

如何いかほど程ほどに沼ぬまは廣ひろくも言靈ことたまの

力ちからに曉岸邊あかつきぎしべにつかむ

やすやすと御舟みふねの中なかに月つきを見みつ

旅たびの疲つかれをやしなはむかな

西北にしきたの風かぜに送おくられわが舟ふねは

艚楫ろかいなけれどいやすすむなり

高地たかちほ秀ほの山やまは雲間くもまに聳そびえ立たち

今宵こよひの月つきに照てらされにつつ

仰あふぎ見みればはるけかりけり高地たかちほ秀ほの

山やま出いでしより久ひさしからぬに

榮城さかきやま山尾をの上へほのぼの見みえにけり

月つきのしたびに尾根をね晴はれにつつ

大空おほぞらに月つきは照てれども遠とほ々とほし

高照山たかてるやまはすがた見みえなく

眼めに一ひとつさやるものなき大野原おほのはら

この廣沼ひろぬまの月つきはさやけし

わが行ゆかむ道みちを遮さへぎる曲津まがあらば

生言靈いくことたまに追おひ退そけ行ゆかむ

天あめと地つちの廣ひろきが中なかを驅かけり行ゆく

われは一人ひとりの旅たびなりにけり

駿馬はやこまのたすけによりて果はてしなき

大野をわたる吾はさびしも

淋しさの心の駒に鞭うちて

勇み進まむ果なき國原を

わが舟は彼方の岸に近づきて

御空の奥はしののめにけり

岸邊近くなりて清しき鵲の

鳴く音は高く聞え來にけり

やがて今朝日昇らば百鳥の

聲もすがしく世をうたふらむ

漸くにして御舟は、廣き沼の果なる岸邊に横はりければ、  
朝香比女の神は駒諸  
共舟を乗り捨て、

わが舟は千引の巖と體を變じ

これの岸邊きしべに永久とほにあれかし  
一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七な八な九や十このたり

百も千ち萬よろづ舟ふねよ舟ふね

元もとの如ごとく巖いはほとなれなれ

堅か磐きは常と磐きはの千引ちびきの巖いはほとなれなれ  
□

斯かく宣のらせ給たまふや、御舟みふねは忽たちまち元もとの如ごとく大巨巖だいきよがんとなりて汀邊みぎはべに屹立きつりつせり。此この巖いはほを御舟巖みふねいはほと名付なづけ給たまひける。

東雲しのめの空そらは次第しだい々々しだいに明あからみにつつ、新あたしき天津日あまつひは煌かう々かうと雲くも押し分わけ昇のぼらせ給たまひ、沼ぬまの面おもてを隈くまなく照てらさせ給たまふ。

（昭和八・一二・八 舊一〇・二一 於水明閣 森良仁謹録）

第一五章 御舟巖みふねいはほ（一九三二）

八十曲津見は朝香比女の神の行手を遮らむとして、廣大なる沼と體を變じ、女神を惱まし奉らむとして待ち構へ居たりしが、女神の生言靈に固められて、忽ち眞の沼となり、永久に大野ヶ原の眞中に横はる事となりける。又巨巖は八十曲津見の本體なりけるを、言靈の幸はひによりて水上に浮ぶ磐楠舟となり、比女神を彼岸に渡す御用に逆しまに使はれ、再び汀邊に萬世不動の御舟巖と固められれば、八十曲津見は如何とも詮すべなく、その率ゐたる百の曲津見は、いづれも沼底の貝と變じて、わづかに生命を保つ事を許されにける。

朝香比女の神は、この態を見て御歌詠ませ給ふ。

面白し八十曲津見は大野原の

中に動かぬ沼となりしよ

曲津見の沼となりける水の上を

磐楠舟に乗りて渡りし

今日よりは彌永久に沼となりて

所ところを變かへな世よの終をはるまで

もろもろの曲津まがつかみたち神等ぬまそこは沼底ぬまそこの

貝かひとなりつつ生命いのちをたもて

貝かひは皆みな吾わが乘のり來きたりし楠舟くすぶねの

形かたちとなりて沼ぬまにひそめよ

天津日あまつひは眞賀まがの湖水こすゐの面照おもてらし

狹霧さぎりもやもや立たち昇のぼりつつ

わが爲ために謀はからひたりし醜しこの沼ぬまは

またわが爲ために謀はからはれける

水底みなそこに青あをくうつるふ山影やまかげは

榮城さかきの山やまか波なみにさゆれつ

月讀つきよみの光かげを浮うかべしこの沼ぬまは

曲津まがつの化身けしんと思おもはれざりしよ

何事なにごとも善意ぜんいに解かいせばもの皆みなは

わが爲ためによきものとなるかも

曲津神まがつかみも愛あいと善ぜんには勝かち難がたく

大地だいちに伏ふして沼ぬまと溢あふれつ

國津神くにつかみの日ひごと毎ごと々との餌えを生うみて

魚貝ぎよかひを育そだてよ眞賀まがの湖みづうみ

沼水ぬまみづはいやつぎつぎに澄すみきりて

深ふかき湖水こすゐとなりにけらしな

御舟巖みふねいはの側そばに集あつまる魚族うろくづは

いや永久とこしへに生命いのちたもたむ

御舟巖みふねいはは吾われを助たすけし神かみなれば

幾千代いくちよまでも滅ほろびざるべし

巖いはがねヶ根ねに住すみ魚族うろくづも諸貝もろかひも

われを助たすけし功いさをに生いきむ

いざさらば吾われは進すすまむ湖みづうみよ



國津神等を永久に養へ  
□

斯く歌ひ給ひつつ駒にひらりと跨り、東南方の野邊をさして進み給へば、程近  
き野邊の眞中に餘り高からぬ丘陵ありて、國津神等の住家幾十となく建ち並び居  
たりければ、朝香比女の神は國津神の住へる村を訪はむとして進ませ給ふ。

國津神の長たる狹野比古は、比女神の御前に跪きながら滿面に笑をたたへて、

□ 汝こそは高天原ゆ降ります

女神にますか面かがやける

この郷に國津神等守りつつ

住へる吾は狹野比古にこそ

願はくばこの村里に止まりて

國津神等を救はせたまへ

國津神は日毎の餌に苦しみつ

飢<sup>う</sup>ゑ<sup>かわ</sup>渴<sup>きたり</sup>きたり安<sup>やす</sup>きをたまへ  
氣<sup>から</sup>魂<sup>たま</sup>をたしに保<sup>たも</sup>てる國<sup>くに</sup>津<sup>つか</sup>神<sup>かみ</sup>は  
餌<sup>ゑ</sup>なく飢<sup>う</sup>ゑ<sup>かわ</sup>に渴<sup>かわ</sup>きゐるなり」

朝<sup>あ</sup>香<sup>さ</sup>比<sup>か</sup>女<sup>ひめ</sup>の神<sup>かみ</sup>は狹<sup>さ</sup>野<sup>ぬ</sup>比<sup>ひ</sup>古<sup>こ</sup>に答<sup>こた</sup>へて、

國<sup>くに</sup>津<sup>つか</sup>神<sup>かみ</sup>の日<sup>ひ</sup>々<sup>び</sup>の糧<sup>かて</sup>をば與<sup>あた</sup>ふべし  
眞<sup>ま</sup>賀<sup>が</sup>の湖<sup>こ</sup>水<sup>すゐ</sup>の魚<sup>うろ</sup>族<sup>くづ</sup>とらせよ」

狹<sup>さ</sup>野<sup>ぬ</sup>比<sup>ひ</sup>古<sup>こ</sup>は答<sup>こた</sup>へて、

あ<sup>か</sup>り<sup>た</sup>が<sup>た</sup>し忝<sup>かたじけ</sup>なしと思<sup>おも</sup>へども  
木<sup>こ</sup>の實<sup>み</sup>に生<sup>い</sup>くる國<sup>くに</sup>津<sup>つか</sup>神<sup>かみ</sup>なるよ  
魚<sup>うろ</sup>族<sup>くづ</sup>をくひて生<sup>い</sup>くべき生<sup>いの</sup>命<sup>ち</sup>なれば

吾等は飢にせまらざるべし』

朝香比女の神は、

□ 木の實また生命の爲によけれども

魚族喰へば生命ながけむ

われは今國津神等に魚族を

焼きて喰ふべき眞火を與へむ□

斯く宣らせ給ひて朝香比女の神は、この村里の小川に満てる魚貝等を漁らせ給ひ、燧により火を切り出して、木草に燃えつかせ、魚貝をその中にほりくべ、加減よく焙り給へば、芳ばしき香り四邊に満ちぬる。

國津神等は、この香りにそそられて、先を争ひ、貪る如くに喰ひ始めたり。狹野比古は喜びて、

☐ 比女神ひめがみの惠畏めぐかしこし魚族うろくづの

よき味あぢはひを教をしへ給たまひぬ

今日けふよりはこの村里むらざとの國津神くにつかみ

飢うゑに歎なげかむ恐れおそはあらし

比女神ひめがみのきり出いで給たまひし眞火まひこそは

神かみの御靈みたまか光ひかりがよふ

この眞火まひを吾われに賜たまはば永久とこしへに

國津神等くにつかみたちは滅ほろびざるべし

朝香比女神あさかひめがみの神かみは懷中くわいちゆうより控ひかへの燧ひうちを取とり出いで、狹野比古さぬひこに與あたへ給たまへば、狹野比さぬひ古こは感謝措かんしやおく能あたはず、カチリカチリと火ひを切きり出いでながら、喜よろこびの餘あまり俗謠ぞくえうを歌うたひて、國津神等くにつかみたちと共に月つきの輪わを造つくりて踊をどり舞まひ狂くるひける。

☐ 天津比女神あまつひめがみこの郷さとに

降りましまし永久とこしへの  
光ひかりを與あたへ給たまひけり  
吾等われらは今迄いままで木の實みのみ  
喰くひて生いきたる國津神くにつかみ  
夏なつと秋あきとはよけれども  
冬ふゆさり春はるの來きむかへば  
飢うづにくるしみ惱なやみたり  
今日けふは如何いかなる吉よき日ひぞや  
湖こ水すゐ池いけ水みづ川かは底そこに  
ところせきまで満みち足たらふ  
魚うろ族くづ喰くひて永久とこしへに  
生命いのち保たもつと教をしへまし  
燧ひつちを吾われに與あたへまし  
燒やきて喰くふべく教をしへます

大御恵おほみめぐみのありがたや

今日けふより吾等われら國津神くにつかみは

生命いのちの糧かてを得えたりけり

ああたのもしやたのもしや

天あめより降りくだし比女神ひめがみの

恵めぐみは千代ちよに忘わすれまじ

ああありがたやありがたや

祝いはへよ祝いはへよ國津神くにつかみ

踊をどれよ舞まへよ國津神くにつかみ

御空みそらは碧あをく地つち廣ひろく

月日つきひは清きよく輝かがやきて

吹ふき來くる風かぜもおだやかに

天津神國あまつみくにはまのあたり

生うまれ出いでたり惟神かむながら

神かみの御前みまへに感謝言あやひごと

白まをさむ言葉ことばもあら尊たふと

千代ちよも八千代やちよも永久とこしへに

女神めがみの恵めぐみは忘わすれまじ

祝いはへよ祝いはへよ踊をどれよ踊をどれよ

大地だいちの底そこのぬけるまで

龍宮りうぐうの釜かまの割わるるまで

がら、踊をどり狂くるひ給たまひける。朝香比女あさかひめの神かみは、諸神ももがみに向むかひ御歌みうたもて宣のらせ給たまふ。  
狭野比古さぬひこの音頭おんどにつれて、國津神等くにつかみたちは次つぎ次つぎに集あつまり來きたり、天地てんちを震動しんどうさせな

曲津見まがつみの醜しこのすさびを退やらはむと

われは燧ひつちを汝等なれらに與あたへし

今日けふよりは眞賀まがの湖こに棲すむ魚族うろくづを

汝等なれらがかてに與あたへおくべし

御舟巖みふねいはのまはりに棲すめる魚族うろくづは

いやとこしへに漁すなとるなゆめ

御舟巖みふねいはは吾われを助たすけし神かみなれば

近くちかの魚族うろくづは助たすけ置おくべし

過あやまちて巖根いはねに棲すまむ魚貝ぎよかひ喰くはば

忽たちまち汝等なれらが生命いのちは失うせむ

いや廣ひろき湖みづうみなれば到いたるところ

汝等なれらが喰くふべき魚貝ぎよかひは満みてり

魚族うろくづは火ひにて焙あぶりて喰くらふべし

生いきたるままにて必かならず喰をすな

狹野比古さぬひこは御歌みうたもて喜よろこび答こたふ。



□ 久方ひさかたの天あめより降りし比女神ひめがみの

神言みことかしこみ千代ちよに守まもらむ

今日けふよりは國津神くにつかみたち等安やすらかに

喜よろこびいさみ恵めぐみに浸ひたらむ

魚族うろくづは數限かずかぎりなし年普としまねく

湖うみに満みてれば飢うゆる事ことなし

願ねがはくば吾等われらに水みづを與あたへかし

小川をがはに流ながるこの眞清水ましみづを

國津神くにつかみ眞清水ましみづ飲のみて腹痛はらいため

生命いのちをおとす憂うれひありせば □

ここに朝香あさかの比女神ひめがみは、眞土まつちを水みづにて練ねり、瓶かめを造つくり、暫しばらくの間あひだを天津日あまつひの光ひかりに干ほし乾かわかせ、土つちをもて窯かまどを築きづき、火ひをおこして瓶かめを焼やき、うままららにかたらに造つくり上げ、之これに水みづを満みたして窯かまどを造つくり火ひをもて焼やかせ給たまへば、忽たちまち瓶かめの水みづは沸騰ふつとうして

美はしき白湯となりける。比女神はこの白湯を國津神等に與へ、飲む事を教へ給ひければ、國津神は喜び勇みて之より白湯を飲む事となしければ、生水の如く腹を痛むることなく、各々その天壽を保ちけるこそ目出度けれ。之より火食の道始まりにける。

狭野比古は喜びの餘り感謝の歌を詠む。

比女神の惠の露にうるほひて

吾等は白湯の味はひ悟りぬ

火に焼きし魚族の味芳ばしく

吾等が生命もよみがへるなり

土を練りて瓶を造らせその瓶を

又火に焼かす神業尊し

焼き上げし瓶に眞清水盛り満し

薪燃せば白湯は沸くかも

火ひの力ちから始はじめて悟さとりし吾われ々は

今日けふより飢うゑに泣なく事ことなからむ

永とこ久しへの生いのち命たも保たもちてこの郷さとに

われは榮さかえむ國くに津つ神かみ等たちと

曲まが津つ見みの襲おそひ來きたらば眞ま火ひもちて

放はなり退やはむ力ちからおぼえし

比ひ女め神かみの神みこと言こと畏かしこみ御みふ舟ねい巖いはの

あたりの魚うろ族くづ永と久はにとらさじ

空そらは晴はれ地ち上じやうは夏なつの風かぜ吹ふきて

心こころ清すがしも比ひ女めの出いでまし

比ひ女め神かみの教をしへたまひし御みめ惠ぐみを

四よ方もの神かみ等たちに分わかちよるこばむ

この國くに土には葦あし原はらの國くにと昔むかしより

たたへ來きたりし常とこ闇やみなりけり

常闇とこやみのこの葦原あしはらも今日けふよりは  
眞火まひの力ちからによみがへるべし  
火ひと水みづを與あたへ給たまひし比女神ひめがみの  
惠めぐみは永久とこはに忘れわするべし  
比女神ひめがみの惠めぐみを永久とこはに忘れわすれじと  
宮居みやゐを造つくり齋いはひまつらむ』

斯かく宣のり終をへて、狹野さぬ比古ひこは數多あまたの國津神くにつかみを率ひきゐて、眞賀まがの湖邊こへんに新あたしき清すがし  
き宮居みやゐを造つくり、朝香比女あさかひめの神かみの幸さちを祈いのるべく、主スの神かみの神靈しんれいを祀まつり、相殿あひどのに朝香あさか  
比女ひめの神かみの神魂みたまを合あはせ祀まつりて、朝あさな夕ゆふな國津神くにつかみは交かはる交がはる奉仕ほうしする事こととなりぬ。  
朝香比女あさかひめの神かみは再ふたび駒こまに跨またり、この部落ぶらくを立たち出いでむとして御歌みうた詠よませ給たまふ。

□ いざさらば狹野さぬの小郷をさとに住すみ給たまふ  
國津神くにつかみ等に暇いとまを告つげむ

これよりは吾西方の稚國土を

さして進まむすこやかにあれよ』

狹野比古は別れを惜しみて歌を宣る。

比女神の功たふとしせめて今

一日をここに止まり給はれ

國津神の生命の糧をたまひたる

女神に別ると思へばかなし

國津神諸々ここに集まりて

公の旅立ち惜しみて泣くも

狹野の郷の救ひの神と現れましし

比女神の旅を止めたく思ふ

とこしへに主の大神と諸共に

公きみが神魂かみたまをいつきまつらむ<sup>㊦</sup>

朝香比女あさかひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 國津神くにつかみの心こころは悟さとらぬにあらねども

御子みこ生うみのため止とどまるべしやは

氣魂からたまをもたせる汝等なれら國津神くにつかみよ

いたづきもなくまめやかにあれ

吾われこそは主すの大神おほかみの御水み火いより

生うれし神かみぞ身みにさはりなし

いざさらば愛めぐしき國津神等くにつかみたちよ

われは進すすまむ永久とほに榮さかえよ<sup>㊦</sup>

狹野比古さぬひこは別わかれ惜をしさに又また歌うたふ。

□ かくならば止めむ術もなかりけり

國津神等と神靈に仕へむ

願はくば御供を許し給へかし

この行先の曲津しげければ

玉の緒の生きの生命をすつるとも

比女のためには惜しからざるべし

今日よりは御供の神と仕へつつ

比女神のために従ひ行かむ

朝香比女の神は微笑みながら、

□ やさしかる狭野比古の心うべなひて

今日よりわれの供を許さむ

狹野比古は喜びに堪へず、

比女神の許しありけり國津神よ

神の宮居に清く仕へませ

いざさらば御供仕へむ朝香比女の

神よ御馬に鞭うたせませ

朝香比女の神はここに狹野比古を従へ、晴れたる大野ヶ原を、駒を竝べて勇ましく進ませ給ひける。

(昭和八・一二・八 舊一〇・二一 於水明閣 谷前清子謹録)

~~~~~

靈界物語 第七六卷 天祥地瑞 卯の巻

終り